
闇色の二重奏

まーや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇色の二重奏

【Nコード】

N0544X

【作者名】

まーや

【あらすじ】

望んだのは平穏で平凡な一生だった。夢は小学校の教師になること。それなのに気が付いたら全く知らない場所で、目の前には金髪碧眼美女が一人。しかも僕の母親と来た。いやいやいや。僕の名前は【橋本誠也】で決して【ダット】なんて名前ではなくて 唐突に異世界に放り込まれ、混乱する青年(?)の成長記。一人称で不定期更新。

いきなりな急展開

頭の周囲、で脈が打っている感覚というのがわかるだろうか。

よくよく考えてみると気持ちが悪いが、こめかみの辺りがピクピクする状態によく似ている。それに合わせて頭が痛い、と後頭部をさすればこぶが出来ていた。

そりゃそうだ。

なんとたつて、僕の背中には堅い床。

理由は推して知るべし。

当然転けて頭を打ったからという簡単で単純なことだった。

そして。

「やだ、ちよつ。大丈夫？」

僕をのぞき込むのは金髪碧眼美女。

お互いの息が触れ合う程度の距離に顔をつき合わせている。しかも、彼女が僕の上に被さった状態で。

うわあ。何この状態とか思っていたら、何気なくヤバイ状態なことに気がついた。

彼女のワンピースの隙間から微妙に胸の谷間が見えている。

かなり唐突ではあったけれど、これって男としては鼻の下を伸ばしてもオツケーなシチュエーション。だよな。

更に言えば、フラグっばいよな。これ。

しかし生憎とマジマジと見て頬を平手で叩かれるなんて趣味はないので。

「えー。ヘイキなので。とりあえず僕の上からどいて頂けませんでしょうか？」

とりあえず、そこから視線を逸らせて紳士的対応にしてみました。まあ、こんな美女に対してぶしつけに胸の谷間見てました。なん

てとても格好がいいとは思えないし。

あ、でもちらっと見えたな。でも、バレたら印象悪くなりそうなのでそうならないようスルーする選択を取る。

「あれ？」

なんでか不思議そうな顔されたけど。

「どうして敬語なの？」

あれ、それが原因？ って、いいからとりあえず退いて欲しい。とお願いしたらすんなり退いてくれた。

よし。これでひとまず大丈夫、と。

では、改めて状況確認しようか。

体を起こして立ち上がる。とりあえず一番痛いのは頭痛。疼いているという感じに痛い。あとは……うん。お尻とか背中もちょっと痛い。

多分受け身も取れないままがつり倒れてしまったんだろう。

先程の状態から見ておそらく僕は彼女にぶつかり、そして押し倒された。と。

うん。なんていうかダブルで美味しいシチュエーションだったよ
うだ。

まあ、その分体のダメージも大きかったようだけど。

そんなことを考えていると。

「ねえ、大丈夫？ やっぱり頭打ったところが痛むの？」

本気で心配そうな顔をして腰を屈める金髪碧眼美女がいた。

おっと。うっかり思考の世界に行きかけていた。

「あ、大丈夫です」

僕は金髪碧眼美女を見上げて……ん？

見上げて？

あれ。なんかおかしい。

頭の中で、警鐘が鳴る。というのはこういうことを指すんだろうか。

違和感にふと周囲を眺めて、僕は肩の辺りにあるテーブルに気が

付いた。そのテーブルはかなり大きく、備え付けてある椅子もまたそれに合わせて大きい。

そう。僕を見つめる金髪碧眼美女がぴったり丁度と思える大きさで。

「なにこれ、巨人の国？」

思わず洩らしたのはどこかのおとぎ話を思い出したからだったが。

「ちよつ。ダット!？」

金髪碧眼美女は蒼白になった。

あれ。ちよつと待って。僕なにかした？

「や、やっぱりさつき頭売ったのが原因なのかしら。ど、どうしましょう。お医者様？　そう。お医者様呼ばないと駄目かしら？」

なにやら慌ただしくなって参りましたが、彼女がどうしてそんなに慌てるのかさっぱりです。

多分おそらく、いや、絶対。僕に原因があることは間違いないけど。

いや、それにしても妙だ。

どうしてこの金髪碧眼美女はこんなにも僕のことを気にかけるんだろう。

他人なのに。

「い、いえ。まずあの人に言うべきなのかしら。ああああ、どうしたらっ」

「あの」

控えめに声をかけてみる。が、聞こえていない様子。

仕方がないので、蒼白になった頭を抱えてオロオロしたじめた金髪碧眼美女のワンピース。その裾を引っ張ってみた。

「あーのー」

少し大きめの声で。

そうしたらようやく彼女は気が付いたみたいで、僕の方を向いてくれた。少し涙目になっているのがいたたまれないけど。

でも疑問をちゃんと明らかにするのが先だ。

けど、思えばこのときも少し考えて発言するべきだったのかもしれない。
それでも、このときはこれしか考えられなかったんだから仕方ない。

「お姉さん、誰？」

ええ、浅はかでした。よもやそうなるとは思ってもみませんでした。

完全なる予想外の展開が僕を待っていた。

結論から言つと。

お医者様と呼ばれました。

さらに。

「はい、君の名前は？」

「橋本誠也」

「年は？」

「二十歳」

「出身地は？」

「……日本だけ」

白衣は着ていないけど、医者らしい中年の小父さんにごく当たり前の質問をされたので返答したら、金髪碧眼美女に泣かれました。

泣かれる覚ええないのに、どうしよう。

その考えが間違いだとは、今の僕には知りようがなかった。

状況整理

ぶっちゃけて言っと。

一、どうも金髪碧眼美女は僕の母親らしいです。

二、でもって、僕は今十歳を迎えたばかり。

三、名前はダット。ダット・クリークス。

四、出身地はジードリクス王国のカーライルという町。ちなみに今いるのもココ。

五、ってことはここは日本ではないわけで、じゃあ何処だっけとになるわけですが。

六、……………ここ何処？

それを言ったら、また金髪碧眼美女に泣かれることになるから言わないけど。

でも、僕だっけって混乱中だ。

気が付いたら金髪碧眼美女と一緒に床に倒れてたみたいだし、なんでか周りの物は全部大きいし、よくよく見たら全然全く知らない場所だし。

「うーん。記憶喪失、だと思っんですけどね」

そう言っただけで唸っているのは僕を見てくれた医者だった。

「全く違う人間だと言われたのは初めてですよ。ええ。本当に。普

通は名前も年齢もわからない状態のはずなんですが……」

うん。その意見には賛成だよ。お医者様。

普通の記憶喪失ならね。

でも、僕の場合はおそらく違う。

自分でもよくわからないけど、おかしいとは思っけれど、自分の顔を手鏡で見せられれば、そこまでされればわかってしまう。

髪の色こそ黒だが、顔たちは正に金髪碧眼美女を幼くしたようなあどけなさを宿した少年そのもの。

平凡な黒髪黒目は一体何処へ行ってしまったのか。

というぐらいの変わりようだった。

もちろん声だって変声期前の子どもなわけで。

つまりこれは。

「生まれ変わったとか、そういうオチ？」

それともどっかの少年に取り憑いて体でも奪ったか。

うん。後者だったら物凄い罪悪感ありまくりだ。

っていうか、僕、それだと死んだことになるのでは……？

「いやいや待て待て」

頭を振って考え直す。

そもそもどうしてこうなった？

僕はこの場所にいるという自覚が出来る前はどこにいたのだろうか。

まずはそこからだ。

ということ、こうなる前の記憶を引っ張り出すことにした。

まず、僕の名前は橋本誠也。年は二十歳。職業は大学生。

要するに、学生だったわけだけ。

将来の夢は小学校教師。

地味で、平凡で、当たり前前の生活がしたいと望んでいた。

他の連中は逆玉で金持ちになる海外でスロット当ててやるとか、冗談風味にでかい口叩いてたけど、就職が世知辛いこのご時世。そんなギャンブルめいた危ういことをする勇氣も志も持たない僕には遠い話だった。

それを「意気地なし」だの「タマなし」だの揶揄されることもあったけど、それなりに楽しい学生生活を送っていた。

まあ、大学行く条件に学費の半分は自分で出す。って約束してたからバイトもいろいろしてたけど。

そこそこ充実した毎日だったんじゃないかと思う。

そう。至って平凡な大学生活をしていたはずだったんだけど。

「お、いたいた。よう。橋本」

講義終了後にやってきたのは、今時のピアスやらファッションに身を包んだ女子からも人気の高い男。

名前は神谷修平。

いくつか僕と同じ講義を取っていて、隣に座ることも少なくない。今のところは友人未満のよく話をする知人である。

その容姿のごとくちゃらんぽらんに見えるが、実は結構真面目で講義をさぼっているのを見たことがない。のに、遊びにも手を抜かない器用な男。というのが僕から見た彼の評価だ。

「あ、神谷。どした？」

気が付けば毎回違う女子が隣にいる。そんな彼に相応しく今日も今日とて見知らぬ女子が一人側に立っていた。

今日日珍しく髪を染めていない黒髪女子である。しかも、今まで神谷というこの男が連れ歩いていたコンサバ系統の女子ではない。

「宗旨替えした？」

思わずそう問いを発してしまうほど、彼の好みには見えなかった。全身を黒で埋め尽くし、おおよそ地味めな独自ファッション。顔は美人だが、ちょっと目がきつい。

うーん。黒でゴシッククロリータだったか。

そんな連中がうつうつしているのは見たことあるが、その辺とはまた一線を画した雰囲気がある女子だ。

「あー、違う違う。この人は法学部の伏見先輩。お前に用があるんだと」

「僕？」

先輩で、僕に用とは一体なんだ。

まさか告白？

いや待て。

僕は彼女を知らない。というかここで期待はいかんだろう。

意識して実は違いましたじゃ、痛い。痛すぎる。

「じゃ、紹介終了。ってことで。オレはお暇する。後で成果を報告しろよー」

神谷の方はどこかおもしろがってさっさと退場。

アイツ、今度合ったらシメテヤル。

結局残されたのは僕とその伏見先輩という女子だけ……ではない。現在の場所は講義終了後の教室である。当然周囲には人の目が。

流石にここで告白とかはないはずだ。よほどの物好きなら別だけど。とか考えていると伏見先輩が僕がいる方向に動いた。

「やつぱり、あなただわ」

切れ長の瞳が僕を捉える。

正直に言っただろうか。

僕も彼女と同じ目の色のはずなんだけど、異様に怖い。なんでかわからないけど、ホントに。マジで。

目が据わっているわけでもない、楽しんでるわけでもない。あえて言うなら、他の奴らにあるような感情が見えないと言っべきか。そんな彼女の目に捉えられて動けない僕の目の前に伏見先輩は立つ。

そして。

「気をつけて。あなた、さらわれるかも」

予想外の言葉は発せられた。

「特に雨の日は危険。出かけない方が身のためよ」
あまりにも唐突すぎてその後は声が出なかった。
というか、なにそれ。

予測の範疇にない斜め上の《告白》は状況を飲み込もうと混乱する以外、僕の全ての反応を奪った。

「じゃあ、忠告はしたわ。無駄かもしれないけど」

用は済んだ。とばかりに僕に背を向けると去っていく先輩。

呼び止め、問いかける間もない。

「……何アレ」

とりあえず、周囲の講義仲間に問いかけてみたけれど。

「俺らが知るわけないじゃん」

はい。その通り。

だけど、後になって思えばこれがきっかけというか原因だったんではなからうか。

僕の記憶が途切れているのはこの翌日。

彼女が言う雨が降った日だった。

天気予報

奇妙な先輩に出会った翌日の天気予報は曇り。

ちなみに降水確率は午前中は三十パーセント。午後は五十パーセント。

家を出るときに「傘を持っていきなさい」と母親に持たされたわけだけでも、僕の心境は複雑だった。

家を出て空を見上げる。

雲は多いが、晴れ間も見える六月独特の天気だろう。要は梅雨。

今日の講義は教授のご都合で午前中のみ。

例の先輩に言われたからというか、なんというか。気分的に行きたくない状態だったが、学業は疎かにしないと密かに立てた誓いもある。

伊達に小学校、中学校、高校と皆勤賞を取ってきたわけじゃない。それにここまでこう来ると大学もやってやるう、って気にならないだろうか。

目指せ、大学も皆勤賞！

……うん。こう、流れるにね。

ともかく、現状大学を休むという行為をするつもりはなかったし、夕方にはバイトが入っているし、家を出ないわけにはいかない。

それに、午前中ぐらいは雨大丈夫っぽかったし。

っていうか、なんで僕あの先輩の言うこと気にしてるんだろう。

「いやいや、あんないきなりオカルトっぽい電波な話……」
実際にあるわけない。

あの先輩の目は怖かったけど。

そんなわけで、大学に行って、講義を受けて、午後は適当に時間

を潰して、夕方にバイトに行つて。
その間、雨は降りませんでした。

おしまい。

ああ。ホントにこれでおしまいだったら、よかった。
よかったんだけど、そうはならない。

ならなかったからこそ、僕は奇妙なことになったわけで。
雨はバイトの後にやってきた。

「土砂降り……」

朝から晩まで降るはずだった量が全部一度にやってきたんじゃないか……？　と思えるほどに大きな雨粒が凄い音を立てて降り注いでいる。

正直、ビニールハウスとか穴が空いてもおかしくないんじゃないかってくらいに。

その証拠に。

傘を差して一歩外に出た途端、その重量が二倍以上に増えた。

普通なら「トントントン」程度の雨音なのに今は「ドドドドドドド」とまるで滝のような音がする。

雷も光つては鳴り、光つては鳴り。

昔、光ってから三秒以内に音がしたら物凄い近い証拠だって聞いた気がするけど……うん。

空気がビリビリと震えてるし轟音だから耳も痛い。

しかも光ってからいつ鳴るかわからないわけで、構えていてもドキリとする。

いや、別に怖いとかそういうわけじゃないけど。

いつ来るかわからない驚きというのが厄介っただけ。

しかも、気温のせいなのか歩く場所歩く場所モヤだらけ。

視界が悪すぎる。

この状態で歩くのは危険だろう。ということとで近くのコンビニに。

横断歩道も目の前で足早に駆け抜けて……滑った。
しかも道路の真ん中で。

頭に物凄い衝撃を受けたのは覚えている。

実のところそれが最後の記憶であり、現在に繋がる記憶、だった
りした。

「うあー」

ベッドの上で悶える。

なんとも情けない最期ではなかるうか。

いや、あれで本当に死んだのなら。という注釈がつくけども。

この状態を見るに、あの伏見先輩の言ったことが見事に的中した
っぽい。

微妙に違うけど。

それともあれはただの偶然だったのか。

「ダット」

金髪碧眼美女がそんな僕を戸惑いながら見つめている。

あ、ヤバイ。泣きそうな顔だ。

「えっと。よくわからないんですけど。あなたが僕のお母さん？」

「……っ！」

あ、泣いた。

「どうしてこんなことにつ。ああつ。でもわたしが悪いんだわ。慌
ててたから、ダットが部屋に入ってきてたことにも気付かずにつ
かってっ！ ごめんなさいダット！」

大泣きして、ベッドの上の僕にしがみつく。

っつか、痛い。イタ、痛いっば！

この人、凄く力が強い。

胸の辺りが彼女の腕で見事に締め付けられて息が出来ない。

「ちよ、はなし……」

死ぬ。死ぬ。息がっ。

「あー、コホン。おかあさん。息子さんが苦しがっていますので、その辺りで」

ありがとうございます。お医者様。

あなたのおかげで死なずにすみました。

肩を叩かれた金髪碧眼美女ははっと我に返って離れてくれた。

「えー、とりあえず。記憶がない以外は特に問題ないようですね。

まあ、記憶がおかしいというのは……まだ頭を打ったばかりですから混乱しているだけかもしれないし。何日か様子を見てみましょう。時間の経過で記憶が戻る場合もありますし」

「ほ、本当ですか？」

「ええ。もちろんこのままという場合もあり得ますが」

金髪碧眼美女の目に再び涙が浮かぶ。

いや、まあ。なんとなく気持ちはわかるけど、対応に困るのでとりあえず泣くのは止めてもらいたい。

「痛み止めの薬は処方しますので、ひとまずそれで経過を。あとは……そうですね。普段と同じ生活をさせてあげてください。ふとしたことでも何か思い出すきっかけになるでしょうから」

「はい、わかりました。ありがとうございます」

その会話を最後に医者が色々と道具を片づけて出て行く。

金髪碧眼美女もそれを追ったので、現在部屋には自分一人きり。

「……………はー。なんじゃこれー」

未だに痛む頭を抱えて唸る。

どう考えても普通じゃない。

自分の部屋だと言われて連れてこられたこの場所。子供用のベッドとか勉強机つぼいのとかいろいろあるけど、どう考えても【橋本誠也】のものではない。

そして、ベッドが置いてある場所から見える窓の外も見慣れた四

角いビルなど存在しない。

あるのはいつかテレビの旅番組で見たようなヨーロッパで見かける風景に酷似していて、まるでどこぞのテーマパークのようだ。

「わけがわからん」

なにがどうしてこうなったのか。

いや、多分原因はあの雨の日にすつころんで頭を打ったからなんだろうが。

なにをどうしたら自分は十歳で、ダット・クリークスなんて別人になっっているのか。

しかも聞いたことない国で、町で、服を見てみたら完全に昔風味。これで混乱するなという方が無理というもの。

僕、これからどうなるんでしょうか。

誰ともなしに、いきなり放り出された場所に問いかける。

今はそれしか出来ないのが少し寂しくて悲しかった。

驚きはまだ続く

実のところ。

僕が気が付いていないだけで、あとでびっくりすることがまだいくつかりました。

中でも、なぜ最初に気付かなかったのかと思ったのは言葉。

普通に聞いて普通に喋って、それで理解できていたから全然まったく気が付いてなかったんだけど、実は金髪碧眼美女とか僕が喋っていたのは日本語じゃなかった。

金髪碧眼美女で日本語が流暢に喋れるとか、そんな人間が早々いるはずもない。

それに気が付いたのは、僕がというかダットが読んでいたらしい本を見せられた時。

それこそ文字通り、目が点になった。

漢字でもなく、ひらがなでもなく、カタカナでもなく、アルファベットでもない。

強いて言うなら……：ハングル語？ を崩してさらに細かくしたような字が書いてあった。

うーん。わかりづらいか。

例を出すなら、中国の簡略化した漢字を日本の漢字に変換した。とでも言えばいいのか。

ともかくそんな感じで、文法は英語に近い。

完全に見たことない文字だが、しっかりと脳内で読めているのはたぶんこの体がそれを覚えているからなのだと思う。

しかし、それ以上に困惑したのは読んだ本のタイトルだった。

「【魔法基礎読本】」

物凄く嘘くさいと思ったのは僕だけだろうか。

魔法なんて代物は空想の世界の産物だってことは常識。

子供向けに絵でわかりやすく説明されていて読み物としては面白かったけど……とりあえず、適当に目を通してその辺に放置。

何かを期待する目でお母様に見られましたが。ええ、何もありませんとも。

そのあと涙目になってたけどね。

ああ、そつだ。

母親がいるっていうことは、父親もいるっていうことで。

僕、ダットが頭を打って記憶喪失になったという知らせを受けて家に帰ってきた彼は、厳つい顔で、何故か鎧つぽいものに身を包んだ熊みたいな黒髪の大男。

それを見た瞬間凍り付くしかなかった僕は、肩を掴まれ。

「ダット。父さんだ。わかるか？」

ひげ面の彼に迫られました。

厳つい顔にひげ面は、かなり迫力がある。まさに泣く子も黙ろうかという状態。

いや、でも知らないものは知らないわけで。

「わかりません」

素直に言ったらこの人にも泣かれました。

泣する大男なんて怖すぎる。つか引く。

まあ、原因は言わずもがな僕なわけだけど。罪悪感もあるんだけど。でもここで嘘付くわけにもいかないし。

とか思ってたなら金髪碧眼美女も混ざって泣き始めた。

流石に何か言わなきゃ、と思って「ごめん」って謝っただけど。これが失敗だった。

感極まった二人に同時に抱きすくめられて体がみしりと軋みましたよ。ええ。軽く意識が遠退いたとも。

二人とも力が強すぎる。殺す気が。

それはさておき。

新しい情報も含め、もう一度現状を把握するために整理する。
まず、僕の名前はダット・クリークス。

どうにも泣き上戸っぽい金髪碧眼美女が母親で名前はキーラ。
敵めしいひげ面の大男が父親のガリオ。

母親の方は専業主婦で、父親の方は聞いたら町の自警団の副団長
だった。

「自警団ってなに？」

と思わず聞いたら、それも忘れたのかと意気消沈されたが一応説
明してくれた。

その内容は、少しばかり信じがたいものだったけど。

「自警団ってのはな。町を守る雄志の集まりだ。仕事は町の治安を
維持することと、町の外にいる凶暴な魔物から町を守ること」

うん。前半は納得した。

けど後半部分の魔物って何だ魔物って。

「何！？ 魔物のことも忘れたのか？」

すみません。忘れたんじゃないかと、わからないんです。とは流石
に言えない。

「魔物はな、危険なんだ。人間が自分の縄張りにやっつけてくりゃ、容
赦なく襲う。逆に言えば、縄張りにさえ入らなきゃ安全ってことに
なるんだが一概にそうとは言えねえ。はぐれたり、食料がなかった
りすりゃ、人間の住む場所にやってきて人間も襲う。魔物ってのは
そういうやつらだ。姿形もいろいろでな。地を駆ける奴もいれば、
空を飛ぶ奴もいる。水の中にもいるらしいが……オレは見たことが
ねえ。普通の人間にゃ、相手は無理だ。ちゃんと鍛えた奴か、魔法
使える奴が何人かで組んでやらねえと死人が出る。中には一人でや
る奴もいるが、まあそりゃ特別な人間だな」

えーと。

まとめるとつまり、ここは見た目通り日本ではあり得ないわけで。

しかも地球と基本的な部分が違っていて。

日本で言うならいわゆるファンタジー系なアレってことで。

おまけに魔法という言葉まで話に出てきたということは、放置した例の【魔法基礎読本】は実際に役に立つ代物だった、と。

なんかゲームとかでよくある展開になってきた気がする。

「うわぁ」

そう考えたらちょっと鳥肌が立った。

もちろんあり得ないだろ、という方向で。

いや、心も少しは躍ったけどね。

それでも平凡で平穏な日々を満喫したがっていた人間としては勘弁してください、な展開だ。

かといって自分の身を顧みれば、すでにそれが回避できる状況でもないのは明らか。

「つまりはここで生きていくしかない、と」

僕の容姿はすでに【橋本誠也】ではあり得ない。

目の前で心配そうな顔つきの両親の子供。【ダット】でしかないわけで。

未だ納得いかない部分はあるものの、そういうもののだと受け入れなくては生きていけそうになかった。

ただ、この二人にはなんだか申し訳がないような気がしてならないけれど。

「なんとなくわかった、かな」

「そ、そう?」

「二人がお父さんとお母さんで、僕がその子供。お母さんは専業主婦で、お父さんは自警団の副団長。町の外は危険な魔物がたくさんいる」

まずは、ここまでわかればなんとかなる。

あとは徐々に色々覚えていけば、この世界でも生きていけるだろう。

そのための努力は多分必要だけど。

でもその前に。

「ダッター！」

「ちゃんと思いで出してね」

どうやらこの両親には抱きつき癖があるらしい。

これを改めてもらわなければ、知識を得る前に死にそうだった。

とんでもない一日だった。

転んで頭を打って目が覚めたら異世界なんて、漫画の世界だけだ
と想っていたことが実際に起こるなんて誰が思うものか。

僕自身が望んだ平穏で平凡な毎日がいきなり消え去ってしまうな
んて悲しすぎる。

だからせめて夢の中だけでは平穏で平凡であって欲しかった。
欲しかったんだけども。

「こんにちは」

どこに立っているのかわからないような真っ白な夢空間。

そこでの僕はちゃんと二十歳の【橋本誠也】で。けれど、目の前
には十歳の少しおっとり顔の【ダット】が立っていて。

「あれ？」

なんでこんなことに。

いや待て、整理しよう。

これは果たして本当に夢か。

「夢、だよ。ぼくらは眠ってる」
そうかそうか。

じゃあ、目の前にいるのは。

「ぼくはダット。おにいさんも、そう」

「いやいや。僕はちが……ん？」

あれ、今僕声に出してたかな。

「ううん。出してないよ。でも、ぼくはおにいさんと同じものだけ

ら。考えてることは全部わかる」

「うわあ。それってヤバイ。」

全部筒抜け。隠し事不可能。妄想も……いや駄目だな。相手は十歳。危険すぎる。」

「うん。でもどっちもぼくだからあんまり関係ない、かな」

それはそうかもしれないが、って。

「待て待て待て」

今、聞き捨てならないことを聞いたような気がする。

ダット少年よ。まず聞こう。

「君は誰かな？」

「ダットだよ。正確には今のおにいさんが忘れてる、この世界に生まれついた【ダット】の十年間の記憶、だけ」

はい、爆弾発言来ました。

っていつか待って。何ソレ。

「……わからなくは、ないはずだけど」

ダット少年はきよとんと僕を見上げる。

「おにいさんもなんとなく気が付いているはず」

「何を」

「だって、いろいろ考えてたでしょ。自分はその大雨の日に転んで死んで、生まれ変わったんじゃないのかとか、死んで違う世界の

【ダット】に憑依しちゃったんじゃないのか。って」

「あ……」

そう。確かにそれは考えた。

本物のダットはどこへ行ったのか。もしかして追い出したのかもとか。

あまりにもオカルトじみた発想だけど、実際そうだとしたら本人にもその両親にも謝っても謝りきれない罪を犯したことになる。

そりゃ罪悪感でいっぱいにもなるわー。

しかし、目の前には【ダット】と名乗る少年がいて。

「実はね。どっちも正解と言えば正解」

「……は!？」

二度目のトンデモ発言をしてくれた。

「本当に死んじゃったのかはぼくにはよくわからないけど、確かにぼくは生まれて十年間ここで過ごした。向こうの世界の記憶はなかったけど。でもね、ずっと違和感を感じてた。きっとそれがおにいさんだったんだね」

ダット少年はそう言って僕を指示す。

「どうしても、この世界が不自然に見えて仕方なかった。この世界は自分がいる場所じゃないって思ってた。お父さんとお母さんも好きだし、友だちだっているけど。でも自分だけ取り残されてる感じがして。疎外感っていうのかな。こういうの」

難しい言葉知ってるね。疎外感。十歳なのに。

思わず心の中で茶々を入れてしまったが、ダット少年見事に無視

あ、うん。疎外感感じたよ。今。

でも、ダット少年の次の言葉に遊んでいる場合ではないことに気付く。

「ずっとそう考えてきて、考えて続けて。そしたらこうなったんだ。わかる？」

彼が押さえたのは自分の後頭部。

その姿に、僕ははっと我に返った。

まさか。

「頭を打って、思い出した？」

「正解」

ダット少年が笑う。

「【橋本誠也】だった過去をね。それで思い出したんだ。でも打ち所が悪かったせいで【ダット】の十年間が飛んじやったみたい」

だからあの医者言う記憶喪失も正解なのだとダット少年は言う。

「それが、僕？」

「うん」

まさになんてこった。だ。

けれどこれで少し納得もいった。
つまり。

「最初に言ったように、ぼくはおにいさんと、おにいさんはぼく。ぼくは【橋本誠也】の記憶が戻ったことで違和感の理由がわかってすつきりしたし、多分おにいさんもどうして自分が【ダット】なのかこれではつきりしたんじゃない？」

……確かに、そういうことなら大部分の疑問が解消される。

が、それでも納得いかない部分についてはどうだろう。
例えば。

「ここ日本じゃないよな」

「うん。ここはジードリクス王国のカーライル。ニホンって国は聞いたことない」

「どう見ても生活水準が二十一世紀とは思えないんだけど」

「向こうにあったものはほとんどないって思った方がいいかも。キカイとか。その代わり魔法があるよ」

その時点で紛れもなく別世界判定チェック付けないと駄目よなあ。
やっぱり。

「魔物もいるし。その認識でいいと思う」

でも、僕が一番に疑問なのはソコじゃない。

「普通、生まれ変わるって言ったら同じ世界だろ」
そう。コレだ。

輪廻転生とかそういう話は、宗教というか、昔話というか、日本でも色々あるし珍しくない。

だけど、こんないきなり異世界で生まれ変わるとか思わない。

まあ、そもそもが普通こんな記憶があって生まれ変わってるとかいう自体があり得ない状態なんだけどさ。

「受け容れられないって思ってる？」

ダット少年が少し困った顔で僕を見上げる。

う、そんな悲しげな目で見るのはやめてほしい。

「な、納得いかないだけだよ。それだけだから気にするな」

っていつか、なんで僕。自分で自分を慰めるような真似しないといけないんだろう。

「でもそれ、明らかに拒否してるよね」

あ、突っ込まれた。

「やっぱり、向こうの世界の方がよかった？ 帰りたいの？」

「それ、未練があるかどうかってことか？」

「うん」

はつきり聞いてくるなあ。ダット少年。

「まあ、普通に平凡に生きられたら満足だっと思ってたし。その目標に達する前に死んだのはちょっと微妙」

せめて、彼女作って結婚して子供と遊ぶ……ぐらいのことはしたかった。

考えていることが筒抜けだから、ダット少年に呆れられたけど。

「ちよつとつていつか、未練がいつぱいあるみたいに見える。贅沢」
うるさい。それぐらい夢見てもいいだろうが。

「……悪いとは言わないけど。でも死んでるから、意味ないね」

おい。何気なく発言に棘あるな。ダット少年。

「だって、今この世界で生きてるのはぼくだもの」

「う、そうだった」

言つまでもなく【橋本誠也】はすでに死んだ身。主導権が【ダッ

ト】にあるのは当然のことだと今さらながらに気が付いた。

ダット少年。僕が悪かった。

現状を否定するのは、自分を否定することに等しいとやっと気付く。

「でも、おにいさんもぼくだから。気持ちはずっとわかってる。

だから、おにいさんの希望通りにはいかないかもしれないけど。ぼくもちゃんとぼくが生きたいように生きるよ」

それが前世である僕へ向けて出来る唯一のことだから。

最後の言葉は口には出ていなかったけれど、ちゃんと伝わってきた。

まあ、ダット少年が言うように彼も僕だから出来る芸当なわけだ
けど。

「あ、そろそろ起きないと。おとうさんとおかあさんに心配かけすぎたから。あやまらなきゃ」

ダット少年が僕に向かって手を伸ばす。

「……そだな。僕、思いつきり失礼なこと言ったし」

誰、とか。敬語で喋るとか。

あれは正直あの時点でも泣かせすぎたとちょっと反省してる。

ここはやはり、きちんと謝らないといけない。

「行こうか」

僕の手が、差し出されたダット少年に触れ。

夢の世界は消失した。

謝罪と決意

日が昇り、朝日が差し込む部屋の中。

「ごめんなさい」

包帯を巻いた僕が頭を下げたことに、きっと両親は驚いたことだろう。

朝の「おはようございます」の直後である。そこで誰が息子の謝罪を聞くと思うだろうか。

うん。きっと僕がその立場でも驚くと思う。

ごめんね、ホント。混乱させて。

でも、きつとこれから話すことは更に二人を混乱させるに違いない。

だからこれは、それを含めての謝罪だ。

まだあまり動かない方がいいとベッドの上に座る僕に、二人は困惑した顔で話しかけてきた。

「だ、ダット。どうして謝るの？」

「そつだぞ。なんでいきなり」

あ、なんかまた母さんが泣きそうな顔をしている。

昨日の今日だもんなあ。更におかしくなっただんではと心配されても仕方ないかも。

これは早くフォローした方がよさそうだ。

「違うよ。その、ちゃんと思い出したんだ。僕が父さんと母さんの子供だったこと。だから」

「え……？」

「心配かけてごめんなさい」

ぼかん、とただ僕を見つめる二人にもう一度頭を下げる。

両親が息を飲む音が聞こえた。そして、数瞬の間呼吸音も消える。

まるで時間が止まったかのような感覚。

ふう、とまるで呼吸を忘れていたかのように息を吐き出したのは母さんだった。

「え、あ。思い、出したの？」

「じゃあ……？」

「うん。記憶喪失はおしまい」

下げていた頭を上げてにこりと笑ってみせれば母さんの目に涙が溢れた。そのまま父さんに向き直り、二人は顔を見合わせる。父さんの方は……少し厳しい表情だったけど。多分それが、次の行動に繋がったんだろう。

お互いの顔を見て安心したのか、母さんが今にも抱きついてきそうな勢いで僕の方に体ごと向き直る。

けれど。

「待て。キーラ」

父さんがそれを止めた。

その時の顔は厳つい印象に似合いと言っては失礼だが警戒感に満ちていて。

「喜ぶのはまだ早い。ちょっとは疑え」

母さんを諫めていた。

流星は自警団に勤めていることだけはあ。

気付いたかな。

でも母さんと言えば、なぜ止められるのかわからない様子で父さんを見上げている。

「ガリオ？」

「見た目に騙されるな。どうもおかしい」

鋭く僕を睨みつけた父さんは母さんを自分の体の後ろに回す。その目は得体の知れない何かを感じ取っているように見えた。

まあ、中身がちよっと変わったちゃってるから、この反応は正常と言えば正常なんだろう。

むしろ疑わなかった母さんが軽率だったわけだけ。でも、動揺

してる様子だったし、この辺はやっぱり夫婦だから父さんがフオロ
ーしてるわけだけど。

「剣を持ってくるべきだったか」

「ちよっ!?!」

でも待つて。それは物騒だから待つて!

自警団の一員らしい発言ではあるけれど、それはまだ早いから!

「ガリオオ!」

ほら、お母さまもびっくりしてますから。また泣きそうになって
るから!

せめて話を聞け、と僕は慌てて口を開いた。

「父さーん、僕魔物じゃないよ?」

「ふん。証明が出来ると?」

冗談半分に言ったソレに、即座に返答した所を見るとどうやら僕
は魔物か何かだと思われてるっぽい。

失礼な。前世でも人間やってたんだ。と言いたかったけど、現時
点でそれを言うのは無謀っぽい。

それならそれで、別の方法を取るまでだ。

僕が【ダット】であるという証明。

決定的な証拠を突きつけてやる。

「十日くらい前だっけ。旅の傭兵の色っぽいお姉さんにチューされ
てたよね。確か」

効果は抜群だった。

一瞬の間の後。

「え……?」

母さんが父さんの背後から「今の発言はなに?」と目を何度も瞬
かせながら顔を出す。

父さんは、僕が発言した瞬間にはみっともなく口を開けて固まっ
ていたが、すぐに我に返ると。

「お、おい待て」

と、慌てだした。

母さんに対する後ろめたさが、そうさせたに違いない。

何を言っているんだと言わんばかりに父さんが僕を見ているけれど、証明しろと言ったのはあなたですよ。

だから、僕と父さんしか知らないようなことを言うのが一番なんです。申し訳ありませんが、大人しくトドメを刺されてください。

母さんに。

「僕が見てるの知って、慌てて離れてたけど。母さんに内緒だった餡買ってくれなかったっけ？」

「わ、馬鹿。ダット!？」

「……………ガリオオ？」

うん。この言葉がこの世界にあるのか謎だけど。この時の母さんの顔は幽鬼のようだったとだけ言っておこう。

合掌。

すっかり話が逸れてしまったわけだけけど。

父さんが本来彼より弱いはずの母さんに打ち負かされる光景を見終わると、ようやく落ち着いて話が出来そうな雰囲気になってきた。

「まず、父さんが気になってることだけど」

警戒心がまだ完全に抜けたわけでないことは、父さんの引き結んだ唇からも見て取れた。

母さんはその隣で自分の腕と父さんの腕を組み合わせて不安そうに僕を見ていた。

「たぶん、僕の口調が変わったから警戒してるんだよね」

前世の記憶が戻る前。

彼ら二人を呼ぶときは「おとうさん、おかあさん」と呼んでいた。しかもこんな風にしっかりとした口調で話したことはなかったから、父さんがそれに警戒感を露わにしても何らおかしくない。

外から見れば、それこそ人が変わった。別人になったと言われるような状態だ。

たぶんそれで剣を取ろうとしたんだろう。
もしものことを考えて。

「【魔物憑き】」

僕が呟いた言葉にびくり、と母さんが反応する。父さんの眉が動いたのも僕の目はしっかりと捉えていた。

「かもしれないって思ったんだよね」

「……そうならば、殺すしかないからな」
だろうと思った。

【魔物憑き】とは文字通り魔物に取り憑かれた人間のことを指す。この世界には幽霊のような肉体を持たない魔物も存在していて、武器は用を為さず、魔法でしか消滅させられない。

しかもその食料は人間や魔物の【生氣】。そしてそれを奪われた生き物は、例え一時生き延びようとも必ず死に至る。

そんな魔物が人間に憑くとどうなるか、逸話は山ほどある。

例えば村一つ滅ぼされたとか、一国の王様がそれで殺されたとか、それで危うく戦争になりかけたとかだ。

子どもを脅かしたりする教訓とかにも使われるので僕も他にいくつかは知っている。ちよつとトラウマになるくらいには。

ちなみに、取り憑かれた人間は見た目はみんなと同じだから、気付かれにくい。

ただ、人が変わったようになるので近しい人間なら妙だとは感じるそう。

父さんが僕に対して警戒感を持った一番の理由はこれだろう。間違いない。

「でも僕死んでないし」

心臓は動いているし、体も温かい。

【魔物憑き】になった人間は真っ先に【生氣】を奪われて死者となるから、ここはしっかり否定しておかなければいけないところだ。

はい、と手を伸ばすと父さんがなにやら慎重に構えた。
うん。警戒するのわかるけどさ。

「昨日思いつきり抱きしめておいてそれはないんじゃないの？」
それこそ死にかけるくらいまでやられたのに今更だってば。

「む……そうだったか？」

ああもう、白々しいつ。

それでもまだ油断ならなと思うているのかゆっくり差し出され
たごつごつした手。それを僕は思いきり力を入れて掴んだ。

ほらあつたかい。

僕が睨むと難しい顔をされた。

そうだろうね。じゃあ、なんでだっって感じになるよね。

「僕がこうなつた理由、これから話すよ」

多分【魔物憑き】の方がまだ理解しやすい話だろうけど。

ひとつひとつ丁寧に話してもいいけど、それだと時間がかかりす
きる。

わからないところは聞いてもらえばいいわけだし、信じてもらえ
ないときは……あ、どうしよう。

そこまで考えてなかった。

「ダット？」

急に考え込んだ僕の耳に母さんの不安げな声が届く。

まいったな。昨日からこんなのばかりだ。ちよっと嫌気がさす。
家族なのに。

「ああ、うん。とりあえず聞いてもらってそれからだね」
後のことは後のこと。

僕はそうして口を開いた。

「僕はね。前世の記憶があるんだ」と

謝罪と決意（後書き）

10/8 少し修正かけました。

家族と安堵

前世ではこことは違う理の場所で生きていたこと。
頭を打って死んだらしいこと。

そしてまたこの世界で頭をぶつけてそれを思い出したこと。
全てを話し終えて両親が取った行動は。

「「はあ」」

何故かため息だった。しかもダブルで。

え、何で？

そこでどうしてため息がでるの。しかもさも呆れたように。

僕が意を決して話したっていうのに、この反応はどう取っていいの
かこちらも困る。

しかも第一声は。

「なんだか、心配して損をした気分なのはなぜかしら」

「あれだけ気を遣って来た原因がコレとはなあ」

……ナンデスカ。ソレ。

「え、と。父さん。母さん？」

なんとなく理由を聞くのが怖いけど、聞かないと多分話が進まない。
い。

恐る恐る問いかける。

「今の話、わかってて言ってる？」

自分の子供が実は別世界の人間の生まれ変わりでした。っていう
結構ハードな話だったはずだけど。

二人は夫婦らしくお互いに通じ合った絶妙なコンビネーションで。

「そうね。正直なところ、まだ戸惑っているんだけど」

「ああ。信じられんと思うところもないわけじゃない。だがなあ」

「ねえ」

顔を見合わせて、またため息を吐いた。

ねえ。ちよっと待って。だから何なの、そのため息は。

そんな僕の心の声はどうやら顔に出ていたらしい。

母さんは自分の頬に手を当てて、父さんは肩を落としてつつ、なんとも言えない表情でこう言った。

「だって、ね。前世なんて言うからってつきり女性を巡って命を懸けた決闘があったとか」

「戦場で華々しく散ったとかそういう話じゃないかと期待してたんだが」

……………あれ？

ちよっと待って。何ソレ、って。

「雨の日に滑って転んで頭打ったじゃなあ（ねえ）」

見事に揃ったハーモニー。これぞ夫婦の絆がなせる技か。

イヤ、違う。激しく違う。

ソレ、なんか考えるトコ違わくないですか？

さっき僕が話したのはもっと重大な事だったはずですが。

「うちの子はそんなに間抜けだったのかと思うと……………はあ」

いや、だから、ってまたため息吐いた上にハモってるし。

すっごい秘密を暴露しました。って気分だったのに。台無し。

言いたいことはわかるんだよ。すごく。

雨で、水たまりで、滑って転んだのが原因なんて、そりゃ僕だって呆れる。

そんな死に方が間抜けだったことぐらい嫌というくらい承知してる。

でもさ、まさか僕が前世持ちだったっていう事実より、死んだ原因の方に食いつくとは思わないし。

しかもその間抜けさを実の両親に面と向かって言われるのも結構凹む。

……気持ち悪がられるよりは、マシなんだけど。

「とりあえず、お前の言いたいことはわかった」

ちよつと泣きたくなってきたところで、落胆の表情を隠さずに父さんが声をかけてくる。

「まあ《魔物憑き》じゃないならそれでいい。実際は二十歳も過ぎてるのかも……その話し方なら納得できないこともない。異世界から来たらしいというのも、信じがたいが多分本当なんだろう」

「え？」

「お前、時々寝言で俺たちの知らない言葉を呟いてたからな。起きてるときもぼーっとしてる時とか話しかけたら使ってた。俺が傭兵として旅をしていた時でもあんな言葉を使う人間はいなかった」

え、僕そんなことしてたんだ？ 記憶にないけど。

それは初耳。と目を丸くするとぼん、と頭を撫でられた。

「多分無意識に、だったんだろうが。記憶がなくても、ちゃんと心にはそれが残ってたんだな」

父さんの言う通りかもしれない。

この世界で生まれてからの十年の間に感じていた違和感。

それが僕自身の前世。異世界のことだったわけだから、無意識にそっちの言葉を使っても不思議じゃない。

今だからわかることだけだ。

でもそっか日本語か。長らく使ってないし、使う予定もないだろうけど。でも寝言でも喋ってたってことはもしかして使える？

思い立ったままに、口を開く。

『ぼくーが、使ってたの、てこーい言葉だた？』

あ、意外とはつきり発音できた。

微妙におかしいけどそれは発音の仕方に慣れてないからだろう。舌の使い方とか違うし、外国人が喋ってるみたいだ。

実際今はそうなんだけどさ。

今言ったそれを今度はこちらの言葉で父さんに聞いてみる。

「うーん。まあ、そんな感じが」

寝言でしか聞いてないし、意味も意味もわからないからあまり自信がないらしい。

だけど、この世界で生きるなら使わない言語なわけだし、特にわからなくても問題はないは……「ぐうー」……ず。

おっと、これは。

「「「あ」「」」

うっかり親子三人の声が八モった。

視線の中心にいるのは、僕でそのお腹。

「……お腹空いた」

まあ、朝ご飯も食べずに話し込んでいればこういうことも起こるわな。

恥ずかしいけど。

「あらあらあら。大変。すぐ支度するわね。あ、ガリオ。今日は自警団の仕事は？」

「あー、一応休むかもしれないとは言ってるがあるが、ダットがこんな感じなら行ってよさそうだなあ」

あっという間に日常会話に立ち戻ってしまった。

「僕、手伝おうか？」

あまりにもいつも通り過ぎて思わず申し出てしまったが。

「「怪我人は大人しく寝る！」」

怒られてしまった。

そうだった。頭打って記憶喪失になってたんだった。

微妙に痛む後頭部を撫で、苦笑する。

両親が去り、すっかり静かになった部屋の中。

「よかった」

ベッドに横になった途端安堵のため息が出て、僕は目を閉じた。そのまま昼まで眠ってしまったのは、ごく愛敬である。

家族と安堵（後書き）

次は閑話（母視点）です。

閑話 「母の不安」

わたしの息子のダットはちょっと他の子どもたちとは違って、ひとことと言うと、ぼーっとしていることが多いおっとり系な子ども。人と喋ることが得意ではないけれど、それでも子ども同士で遊んでいるときはちゃんと喋るし笑いもする。

そんな子どもだ。

でも、ここまでなら普通の範疇に入るかもしれない。

わたしの言う他の子どもたちとの違いは別にある。

例えば、彼が一人でいる時。

ふとした瞬間に、中空を見上げて何かを呟く。

すぐ側でそれを聞いたことはないけれど、唇の動きを見ればそれがわたしが知らない言葉だというのはすぐにわかった。

そして、そういう時のダットはとも子どもとは思えない切なげな表情を浮かべている。

ここではないどこかの事を思っているらしいことは遠目からでも感じ取れた。

そんなとき、わたしはつい思ってしまう。

いつか、この子がどこか遠くへ行ってしまふのではないかと。

そんな恐怖が、いつもわたしの胸の奥底に渦巻いていた。

ダットが物心ついたときからそんな子どもだったから、わたしはいつもその姿を追っていた。

目が離せなくて、ダットが子どもではない目をする度に抱きしめるようになった。

ダットに友だちが出来たのは四歳を過ぎてしばらくしてからだ。

特異な子どもだったから、その辺りは不安だったけれどダットが

自分からわたしに「友だちができた」と言ってくれた時にはとても嬉しかったのを覚えている。

それから、だろうか。

ダットが一人で空を見上げることは減った。

けれどそれが全部なくなることはなくて。

印象的だったのは、ダットの五歳の誕生日の翌日だった。

その日は大雨で、雷も鳴って家から出るには危険なため、ダットとふたりで自宅に籠もっていた。

ダットは意外と性根が据わっているらしく、雷を怖がらない。

むしろ興味があるようで、窓の前で光を放つ空を見上げていた。

「ダットは雷が好き？」

それは何気ない問いかけだった。

その直後、わたしは後悔することになる。

ダットは振り返ってにこりと笑つと、まるで昔を思い出すようにこう言ったのだ。

「うん。なつかしい」

この時のダットも、五歳の子どもとは思えないような顔をしていて、わたしはただ「そう」と呟いて抱きしめているしか出来なかった。

この子は一体、何を背負って生まれてきたのだろう。

はじめてそんな疑問がわたしの中を過ぎった。

わたしが今まで以上にダットに構うようになったのはこのときからだと思う。

ダットがわたしの子どもだということを強く刻みつけるように抱きしめ続けた。

七歳を過ぎた頃からは恥ずかしいとすぐに逃げられてしまうようになったけれど。

夫であるガリオオも、ダットの奇妙さを間近で知っているののでわたしの行為をを咎めることはなかった。

むしろ、わたしと同じように積極的にダットと触れ合おうとして

いる。

自警団の副団長をしているガリオは夜中近くに帰ってくることも珍しくない。けれどダットをととも愛していて、帰ってくると必ずダットの部屋に寝顔を見に行く。

そしてたまにダットが寝言で彼の知らない言葉を呟くのを何度も聞いているそうだ。

ガリオはわたしと結婚する前、旅の傭兵だった。いくつも国を渡っているんな国の言葉を知っているけれど、ダットが寝言で呟くその言葉はどれにも当てはまらないとか。

一体どんな夢を見ているのか。

不思議に思っただけとは言わず、何度かダットに夢のことを聞いてみたけれど覚えてないと首を振られた。

そして、十歳を迎えて事件は起こった。

家の中で、ダットとわたしは不注意からうっかりぶつかってしまったのだ。

その結果、ダットは後頭部を強打。

わたしはダットの体の上に馬乗り状態。

ダットの目は中空を見つめており、焦点が合っていない状態だったから慌ててしまった。

「やだ、ちよつ。大丈夫？」

声をかけ、顔を近づけてのぞき込むとなぜか慌てて顔を逸らされた。

そして複雑そうな顔で。

「えー。ヘイキなので。とりあえず僕の上からどいて頂けませんでしょうか？」

やたらと丁寧にお願いされる。

わたしはいつもとまったく違う言葉遣いに戸惑った。

「どうして敬語なの？」

その時はよもやあんな言葉を投げかけられるとは思ってもしなかった。

「お姉さん、誰？」

頭が真っ白になった。

そこから先はよく覚えていないけれど、ダットをベッドに押し込んで、お医者さまを呼んで、更にガリオへ伝言を頼んで。

その果ては。

「はい、君の名前は？」

「橋本誠也」

「年は？」

「二十歳」

「出身地は？」

「……日本だけど」

息子の口から飛び出したのは知らない名前、あり得ない年齢、そして聞いたこともない土地の名称。

頭が真っ白になって、わたしは泣いた。

お医者さまの診断は記憶喪失。

それにしても、奇妙な名前を名乗っていたようだったけれど。お医者さまにもそれはわからないと言われた。

でも、わたしやガリオのことはすっかり忘れてしまっているし、自分の名前や出身地のことも全部聞いたことのない別の名称になっていたのです。そうなるとう記憶喪失だと診断するしかないとのこと。

正直、母親なのに知らない人間扱いされるのは辛い。

しかも、自警団から帰ってきたガリオにも同じような反応をするのだ。

まるで別人になったみたいだった。
本当に、どうしていいかわからない。

頭に包帯を巻いた痛々しい姿。そして記憶の喪失。
涙を堪えることなど出来ずに、泣いた。

お医者さまは、頭を打つて一時的に混乱しているだけかもしれないと何日か様子を見るように言つて帰つていった。

いつ思い出すかもわからないけれど、出来るだけいつも通りの生活をする。

お医者さまの指示従おう、とわたしもガリオもその夜誓つた。
けれど、翌日。事態は急展開を迎える。

そう。思いも寄らない方向に。

朝起きて、夫婦でダットの部屋に入った途端いきなり頭を下げられ謝られた。

「ごめんなさい」

なぜそんな風になるのかわからなくて、ガリオと顔を見合わせる。

「だ、ダット。どうして謝るの？」

「そうだぞ。なんでいきなり」

なんだか嫌な予感して、緩くなった涙腺から滴が落ちかける。
するとダットが慌てて。

「違うよ。その、ちゃんと思ひ出したんだ。僕が父さんと母さんの子供だつてこと。だから」

「え？」

それは思つてもみない喜ぶべきことで「心配かけてごめんなさい」と再び頭を下げるダットが信じられなくて、思はず問いを發していた。

「え、あ。思い、出したの？」

「じゃあ……？」

「うん。記憶喪失はおしまい」

きつぱりと断言されたその言葉にガリオと二人、顔を見合わせる。
記憶喪失の終わり。

それはまさしくわたしが望んでいたダットが戻ってきたということ。

わたしは喜びから今度こそ涙がこぼれ落ちさせた。

これで全部元通りなのだと思うと体が自然に動いた。ダットを抱きしめたくて、行動に移そうとしたその時。

「待て。キーラ」

ガリオがわたしの前に立ちふさがった。

「喜ぶのはまだ早い。ちよっとは疑え」

「ガリオ？」

彼が一体何を言っているのかわからずに、わたしはただガリオを見上げるしかなかった。

「……見た目に騙されるなよ。どうもおかしい」

そう言うとなわたしの視界から、ダットを隠してしまう。

なに？ どういうことなの？

ガリオは冗談でこういうことをする人ではない。

それがわかるから余計に混乱した。

「剣を持つてくるべきだったか」

「ちよっ！？」

「ガリオ！」

物々しい雰囲気を感じ始めた夫をわたしは信じられない思いで見つめた。

何が起こっているのか理解できない。ただ、夫が子どもに剣を向けようとしたことだけはわかる。

その口調は冗談でなく、本気だ。

「父さん、僕魔物じゃないよ」

「ふん。証明が出来るか？」

状況を飲み込めないわたし一人を置いて、二人は向き合い言葉を交わす。それも最も最悪な方向に、だ。

魔物。

この世界で最も危険で最悪な存在。

どうしてここで魔物なんて名称がでるのだろう。

待って。ガリオ。それはどういうこと？

答えを知っているのに、それを出すことが出来ないのはそれを考えたくないから。

そんな殺伐とした空間に風を入れたのはダットだった。

「十日くらい前だっけ」

笑いを含んだ明るい声が部屋を巡る。

「旅の傭兵の色っぽいお姉さんにチューされてたよね。確か」

「え……？」

空気が変わった。

ダットが見上げているのはガリオで、ガリオの気配が戸惑ったものに変化した。

「お、おい待て」

ガリオが慌てて首を振る。

わたしはふと、ガリオを見上げる。顔色がおかしい。

何かおかしい。

たった今ダットの口からもたらされた情報にわたしは疑問を覚えた。

旅の傭兵の色っぽいお姉さん？ しかもチュー！

何ソレ。わたし知らないんだけど。

「僕が見てるの知って、慌てて離れてたけど。母さんに内緒だった
飴買ってくれなかったっけ？」

「わ、馬鹿。ダット!？」

ガリオの態度が明らかにおかしい。

「……………ガリオ？」

どういうことかしら。説明が欲しいわ。

旅の傭兵の色っぽいお姉さんと何を話してたのか教えて？

そんな気持ちを含めてガリオを見上げたら、泣く子も黙る厳しい

大男が面白いくらい顔面蒼白になっていた。

ええ。もちろんしつかり説明を聞かせてもらいました。昔取った杵柄で助言したらお礼にキスされたとか。

それをダットが目撃して、内緒にするようお願いした？

ふふふふ。

素直に言えば少し嫉妬するくらいで済んだのに、息子に秘密にするようお願いするなんて何かやましいことがあったとしか思えない。当然その辺りもきっちり説明させました。

話が思い切り脱線したことに気が付いたのは、ガリオが愛玩用の獣のように部屋の隅で縮み上がってから。

そしてこの件がもしかしたらダットがわたしたちを気遣って出した話題だったのかも知れないと思ったのは、全ての話を聞き終わってからだった。

その後も話は続いた。

ガリオはどうやらダットを【魔物憑き】ではないかと疑ってかかっていたようで、わたしはそれを聞いた途端背筋が凍った。

【魔物憑き】の逸話は捜せばいくらでも出てくる悲劇の話だ。

そうなった時点で憑かれた人間は死ぬ。

そしてその体は【精気】を求める魔物によって操られ、その身を滅ぼされるまで彷徨い続ける。

ダットの記憶喪失がもしその結果だったら？

それを考えると肝が冷えたが、ガリオが確認して違つと知れた。よかった、と胸をなで下ろしたのも束の間。

ダットの口から漏れた言葉の数々は一概には信じがたいものばかりだった。

「僕はね。前世の記憶があるんだ」

一体何を言っているのか最初はまったくわからなかった。

多分、ガリオも同じだったはず。

「前、世？」

「あ、そういうの。こっちではわかるのかな」

「それは生まれ変わり、というやつか？ 人は死ぬと、ある場所へ招かれ、そしてまた人となる。確かどこかの国でそんな概念があると昔聞いた覚えがある」

「流石父さん。うん。そういう認識で間違いないよ」

父と息子で話が繋がって流れていく。

その話ならわたしも知っている。以前ガリオがわたしにも話してくれたことのある話題だ。でも残念ながらこの国にはそういう概念は存在しない。

少なくとも死者は死者であり甦ることはない。とされている。

死んだら終わり。

これが常識で、例外があるとすればきちんと埋葬されなかった死体の主は実態のない魔物になるという程度のもの。

だから、ガリオからその話を聞かされてもピンと来なかったのを覚えている。

それなのに、今ここで息子のダットが自分はソレだと言う。

「そう簡単には信じられないとは思うけど。僕は昔【橋本誠也】という名前の人間だった。年だって二十歳になったばかりで、勉強してて将来は教師になるつもりだった。でも、死んでしまっ。気が付いたら僕は父さんと母さんの子どもだったんだ」

わたしはその話にただ口を開けているしか出来なかったのだけだ。ガリオはちゃんとダットの話聞いてくれていた。

「つまり、お前はその前世の記憶がある、と？」

「うん。そう。僕は【ダット】以外にもう一つ【橋本誠也】ってい

う記憶を持つてる。最もそっちの方は完全に過去の話で、今はちゃんと父さんと母さんの息子の【ダット】だよ。前世の記憶戻っちゃったからしゃべり方はこんなだけど」

あ、と思わず声に出す。

そこでやつとわたしはダットが今までのダットではないということに気が付くことが出来た。

本当ならもつと早く気付いてもいいはずだったのに。

いや、本当は気付いていた。

今ダットの話の中に出てきた名前は、ダットが記憶喪失になった直後に出てきた名前だ。

困惑して、混乱して、泣いてばかりだったために判断力が鈍っていたのだろう。

ようやく繋がった。

冷静になつてよくよく見てみれば、以前と違う表情なのはすぐに気付けたはずなのに。

大人のように見えて子どものような顔にもなる。不思議な雰囲気だ。ダットの周囲には満ちていた。

それは以前からダットがしていた表情にもよく似ていて、わたしはそうかと頷いた。

ダットが他の子どもたちと違っていた理由はこれだったのだ。

「まさかこんな風に記憶が戻るとは思ってたなかつた」

少しだけ目を伏せて微笑むその顔は、大人の顔。

ダットの言うことが全て真実なら、一体彼はどんな人生を送ってきたのだろう。そうしてなぜ死んだのだろう。

そう考えたら、聞かずにはいられなかつた。

「以前いたところは、どんなところだったの？」

「あ、多分ことは全く違う世界かな」

ダットは少し懐かしそうに語り出した。

「全く違う世界？」

「そう。魔法なんて存在しないし、魔物もない。そんな世界だっ

たよ」

なんてことだろう。

全く予想していなかった言葉が飛び出して、わたしもガリオも声が出せなかった。

魔法も魔物もわたしたちにとってはとても身近で危険なものだ。

それが、ない。

だとしたらそこは安全に暮らせるいい場所だということにならないだろうか。

そんなところにいたのに、ダットは二十歳という若さで死んだと言った。

一体どんな状況だったのだろう。

病気だったのか、それともそんな平和な世界でも殺伐とした殺し合いが存在していてそれに参加していたのか。考えればきりがない。

ダットの話は続く。

「代わりに機械っていう、魔法の代わりみたいな便利なものがあったんだ。人間の手助けをしてくれる道具ってところかな。そういうのを作る専門職もあつたりして」

それは道具を作る職人さんみたいなものかしら。

そう尋ねると似たようなものと頷かれた。

「でも、さっきも言ったけど僕はその中で教師になりたくて勉強してたんだ。だけど多分、運が悪かったんだと思う。学費を稼ぐためにバイトしてたんだけど。帰りが大雨で、雷も凄く鳴ってた。傘を差しても全身が濡れるくらいに降ってたから、雨宿りして帰ろうと思つて道を歩いてたら、転けちゃって」

ははは、と恥ずかしそうにダットは笑う。

そして全く持つてわたしたちが思いも寄らない言葉を言い放った。

「多分、その時頭を打つて死んだんだと思うんだ」

それは完全に、予想の斜め上からの言葉だった。

頭を打って死んだ？

わたしは呆然とし、ガリオもまた呆気にとられた顔で固まっていた。

けれどダットはそれには気が付いていない様子で。

「だから結局教師にはなれなかつたんだけど。次に気が付いたらこの姿だったんだ。頭を打って死んだのに、今度は頭を打って記憶が戻るなんて。そこは偶然なんだろうとは思っけどちょっと驚いた」
それはそうかもしれないけれど。

なんだか神妙に聞いていたわたしたちが馬鹿に思えてきて、少し頭が痛くなつた。

まさか、死んだ理由がそんなことだったなんて。

「「はあ」「

示し合わせたかのように、ガリオとわたしのため息がかち合う。
なんてことだろう。

そこでようやくダットは戸惑ったようにわたしたちを交互に見た。
これはわかつていない態度に違いない。

その様子が年相応の子どもに見えるので、それに少し安心しつつも。

「なんだか、心配して損をした気分なのはなぜかしら」

「あれだけ気を遣って来た原因がコレとはなあ」

遠くを眺め、何かに思いをはせる切ない姿。

アレを見て散々やきもきしていたというのに、死んだという理由が『転けて頭を打つたら』なんて拍子抜けもいいところだ。

「え、と。父さん。母さん？」

恐る恐る、といった感じにダットが声をかけてくる。

まるで、ついさつき見たばかりのガリオのようなその態度にわたしは思わず「流石は父子」と少しばかり見当外れな感想をつけた。

「今の話、わかってて言ってる？」

ダットの言いたいことはわかる。それでも母親だもの。例え「前世の記憶が戻りました」なんてことがあっても息子の不安げな表情は以前とそう変わらない。

ダットが打ち明けた話の内容だって、決して軽いものではないことも頭ではわかってる。

でも。

「そうね。正直なところ、まだ戸惑っているんだけど」

「ああ。信じられんと思うところもないわけじゃない。だがなあ」「ねえ」

その最も重要な部分がすっかり『転けて頭を打った』では格好がつかない。

ガリオと顔を見合わせ、お互いに頷き合う。

「だって、ね。前世なんて言うからてつきり女性を巡って命を懸けた決闘があつたとか」

「戦場で華々しく散つたとかそういう話じゃないかと期待してたんだが」

「雨の日に滑って転んで頭打つたじゃなあ（ねえ）」「」

語尾は違つたけど、見事にわたしたちのぼやきは重なつた。

そしてそれは続く。

「うちの子はそんなに間抜けだったのかと思うと……はあ」「」

もちろん最後のため息まで一緒。

ダットはなんだか落ち込んでいる様子だつたけれど、仕方ないわよね。これがわたしたちが感じた正直な感想なんだから。

あれだけ不安で仕方がなかったのに、今はなんだかおかしくて仕方ない。

そこにダットのお腹の無視が鳴って、自然と笑みが浮かんだ。

そうしてわたしたちはダットの部屋を出た。

ダットの部屋は二階。

わたしは朝食の準備のため、一階の台所へ。ガリオも自警団用の装備は一階に用意してあるので一緒に階段を下る。

けれど、和やかに済ませられたのはここまでだった。

いつもの生活が戻ってきたような気がしていたけれど、あることに気が付いたのだ。

にわかには信じがたい話を聞いて、でも嘘とは思えなくて、その中身にちよつと拍子抜けして。

それを真実と認めるなら、多分わたしたちには覚悟が必要になる。

「ねえ。ガリオ」

「うん？」

「大丈夫、よね。あの子」

明らかに他の人間とは違う。その特殊さを背負ってわたしたちの息子はこれからこの世界で生きて行かなくてはならない。

ダットはただでさえ他の子どもたちとは一線を画した雰囲気を持っている子どもだった。

他の子どもたちもそれは察していたようで、ダットの友人と言える存在は現在でもたった二人だけ。

それも子どもらしい部分があったからこそその関係が保っていたわけ。「記憶を取り戻した」というあの状態は、その二人の友人すら遠ざけてしまうかもしれない。

けれど、それだけならまだいい。

ガリオが疑ったように《魔物憑き》だと思われる可能性もある。

もしそう呼ばれたとき、わたしはちゃんとダットを守れるだろうか。

以前のダットに対してでさえ抱きしめる以外のこととは出来なかったのに、実際にそうなってしまったとき、わたしにはそう出来る自信がなかった。

「……キーラ。オレたちが出来ることは今までと同じだ。あの子の

側で、あの子を支える。それだけさ」

「でも」

「大丈夫だ。あの子だってわかっている。それに、オレたちがその理解者になればあの子の負担はきつと軽くしてやれるさ。そう信じよう」

ガリオの鍛えられた大きな手が伸びて、頬に触れる。

「大丈夫だ」

髭に覆われた厳ついと評される顔に笑みが浮かぶ。そのままわたしの顔の位置にガリオの瞳が降りてきて、わたしは静かに目を閉じた。

どうか、ダットに祝福がありますように。

唇に愛しいその人を感じて、わたしはただそう願った。

魔法の勉強を試してみた、の巻

両親に自分の秘密を暴露した翌日。

最低でもあと三日間は安静に。

往診にやってきた医者はその言うて去っていった。

頭の包帯は……まだ取っちゃ駄目だとか。

まあ、痛みもまだあるし、大きなこぶがまだまだ存在感を露わにしている状態だったりするから仕方ないかもしれない。

それに下手に動くと母さんに泣かれるし。

一度、寝てばかりじゃ体が鈍ると言ったら盛大に怒られた。

お願いだから安静に、と母さんに涙を浮かべられたら逆らえない。そんな僕に出来ることはベッドの上で大人しく本を読むことくらいで、だったらと手にしたのは記憶喪失中に一度目を通した【魔法基礎読本】だった。

魔法に関する基礎的な知識や、初歩的な魔法が、あくまでも子ども向けの挿絵つきで書かれている代物だ。

あの時は適当に読み物として頁を捲っただけで、まさか覚えられるとは思わなかった。

だからちよつと感慨深くなるのも当然で。

もし僕がゲーマー気質だったりしたならばきっと狂喜乱舞していたと思う。

ま、生憎そこまですらないんだけど。

苦笑いを浮かべつつ、興味半分で表紙を開く。

一度は目を通してあるので目次を飛ばし、早速【魔法を使うのに必要な物】と書いてある頁を開いた。

そこには魔法を使うのに必要とされるものが絵付きで三つ書かれている。

一つ目は【人の身に宿る魔力】。

これは空気中に存在する【魔素】と呼ばれる目に見えない粒子が人間の体内に入ることによって、発生するものらしい。

まずそれありき、なので魔法を使おうとする者が最初にするのはこの魔素を体内に取り込む練習だ。

が、ここで要注意。

魔法を使用するためにはそのための適正が必要で、これがないと最初の一步も踏み出せない。

僕が住むカーライルという町では十歳になると無償でその判定をしてもらえることになっていて、その判定で適正があると判断されれば【魔法基礎読本】が自動的に貸し出され、魔法の練習をするこ
とが許される。

つまり今この本を読んでいる僕には魔法使いになる適正があるってわけだ。

二つ目。

次に必要とされるのは魔力とは切っても切れない関係にある【魔素】と呼ばれるもの。

これに関しては前述した通りで【魔力の元】として知られている。空气中に大量に存在しているので呼吸するだけで少量ずつ体内に取り込まれ、適正がある人間ならば自動的に魔力に変換されるそう
だ。

ちなみに適正がない人間の場合は、魔素は魔素のまま体外に排出されるとか。

これはうちの両親が該当する。

そして三つ目。

最後の一つは【魔導具】。

魔素が結晶化した石【魔鉱石】に制御を示す【紋章】を刻みつけ加工したもので、魔法の方向性や威力を定めることを容易にし、魔法が使いやすくなる魔法のための補助器具だ。

ただし。

あくまでもこれは補助器具であり、実は【魔導具】がなくても魔法は発動する。

じゃあ、どうして【魔導具】が必要、とされているのかというと。

魔法の成功率を上げ、魔法の失敗や暴走、暴発を防ぐため。

これに尽きる。

ゲームだとカーソルで設定してあっさり魔法は発動するけれど、現実はそのはいかないみたいだ。

使う魔法に込める魔力を決め、方向性を定め、そして制御する。

この工程を経て、更に必要な【呪文】を加えることで魔法というもののは形を為す。

だからそれらを怠ると魔法そのものが不安定なものとなり、発動しない場合もあるが時に暴走や暴発という結果にも繋がる。とのこと。

特に魔法を覚えたての初心者は危険で、うっかり魔法のさじ加減を間違えたために危うく死にかけた。なんて話もあるらしい。

【魔導具】はそれを防ぐためにあると言っても過言じゃない。

まあ、魔法使って大怪我なんて洒落にならないから、「【魔導具】なんて必要ない」って言うような強者はいないと思うけど。多分。

僕もそんなのはごめんだから、【魔導具】はちゃんと持っているというか、この【魔法基礎読本】を貸し出された時点で両親が首飾りの形のものを買ってくれた。

今のところまだ使用する予定はないので、勉強机の引き出しの中にしまっている。

「ダット。いい?」

母さんの僕を呼ぶ声と扉を叩く音が重なる。

「なに、母さん」

本を開いたまま返事をする、扉が開いて母さんが少し困ったような顔を覗かせた。

「ライナちゃんとエイリクスくんがお見舞いに来てくれるけど、どうする?」

それは【ダット】の幼馴染み兼友人の名で。

「あー」

母さんの表情は曇りがちだ。

理由もわかる。

僕が前世を思い出しちゃってるから、引き合わせるのに不安があるんだろっなあ。

その心配も当然のことだ。

僕はもう前の僕じゃない。

だから、以前の僕を知る人はいきなり変わってしまった僕に戸惑うだろうし、下手をしたら父さんが最初に感じたように【魔物憑き】だと怖がられるかもしれない。

だったら前の僕のように振る舞えばいいとも思うけど、それだとどこかでボロが出て結局は駄目になりそうな予感がある。

そうやって相手を混乱させるより、最初から堂々としていた方が僕も気が楽になるというものだ。

流石に父さんや母さんに話したような内容をそのまま言うわけにはいかないから、多少ごまかしたりはすると思っただ。

「まだ具合が悪いから、って言って帰ってもらっ?」

「うっん。それはいいよ。会っ」

「でも……」

「どっせ、このままずっと会わないわけにもいかないでしょ。適当に合わせてごまかすよ。だから平気」

賽は投げられた。

なんて格好つけても仕方ないんだけど、気持ち的にはそんな感じだ。

「心配してくれてありがとう」

お礼を言っと「無理しないでね」と抱きしめられた。

「うん」

ふわりと薫る花のような匂いが、心を落ち着かせてくれる。

「じゃあ、行くわね」

待ち人がいるからか、母さんの抱擁はすぐに終わった。

静かに扉が閉まり、僕は一つ深呼吸する。

あとはもうなるようになれ、だ。

騒がしくなるだろうこの部屋の近い未来。それを思って僕は顔を引き締めた。

幼馴染み、襲来

「よう、ダット。来てやったぞ！」

格好つけ気味の少年の声と共にその扉は勢いよく開かれた。

天井へ向けて真っ直ぐ向いた赤い髪が跳ねる。

四方を白っぽい煉瓦に囲まれた室内が一気に鮮やかさを増し、続けてこれまた華やかな銀髪の癖っ毛の束が二つ。色を添えた。

「ちよつ。このばかエリク！ ダットは病人なんだから、静かにしないとだめなのよ！」

赤と銀。

その二つは賑やかに僕の元へやってきた。

更にその後ろには金色が控えていて、彼女は苦笑すると「あまり騒がないようにね」と注意だけして去っていった。

「ごめん、母さん。この二人にそれは無理。」

「ダット。あたま打ってきおくそーしつとか聞いたけどヘイキか？」

母さんがいなくなつた途端、赤い髪のエリクス、通称エリクがベッドの上に乗り上げてきた。しかも自分で聞いておいて返事も聞かないうちに。

「お、ホータイまいてんの？ どこ打つたつて？」

更に質問を重ねてくるので落ち着かない。

それを咎めるのは銀の髪の少女。ライナの役目。

「ちよつとエリク。病人のベッドに登らないの！ ダットがゆっくり休めないでしょ」

エリクの襟首を掴むとそのまま引つ張り、床に引きずり落とす。

二人は同じくらいの体格なので、難なくそれは成功した。

「いでっ」

鈍い音と共に、エリクがお尻から床に落ちる。

一応マットを敷いてるけどその下は石だから、痛いだろうなあ。

「な、なにすんだよ。このぼーりよく女！」

お尻をさすりながらエリクがライナを睨みつける。

「あんたがダットのベッドに座るからでしょ。ダットは病人。ベッドの上で騒ぐなら帰んなさい」

ぎろり、とライナもまた目を細くする。

いつも通りの展開。

僕は、僕を放り出して睨み合いを始めてしまった二人を見てこっさりため息を吐く。

どうしてかこの二人、非常に仲が悪い。

顔を合わせると何かにつけて言い合いになる言うなれば、犬猿の仲。

だったら一緒にいなければいいのだけれど、気がついたら一緒にいる。

そしてひたすらこれの繰り返し。

「別にいいーだろ。それぐらい」

「よくない！ あんたってばいつもそうやってダットを振り回してるじゃない」

「あー？ おまえだってそーだろー。ダットがおとなしいからってあねき風吹かせてさあ。だからダットがっよくなれねーんだよ！」

「はあ？ なに言ってるのよ。ダットはエリクみたいにガキ大将じゃないの。あんたみたいにになれるわけないでしょ」

「だからって女に守られるのがふっーじゃねえだろっ。だーから、オレがきたえてやろうっしてしてるんじゃない」

「あんたの鍛えるは危ないのばっかでしょ。ダットにケガさせる気！？」

「ケガぐらいどーだっていいっての。父ちゃんが子どものうちはそれが男の勲章だって言ってたぞ」

「それはあんたの家の場合でしょ。ダットはねえ、あんたみたいに

「丈夫じゃないんだから！」

「僕が口を挟む間もない。」

「っていうか、どんどんヒートアップしていつているような気がするから、丈夫になるためにいつもさそってやってんだ。男がひよるひよるじゃカッコつかねーだろ」

「あのね。男がみんなあんたみたいないな人間なわけないじゃない。ダツトはキーラおばさんに似て細いの。センサイなんだって、うちのお母さんが言ってたわ。だから」

「は？ だからなんなわけ。おまえこそ女のくせにいつも人をボコボコなぐりやがって」

「なっ。それはあんたがいつつも失礼なこと言うからでしょ！」

「バカ言うなっ。ホントのこと言ってるだけだろーが！」

「終わりそうないな。この口喧嘩。」

「根っこのところ原因が僕なだけに、僕が止めるのが筋なんだろうけど。下手に割り込むのもキケンな気がするんだよね。だからって放置しておくのもその後が怖いんだけど。」

「ほら、だってもう二人とも握り拳作ってるし。」

「今にもお互い飛びかかりそうな雰囲気……」

「それが失礼だっって言ってるのよ！」

「思った側からライナの腕が飛び跳ねた。」

「あ、ヤバイ。実力行使」

「が、救いの主はいるものである。」

「ノックもなしに部屋の扉が勢いよく開き。」

「ライナちゃん！ エイリクスくん！」

「エリクの脳天にライナの拳が打ち付けられるはずだった所に、鋭く切り込んできたのはウチのお母さま。」

「思わずエリクもライナもそして僕も、開け放たれた扉の向こう側を凝視した。」

その目を見て、僕の脳裏を過ぎったのは【鬼】という言葉。

あー、なんかヤバイ。目が据わってる。

いつもにここにこしてるか、泣きそうにしてるかどっちかの印象が強いけど、実は一家最強の看板を背負うのはこの人だ。

力自慢で敵つい顔の父でさえ、簡単に尻に敷いてしまつう。

今の彼女の顔は、父を尻に敷く時に見せるものに近い。

そう。先日の方のような、である。

「……あ。キーラ、おば、さん？」

ライナが腕を振り上げたまま固まり、エリクもなんだか扉の方向を振り向いたまま静止。

多分だけど、普段と違う母さんに驚いているんだと思う。

「ふふふ。ライナちゃん。エリクスくん」

「ここ、と母さんが笑う。

ただし目は笑ってないけど。

ここにエフェクトなんてものがあつたら、きっと母さんの背後からは黒い何かが出ていたに違いない。

それぐらいに怖い。怖すぎる。

母さんの視線が向けられていない息子の僕から見ても迫力ありすぎだった。

「わたし、さっきなんて言ったかしら？」

びくつ、と二人の肩が震える。

「ダットは今、ケガをしていて安静にしていなくちゃだめなのよ？だから……」

母さんが一歩、部屋の中に踏み入った瞬間だった。

みしり。

僕は確かに床板が軋む音を聞いた。

それはまるで死刑宣告の前触れのように。

「「「「……ごめんなさいいっつっつ……!!」」」」

……そうなるよな。

正義（？）の女神さまに少年少女は平伏するのですた。

あらためまして幼馴染み

嵐が去った。

いや、まだ幾分は残っているけど、少なくとも直前よりはずっとマシな状態だと思う。

最初に来た時よりも幾分縮んだのではないかと思える赤と銀の二人は、母さんが用意したイスに大人しく座っていた。

居心地が悪そうに見えるのは多分母さんのせいだ。

母さんが部屋を出て行ってから、ずっと落ち着かない様子でちらちらと扉の方向を横目で見ている。また騒いだら即、あの状態の母さんが出てくるとでも思っているんだろう。

「え、と。二人とも？」

だんまりが続いたので、僕の方から話しかけると。

「お、おうっ」

「な、なにっ？」

おっかなびつくりで返事をされた。

……トラウマになってなきやいいけど。

そんなことを考えつつ、僕は改めて二人に話しかける。

「そんなに怯えなくても、普通に話をするだけなら母さんも怒らないよっ」

「けど、な」

やはり気になるようで、エリクがまた扉に視線を送る。

「どうしたの？ いつもならこう、だからなんだ。って顔なのに」

「ばっ。おまえ。おばさん相当怒ってじゃん。父ちゃんにしばらくれるよかこえーよ」

「そうよっ。キーラおばさんがあんなに怖いなんてはじめてだわっ」
エリクが焦った表情で、ライナもまたそれに準じた様子で声を出

す。

「うーん。確かにそうだけど、静かにしてれば平気じゃないかな」
さっきのは完全に行きすぎていたと判断されたために起きたことだから、普通にしていればあとは何も言われないはず。

なんだけど。

「ごめんね、ダット。このバカのせいで騒いだりしたから」

「ああ？ 誰がバカだった？」

何かとかみ合わない二人が一緒にいる以上それは無理かもしれない。
い。

エリクの目が鋭くなり、それに合わせてライナの目もまた細くなる。既に二人の瞳には剣呑さが見え隠れしており、一触即発の状態と言えた。

まったく。せつかく消えた火をまた付けるなんて。

流石にもう一度あれをやると今度こそ母は【鬼】と化し、実力行使に出るだろう。

そうなったとき、果たしてこの二人が再起できるかどうか疑問だ。

「あー、もうっ。そこまで！」

呆れと諦めの感情を絡めたため息が、言葉と同時に飛び出していく。

「エリクもライナも、僕そっちのけで喧嘩しない。そもそもの目的からズレすぎだろ」

二人が目を丸くして僕を見た。

多分いつもだったららしい言動に驚いているんだろうけど、まずは喧嘩の再発は防ぐのが優先事項だ。

「ここには僕しかいないからいいけど、もし病院とかだったらさっきので追い出されてるよ。もう少し時と場合を考えて行動できない？」

そもそもなんでそんな仲が悪いのに一緒にお見舞いにくるのか、そこがわからない。

母さんじゃないけど、呆れたくもなるというものだ。

喧嘩をするために僕の来たのではないと信じたいが……

そんな二人を交互に睨むように見れば。

「ダット……？」

「おまえ？」

共に奇妙なモノを見たと言わんばかりの顔で硬直していた。

うん。まあそうだろうね。

以前の【ダット（僕）】はこんな時オロオロと二人を見るのが精一杯で、二人が自然と喧嘩をやめるまでドキドキしながら待っているのが常だった。

人見知りも激しくて、人の顔を見るのも苦手で。

そんな内向的な性格の代表みたいな人間が、いきなり喧嘩に割って入って説教までし始めれば驚くのも当然だ。

「どうしよう。ダットが変」

どこか青ざめたライナの独白が耳に届く。

「ちよつと、まさかエリクのせい？」

頭を抱えるライナに、エリクが「じょうだんじゃない」と応じた。

二人は顔を付き合わせて小声で口論し始める。

「なんでまたオレのせいになんだよ。おまえのせいじゃねーの？」

「ちよ、バカ言わないでよ。そんなわけないじゃない」

「じゃ、頭打つたせいだろ。きおくそーしつらしいし。それでおかしくなったんじゃね？」

ちらりと僕の方に寄せられる視線が二つ。

色々と勝手に想像しているだろうことが、その様子からも見て取れる。

「でも、だからっておかしいわよ。ダットよ。あのダットがよ。あんなしゃべり方するなんて絶対に変」

「あー、まあそうかもだけどよ。前に父ちゃんがきおくそーしつでせーかく変わったりすることもあって言ってたぞ」

「でも変でしょ。あんな別人みたいないしゃべり方っ。どう考えたってダットじゃないわ」

君たち。全部聞えてるんですが？

「二人とも」

声をかけたらびくつ、と二人が肩を震わせた。ゆっくりと二つの顔が同時に僕の方を向く。

何か見てはいけないものを見てしまったという雰囲気、僕は再びため息をついた。

「言いたい放題してるけど、僕の話聞く気ある？」

「え」

「あ」

なんとも間抜けな顔で固まる二人。

「簡単に、だけど説明するよ。僕の性格がどうして変わったのか知りたいんでしょ」

この二人相手ならまどろっこしく考えるよりもはっきり喋った方が伝わりやすい。

ただ、やはり前世うんぬんは伏せるのは決定だ。

完全におかしい人に見られるだろうし、説明してもうまく伝わるかわからない。

父さんや母さんに話せたのは、ごまかすのは難しいっていうのももちろんあつただけど、一番の理由は彼らが大人で両親だったから。

でも今目の前にいるのは【ダット】よりも一つ、二つ年上なだけの少年少女なわけで、彼らに両親にしたのと同じ説明をしたところで理解されるかどうか……

ひとまずは彼らが納得できるような言い訳があれば、それで大丈夫だろう。

僕の提案を受けたエリクとライナが顔を見合わせるときこちなく頷いた。

それを確認すると僕は当たり前障りのないように言葉を選んで形にする。

「僕の性格が変わった理由はエリクが言ってた通り、かな」

「それって、きおくそーしつになったからってことか？」

「多分ね。でも、記憶喪失はもうよくなつたし、記憶の混乱もないよ。ただ、記憶喪失だったときの性格がそのまま残っちゃったみたいなんだ」

「……そんなこと、あるの？」

ライナが真つ直ぐ疑惑の眼を僕に向ける。

彼女は頭がいいから、下手な言い訳では説得できない。けれど、強引に押し通すことが出来れば多少の疑問は残ってもなんとかなるはず。

「僕にもそのあたりのことはよくわからない。気がついたらこうだったしね。それ以外に説明のしようがないんだ。僕だってまさかこんなことになるとは思わなかったし」

そもそも生まれ変わりなんてものが実際に起ころうとは予想外だし、予定外だ。

しかも異世界なんていう全く別の次元に来てしまうなんて、僕にも理解不能な出来事ではない。

だから何かを見極めようという表情のライナの視線は非常に困る。

「あやしい」

「おま……ライナ。ダットがそう言ってるんだからそうなんだろ。別にいーじゃん」

一方のエリクはそんなライナを面倒くさそうに見て肩を落とす。

「ダットはダットだろ」

「そうかもしれないけど」

納得いかない顔で、僕を見たライナは「もういい」とそっぽを向いた。

その後は僕を窺うように見ている目を逸らし、会話にもあまり加わらず。おかげで追い出されるような騒ぎはなかったのだけけど。

面倒なことになりそうな予感に、僕はこっそりため息をついた。

魔法の道は一日にしてならず！

実のところ、この世界での文字普及率はあまり高くない。らしい。小さな村では村長以外誰も文字の読み書きが出来ないなんてことも珍しくないし、下手をすると誰も文字を知らないという日本では考えられないような村もあるみたいだ。

とはいえ、村や町の規模が大きくなればそうも言っていられない。大きな町では文字看板もあるし、無償で文字を教えて貰える場所もいくつかは存在していて、必要ならそこで学び、それ以上のことを学びたいなら国や領主が運営する学校へ行くというのが主流のこと。それには一般庶民が目の飛び出るような金銭が関わってくるから、余程のことがない限り日常生活を送れる程度の文字や簡単な計算を学んで終わり、という感じらしいけど。

ただ、やはりそれは地域事情によって若干異なるようで。カーライルはこの近隣を治める領主の方針もあって、識字率が他の町より高い。

領主が独自に無償の学校を開設していて、誰でも自由に文字や学問を学べるようにしているからだ。

理由は色々とおあるようだけれど、一番の理由は魔法。カーライルの西方には未だ人間が踏み入り難い魔物の領域が存在していて、町の外壁を一步出ればそこはもう危険地帯。町の周辺にはそれほど危険な魔物の縄張りはないが、西方にある山脈に近づけば近づくほど危険度は増していく。一応は境界線として砦が設けられているが、あくまでも境界線だ。完全に魔物の侵入を防げるわけでもなく、それを軽く飛び越えてやってくる魔物もいる為、油断は出来ない。

しかも、武具のみで倒せる魔物だけではないので魔法の需要は高かったりするのだけれど、実際に魔法を使える人材はそう多くない。国によって差はあるが、ジードリクス王国での魔法使いの割合は三人に一人程度。十分に補える人数に見えるが、それを戦場に立てるくらいまで昇華できる人間はほんの一握りしかない。

だからこそ、早期にそういった人材を確保できるようにカーライルでは十歳になる子どもに対して魔法使いの素養があるか判定を行い、適正があれば魔法使いとしての指導を行うことにしているらしい。

ちなみに、僕に貸し出された【魔法基礎読本】はこの備品で、用が済めば返却することになっている。

まあ、【魔法基礎読本】だけではなくて他の教科書類もそうなんだけど。

経費節減というか、リサイクルというか、紙の供給量があまり多くないのも要因か。

現在学校に通う生徒数は二百人弱。完全に自由登校なので日によって人数は異なる。

年齢層は大抵が五歳から十四歳だったが、それ以外でも五十代の孫がいるという人間が字を覚えたいと通っていたり、魔法の基本を抑えたいという旅人が来たりする。

教室もそれぞれ大体の年齢層別になっていて、覚えたい事柄のみを選択して勉強することも可能なので大人から子どもまで様々な年齢の人間が同じ教室に座ることもあった。

【基礎魔法学】の授業はまさにその代表格と言えるかもしれない。学業復帰初日。

学校の敷地内に設けられた訓練場。まるで体育館のような広さの場所に【魔法基礎読本】を手にした子どもと大人、四十人程度が集まっている。

当然その中に僕も含まれているわけだけど。

その中心にいるのは本を持たない三人の大人たちで、それぞれが

【魔導具】を手にした魔法使い兼教師。

「はい。じゃあ、今日の授業を始めるわよ」

最初の声かけをしたのは金髪碧眼の女性だった。緑色のワンピースの上にシヨールを羽織った姿がとても絵になっていて、明るく、人懐っこい性格なので、大人から子どもまで人気がある教師だった。「まずは魔素を集める訓練ね。それから組み分けして、それぞれに合った練習をするから。わたしとフェイル先生。サイラ先生に見てもらって合格が出るまで待機してください」

並んで、という指示に従って生徒が三列にまっすぐ並ぶ。一列ずつ一人の教師が見るためだ。

子どもは素直だから素早い。あっという間に並んでしまう。

僕も遅れない程度にそれに習った。

一方、そんな子どもたちの中に混ざるほかない数人の大人たちの行動はゆっくりだった。しかも体格が違うからそれが目立つ。更に魔法を学びたいのは山々だが、子どもの中に混ざるのはちょっと。という顔を隠さないのも子どもに敬遠される。そしてまた目立つ。悪目立ちしてる感じが。

まあ、そんな大人ばかりじゃないわけだけ。

並ぶのが遅れた大人は一番後ろに回るので時間がかかったが、順番的には前からだし、教師陣はその辺り慣れているので問題ない。

「魔素を集める段階では【魔導具】を意識する必要はないわ。ただ、息をしつかり吸って吐く。自分の周囲にある空気を意識して。目に見えないからわかり辛いけれど、ちゃんと感じられるはずよ。それを自分の中へ引き込むよう想像するの」

初心者向けの説明をしながら、教師たちは前から後ろへ一人一人の状態を見ていく。

慣れない人間には無理だが、長年魔法に携わってきた彼らのような教師だと見ただけで魔素や魔力の流れが見えるらしい。

ただ、それにも才能が必要らしいけど。

「ラウチさんは、もう少し肩の力を抜いてみて。今の状態は取り込

むじゃなくて弾くになっちゃってるから。アーヴィルくんはちょっと慌てすぎかな。もう少しゆっくりと。それだと魔法を使うときに失敗しやすくなるよ。自分をちゃんと制御できなきゃ駄目。スーリくんは……うん。流石だね。前よりずっとよくなってる。この調子で頑張ってる」

的確にそれぞれの注意点を見い出して、指摘していく。

後ろの方に陣取った僕まではまだかかりそうだったが、僕がこの授業で実技を受けるのは今日が初めて。

頭を打って休んでいた間に何度か本を読み返したものの、実践はまだだった。

ほとんどベッドから動かないまま数日を過ごしたわけだから、ちよつとはそういうのをしてもよかつたんだろうけど。

ていうか、試したけどさ。

魔素を集めて魔力に変換するのが全くわからなかつたんですね。

これが。

誰かに聞こうにもうちの両親は魔法使えないし。

こんな感じで魔法を使えるようになるんだろうか。ってホントに思っただし。

胸にさげた【魔導具】を見下ろすとついついため息が出てしまう。でも、ここで悩んでいても仕方ない。

「はい、次」

顔を上げると金髪碧眼の教師の姿がそこにあった。

おっと。もう順番が来たのか。

思ったよりも早く順番が回ってきたらしく僕は慌ててしまったが、彼女の方はそんな僕を笑顔で見下ろす。

それは母の笑みによく似ていて。

「ダット。待ってたわよ」

「シェリナ叔母さん」

実際、母さんの妹なわけなんだけも。

母さんよりも五つ年下だという彼女はまだ二十三歳と若い。十五

歳の時から別の国の魔法学校に留学、三年前に帰ってきた実力者で、現在は自警団とここの学校の教師を掛け持ちしている。

「元気そうね」

右手の人差し指に指輪型の【魔導具】をはめた彼女は視線を僕の位置に合わせると頭をそつと撫でてきた。

「頭を打ったって聞いてちよつと心配していたんだけど」

「あ、うん。心配かけてごめんなさい」

「あら、いいのよ。わたしこそお見舞いにいけなかつたんだもの。謝らなきゃ」

「そんなことは……」

なんて授業とは関係ないことを話していたら近くを通った黒髪の男性教師、フェイル先生に睨まれた。

「シエリナ先生。授業中です」

物凄く生真面目で有名な教師で、しかも神経質。眼鏡かけたら絶対に似合うタイプだけど、生憎とこの先生は裸眼。受け持ちの授業がないときは領主館で秘書的なことをしているらしい。

うん。やっぱり眼鏡があつたら完璧だと思う。

でも、怒らせると面倒なことになりそうな感じ。

その辺りは叔母さんもわかつているのかすぐさま謝罪。

「あ、そうですね。ごめんない」

「公私混同は困ります。そういうったことは授業の合間にしてください」

うわあ。超真面目だし。

フェイル先生はこれ見よがしに嘆息して、自分が受け持つ生徒たちに向き直った。

正直、付き合いにくい先生でもある。

僕と叔母さんの間に気まずい沈黙が降りたが、それはそれ。

「え、と。じゃあダットくん。この訓練は今日が初めてよね。わからないことは多いと思うけどその辺りのことはちゃんと教えるから聞きたいことがあつたら言っつてね」

叔母さんも教師として生徒に教える身だ。切り替えは早かった。僕はそれに頷いて、説明を聞いていく。

「この訓練場には、通常の状態よりも魔素が集まりやすいように【紋章】を敷いているの。だから魔素を感じ取ることが苦手な子でも、比較的簡単に魔素を魔力に変換できるようになっているわ。ここまではない？」

「はい」

「魔素は目では見えないものものよ。魔力もそう。でもそれを感じ取ることは出来るの。魔法を使う人間はみんなの能力を持っているわ。普段は無意識にだけけど、魔素を魔力に換えているの。でも魔法を使うにはそれを意識的にしなくてはいけない。だからまず、あなたにはそれを感じてもらおうね。わたしが見本を見せるから、よく見ていて」

叔母さんはそう言うのと僕から少し離れた場所に立った。

他の生徒も気になるのか、僕と同じように叔母さんを見つめている。

「はい。これが通常の状態。魔素を取り込む前ね。そして……」

叔母さんはリラックスした表情で肩の力を抜くと両手を胸の位置に当てて息を吸い込む。

一瞬、空気が震えたのはわかったが。

「これが魔素を取り込んだ状態ね。この時点で魔素は魔力に変換されるわ」

さつきと何ら変わらない状態で言われて、僕は目を瞬かせた。

「ごめんなさい。さっぱりわかりませんでした。」

それが顔に出ていたらしい。

僕の表情に気がついた叔母さんが唸る。

「もっとわかりやすくするなら、魔法を使った方がいいかしら」

そう言うと少し考えた様子で「これはもう少し後になると思うのだけれど」と右手にはめた【魔導具】を示した。

「いい？ 一度しかやらないわよ」

そう言つと叔母さんは右手を前に差し出した。

【汚れしは堕ちし我が身。歪みしは我が心。我望む。我願う。浄化の風を吹かせたまえ】

今度はわかつた。

叔母さんが呪文を口にする度に空気が震え、叔母さんの方へ引つ張られる。そして呪文が終わつた瞬間、叔母さんを中心にして風が起こつた。

暴風と言わないが、思わず構えずにはいられない程度の勢いで。

「わっ!?!」

「きゃっ!」

何人かの生徒が驚いたように悲鳴を上げる。

ちよつと魔法が大きすぎたらしい。バランスを崩して倒れかけた生徒もいるようだ。

うん。僕から見てもこれはやりすぎだと思う。

叔母さんも予想外だったみたいでちよつと慌ててるし。

そして。

「シエリナ先生!」

またもや声を挙げたのはフェイル先生だった。額に青筋が立っているように見えるのは多分気のせいじゃない。風が収まるや否や、ずかずかと叔母さんに近づきひとこと。

「やりすぎです!」

「うっ。でも、これが一番初心者の子にはわかりやす」

「だとしても、こちらにもひとことあっていいはずです。生徒にケガでもさせたらどうするんですか!」

完全に怒っている。

縮こまって言い訳する叔母さんが最後まで言い終わらないうちに彼女を叱り飛ばした。

「大体あなたはいつも大雑把すぎるんです。あなたの魔法に対する

知覚が優れていることは認めますが、だからと言って感覚だけで魔法を使うことが危険だというのは常識でしょう。それを生徒にきちんと教えるのも私たちの仕事なんですよ！」

「あ、う。は、はい。ごめんなさい」

青筋を立てて怒りを露わにするフェイル先生に、叔母さんがちょっと涙目になって萎れた。

まあ、確かに叔母さん今のはちょっと不味かったかも。

フェイル先生が言うことも一理ある。

学校で教師をするということは、よそさまの子どもを預かるということに他ならない。

子ども同士の喧嘩ならともかく、授業中にケガをさせたとあつては教師としての面目が立たないし、責任問題にもなりうるのだ。

フェイル先生はそれを指摘したに過ぎない。

一応僕も【橋本誠也】だった頃は教師を目指してた身だし、それぐらいはわかる。

フェイル先生はしばらく叔母さんを睨んだ後、彼女の処遇について通告した。

「もう結構です。止められなかったこちらにも落ち度はありますから。ただ、この件はしっかりと学長に報告させていただきます」

「えっ!？」

「せいぜい叱られて反省してください。あ、減給は免れないでしょうね。きつと書類もいろいろと書かされるとは思いますが、自業自得です」

「ちょ、フェイル先生っ!」

「クビになりたいですか?」

それを言われれば、もう黙るしかないだろうなあ。

叔母さんは涙目をぐっと堪えて「わかりました」と頂垂れた。

「では、授業を再開しましょう」

叔母さんを叱ったことですっきりしたのか、フェイル先生の表情はいつもの真面目なものに戻っていた。

が。

「あ、それと」

言い忘れたと言わんばかりに叔母さんを見てこう言った。

「これから先、ダットくんは私が見ます。あなたに任せていたらとんでもないことになりそうですから」

これには叔母さん完全に撃沈。

僕に教えられるって判定が出たときに物凄く喜んでたから、これは何よりの罰だろう。

抗議しようにもフェイル先生の方が先輩になるので、立場的には叔母さんの方が弱い。

「というわけで、ダットくん。よろしくお願いします」

生真面目なこの顔は絶対に今言ったことを実行するに違いない。

多分僕が叔母さんがいいと言っても無駄だ。

「え、と。じゃあ。お願いします」

「ごめん。叔母さん。僕じゃ逆らうの無理。

追い打ちをかけられて膝をつく叔母さんに、周囲の生徒が「哀れだ」と呟いていたのは聞かなかったことにした。

歴史の勉強、感想文

「で、どうだったわけ？ 初めての魔法」

一般の授業を受けるための教室で絡んできたのはエリクだった。エリクは魔法の素養がないため、午前中いっぱい取られていた【基礎魔法学】の授業は受けていない。本人は別にそれを気にしてはいないようだったが、興味だけはあるらしい。

「どう……って。別に。午前中いっぱいずっと魔素を集める練習してただけだよ」

叔母さんの魔法によって一時は大変だったが、その後は普通に授業は進められた。と言っても実技なので最終的には初心者、中級者、上級者と分かれてそれぞれ出来ることをしたただけだ。

僕はフェイル先生の指導を受けて、叔母さんの魔法で感じ取れた魔素が引き寄せられるあの感覚を再現するため、初心者ゾーンで四苦八苦しただけで授業が終わったけど。

フェイル先生に言わせれば「最初の最初はそんなもの」で、あとは繰り返し練習あるのみとのこと。

何度も繰り返し返すうちに覚えるそうなので、気長にやりなさいと言われた。

「ふーん。魔法って面倒だな」

昼食に持ってきた弁当を机の上に出すと、エリクが横に陣取った。「そりゃね。しっかり制御しないと暴走して危ないわけだし。簡単にはいかないよ」

そう答えた僕の脳裏に浮かんだのは自動車だった。

あれもすっかり前を見据えて運転しなければ事故に繋がる代物だ。だからこそルールあり、免許が必要だった。

それと同じで魔法はそう簡単に得られるようなものじゃない。

僕はこの最初の実技授業でそれを実感させられた。

「ま、そりゃどーでもいーんだけどさ」

じゃあ聞くな。と言いたくなるような台詞を吐いたエリクが背後を振り返る。

「あいつ。どーすんの？」

「いや、どうするって聞かれても」

エリクのように振り向かずともわかる、とある視線。

朝からずっと感じるそれに僕は肩をすくめた。

「ライナのヤツ。わかりやすすぎだつての」

そう。視線の主はエリクの言う通りの人物のものだ。ほんの少し視界を動かして、その端から見えたのは昼食らしいパンを銜えた銀髪少女の姿。しかも睨むようにこちらを窺っている。

「朝、おはようって声かけたら逃げられるし。そのくせこっちを窺ってるし。凄くわかりやすいんだけど、ちょっとやりづらいね」

「ま、そんだけセーカク変わってりゃな。こないだ見舞い行った日の帰りがけ、あいつおまえの正体暴いてやるって叫んでたぞ」

「あー、どうも納得してないっぽいな。とは思ってたんだけど。やっぱりそうなるんだ」

実は【基礎魔法学】の間も彼女の視線は感じていた。

ライナも僕と同じで魔法を使う素養を持っていて、彼女の方がそれに關しては一年先輩だ。

僕が前世の記憶を取り戻す前までは「あたしがちゃんと教えてあげるから大丈夫よ！」と息巻いていたのだが……

「すっかり警戒されちゃったなあ」

「そのうち飽きるんじゃない？」

エリクは気楽にそう言うとうちの弁当を食べ始めた。

だといいけど。

ジャガイモに似た芋を蒸かしただけの味気ない代物にフォークを突き刺し、僕はその問題をひとまず忘れることにした。

午後の授業はジードリクスに関わる【歴史】の話で始まった。

ジードリクス王国は元々すぐ北に位置するラグドリアという帝国の領土で、かつては魔物が横行する未踏の地だったそうだ。

それを人が住めるように開拓した人間こそ、ジードリクスの初代女王ルリア・ジードリクス。

【救世の聖女】とも呼ばれる人物だった。

そしてその女王をその横で助けた人物がダードリー・ウィットとカイ・シド。

二人もまた【双黒の比翼】という二つ名を得ている。それが約二百年前のこと。

ジードリクス王国を愛する人間であれば、誰でも知っている英雄物語である。

教壇に立つ年配の茶髪の女性　カリイナ先生と言う　がよく通る声で三十人ほど集まった子どもたちに語りかける。

「北の帝国ラグドリア。彼ら三人は元々帝国の民でした。今でこそかの国は平定を取り戻し、民も穏やかに暮らしていますが、その当時は権力者が弱い者を虐げることが当たり前だったようですね。ルリア・ジードリクス。後の建国の女王は元々帝国貴族の娘でした。彼女が残した手記にはその当時のことが鮮明に記されています。あえてここでは語りませんが、教科書には載っているのです、興味がある人はそちらを読んでくださいね」

カリイナ先生はそう言って途中の内容をスルーした。それも仕方ないというかなんというか。

僕は手元の教科書の抜粋されたその部分を読んで苦笑いを浮かべた。

「平民は奴隷として売買され、粗相をすれば斬り捨てられる。ある夜会では老若男女が地下で賭けをしていた。奴隷同士を闘わせ、殺

し合わせるのだ。親子、兄弟、姉妹。負けた方に訪れるのは死。そこから逃れるために相手を殺す。時には自ら命を絶つ者もいた。帝国の都は煌びやかだったが、その裏では魔物よりも非情な世界が広がっていた』

この教室にいるのは大体が九歳から十一歳までの中間層。

低年齢層の子どもにはちよつと刺激が強い内容だ。

読まずに済ませる気持ちもわかる。

もう少し年上　十二歳から十四歳程度　になると踏み込んだ

授業もするらしいが。

日本だつたら絶対にあり得ない内容だが、この辺は異世界だからなのか、それとも文化の違いだからなのか。

そのあたりのことは置いておいて、有名な建国の女王とその仲間についての説明は続く。

「彼女は、十五歳になると行動を起こしました。帝国を変えるために動き出したのです。けれど周囲の賛同は得られず、窮地に陥ります。反逆の罪を被せられ投獄されたのです。そこで出会ったのがダードリー・ウィットでした。彼もまた現状に意義を唱えた帝国貴族の子息。二人は絞首刑になるはずでしたが、幸運なことに義賊によって助けられます。名はカイ・シド。これが英雄三人の邂逅でした」
ここから先三人は様々な苦難に遭遇し、立ち向かっていくことになる。

脱出先で出会った奴隷扱いの者たちを救出して帝国南部の同じ志を持つ貴族の元へ逃がしたり、助けられずに処刑される場面に出会ったり、悔いている彼らと師匠となる魔法使いと出会ったり、人間の言葉を理解する魔物に遭遇したり。

様々な偶然と巡り合わせと彼らの行動力の結果がジードリクス王国という国を作り上げた。

「元々魔物の領域であったこの地の開拓は、決して容易ではなかったといえます。戦える人間も少なく、死者もまた多く出たそうですが、彼らは諦めずに少しずつ人が生きていける環境を整えていきま

した。そして同じ頃、帝国内でも変化が起こります。帝国の現状に不満を持った地方貴族達が連携して動き始めたのです。その先頭に立った人物が後の新生ラグドリア帝国皇帝ルジュア・ルール・ラグドリアでした」

実はこのルジュアという皇帝、元々帝国の第三皇子でルリア・ジードリクスとは友人で幼馴染みだったらしい。

思想もよく似ていてそのせいで彼は地方に左遷。ルリアたちが追われた後、密かにその跡を追って支援などをしていたそうだ。

ルリアたちの元には続々と奴隷扱いをされていた人間が集まっていた。中には脱走兵などもいたらしい。更には魔物と闘うということもあり、傭兵なども雇うこととなり、気がつけば帝国の一個師団にも負けないくらいの戦力が出来上がっていた。

そうして。

「ルジュア皇帝とルリア女王は同時に立ち上がりました。女王は帝国からの独立を宣言。帝国はそれを認めず、最大戦力で軍を送りました。この間、帝都の守りは手薄になります。ルジュア皇帝はその隙を持って帝都を占領しました。この知らせを受けた軍はすぐに取って引き返しますが、元々民にはよく思われていなかった彼らはこれによって瓦解。敗走することになったのです」

やがて、帝国内での肅正が終わりを見せる頃。

ルジュア皇帝は改めてルリア女王に独立を認めることの声明を発表。

よき隣国であろうことを約定にて制定した。

別に帝国がちゃんと皇帝によって肅正されたんだから独立しなくてもいいんじゃない？　とも思うところでもあるが、それは奴隷として扱われてきた人々の心身上のこともあり独立という方向で決着したそうだ。

と、大体おおまかな国の成り立ちはこんなものだろうか。

実際はもっといろんな意図が絡まっていたんだろうけど、過去のことは過去の人間にしかわからない。

未来にいる人間としては、残された証拠からそれを想像するしかないわけだしね。

「というわけで」

カリイナ先生はにこにここと笑みを浮かべながら指を一本立てた。

「この話はみなさんもよく知っていることと思いますが、今日の課題はこの建国にまつわることについて感想文を書くこととします」

え……？

僕は思わず、手元にある見た目黒板ミニチュアサイズのそれを目を落とした。紙の供給量が少ないこの国でのノート代わりになるもので、対になった木の棒で文字を書く仕様になっている。

少量の【魔鉱石】と両方に特殊な細工の【紋章】が刻まれていて、【紋章】同士を触れ合わせることで文字が消える。という仕掛けの【魔道具】で便利なのだけど、所詮は黒板。感想文を書くほどのスペースはない……んですけど。

同じ教室にいる四十人弱の子どもたちも普段なら絶対にする事のないことを言われて戸惑っている様子だった。

そんな僕たちの反応をカリイナ先生は微笑むことで制すと、一体いつこの教室に持ち込んだのやら。普段用いることのないはずの紙の用紙を教卓の上に持ち出す。

そして次には。

「紙も書く道具も揃えていますから、安心してください」

でん、とペンやらインクやらが入っているらしい箱を取り出した。

……いや、だからそれ何処から出てきたの？

確か授業が始まる前にはそこには何もなかったはずなんです。というか、カリイナ先生教室に入ってきたとき、教科書以外のものは持ってなくなかったですっけ。僕の見間違い……？

いろいろ突っ込みたいのは山々だったが、カリイナ先生は続きを話す。

「実は学長が、皆さんの日頃の成果を見たいということでごまぐれに提案をしてくれやがりました。普段は触れることのないものに触

れてみるのも一興だとこのようなことと相成りました」

ふう、と息を吐くカリイナ先生。その表情がどこか疲れて見えるのは見間違いじゃないだろう。一部棘付き発言も含まれていた。

ていうか今、野郎言葉入ってましたよね。

いつも落ち着いた雰囲気を崩さない穏やかな彼女の意外な一面を垣間見てしまった僕を含めた生徒たちは、それぞれ隣の席同士で顔を見合わせた。

そんな微妙な空気が流れる中、前の方の席に座っていた生徒が手を挙げて発言する。

「せんせー。それって試験ってことですか？」

それは年に一度紙を使ったテストが行われるためのことだったが、前回のテストは半年前にあったばかりだからそれはないはず。

予想通りというかなんというか。

「いいえ。今回のこれは違います。あくまでも学長の提案で行われる突発的事故、とでも思ってください」

カリイナ先生は首を振って否定した。

やっぱりなんだか、発言内容がおかしいけど。

学長となにかあったんだろうか。ここの学長はちょっと変わってることでも有名だし、その関連……かも。

「まあ、それは横に置いておくとして。課題の件です」

気を取り直したカリイナ先生は閉じた教科書を持ち上げる。

「教科書に載っていることだけを題材にしてもよいですし、もう少し詳しいところを書きたければ書庫へ行行って調べてもらっても構いません。建国に関わることならなんでも結構です。ただし、提出は今日中にお願ひしますね」

つまり、この後はほぼ自習状態となるわけで。

「わからない字などがあれば質問に応じますよ」

という言葉最後にその場がわっとうるさくなった。

友だち同士でどうするか相談を始めたのだ。が、残念なことに僕の側にはそれを相談する相手がない。

エリクは年齢が二つ上なので十二歳から十四歳までの上級生の教室に回されているし、同じ教室にいるライナは僕の事を警戒して近づいてこない。

その他の子どもたちも、僕との接点がありませんいたため相談相手になりようがなかった。

さて。ではどうするか。

少し考えてみたものの、決断は早かった。

歴史の勉強、感想文（後書き）

補足。

【魔導具】 魔法使いのみが扱える道具。魔法補助器具。魔法を制御し導くため道具。

【魔道具】 魔法使い以外でも扱える魔鉱石を使用した道具。日常生活等で使用。

書庫にて

カリイナ先生の許可をもらい、ミニチュア黒板もどきを抱えて向かった先は学校内に作られた書庫の入り口。

重厚な扉を開けて入室したその瞬間にやってくるのは古い本独特のかび臭さ。それに合わせて貸し出しのカウンターに座っていた金髪の女性が僕の姿に気付いて声をかけてきた。

「ダット……？」

「こんにちは。シエリナ叔母さん」

午前中に会ったばかりの叔母が驚いたように立ち上がると、その肩口で切りそろえられた金髪が舞う。

彼女の表情が気まずそうなのは、僕がサボりでここに来たと思ったからか、それとも朝のことがあったからか。

「え、どうして？　なんで……」

「授業で感想文を書きなさいって言われたから。その資料探しに来たんだ。今日中に提出って言われたから。多分他にも何人かは来ると思うよ」

「感想文？」

僕が抱えたミニチュア黒板もどきを叔母さんが不思議そうに見下ろす。

「試験、じゃないわよね」

「うん。学長の指示だって。カリイナ先生が紙を用意したからそれに書いて提出しなさいって」

「え。学長のの？」

「カリイナ先生は学長の気まぐれだとか、言ってたけど」

「あー、学長の気まぐれか」

叔母さんが苦笑いを浮かべた。

「でも、それにしてもね。いつもなら【全生徒対抗魔法のお宝探し】とか【畏仕掛けの陣地取り合戦】とかそういうのを企画して持ってくるのに」

「あー、あつたね」

領主さまの友だちが開発したとかいう新作【魔道具】景品にしたり、学校中いろんな畏仕掛けて、先生たちが丸一日片づけに奔走したり。

他にも突発的に【自警団に負けるな障害物捕り物競争】とか【難問百解いたらこれで君も天才に】などなど自警団を巻き込んだり、たいして意味のないクイズ大会を試してみたり。

しかもそれは魔物が町に襲撃をかけてくるのと同じぐらいの頻度でやってくる。

教師陣もノリの良い人間はいいのだが、後始末が毎度大変なのでどちらかというと不評だった。

カリイナ先生が奇妙な言動をしてしまったのも、多分その大変さからなんだろうなあ。と考えることにする。

まあ、今回のこれは単に感想文を書けというだけなわけだし、それならそうおかしなことにはならないはず。

叔母さんも言うだけ言ってみたもののたいして深い意味はないだろうと判断したようだ。

話題はすぐに課題の中身に戻る。

「それで感想文って、なんの感想文を書くの？」

「ジードリクス王国の成り立ちについて。それについてならなんでもいいって」

「あら。じゃあちょっと奥の方になるわね。でも、ダットくらいの子が読めるような本は少ないわよ」

「え、そうなの？」

「ええ。資料になりそうなものは難しく書いているものがほとんどだもの。子ども向けとなると……やっぱり簡単に装飾された話が多

いから」

そうは言いつつも、捜してくれる気はあるのか、叔母さんはカウンターから出てきてくれた。

自分の受け持ちの魔法系授業がないときは書庫が定位置の彼女だ。どこにどんな本があるかは把握しているはずだから、読みたい本を探すなら任せるに限る。

「それを覗くとやっぱり難しいかな。あまり子どもにはあまり見せたくないような描写が入ってるのも多いし」

「え、駄目？」

「駄目じゃないけど。感想文を書くだけならあの教科書だけでも出来ると思うわよ。おすすめはできないなあ」

となると、教室に逆戻りするのが正解ってことだろうか。

「もう少し上の子達たちなら読めそうなものもあるんだけど。ちょっと違う切り口で感想を書いてみたいって思うなら、わたしが選んで口頭で教えるのもありだけど。どうする？」

どうする、って言われても。

一応叔母さんも魔法系の授業の担当だけど教師なわけだし、それだと他の教師の授業に割り込む形になるのはないだろうか。

……ちよつと微妙だ。

「え、と。叔母さん。とりあえず、本があるところに案内して。本は僕が選ぶから、読んでほしくないような本だったら言ってくれる？ そうしたら別のにするから」

そう言ったら、叔母さんはちよつと驚いた様子で目を瞬かせた。

「あーあ。本当に姉さんの言ったとおりなのね」

誰に向かって言うでもなく、彼女は呟く。

「叔母さん？」

「姉さんから聞いたわよ。記憶喪失になったら一気に性格が大人になっちゃって困ってるって」

「えー！？」

「その通りね。態度が全然子どもらしくないし、しゃべり方も前と

違うし。利口すぎるわ。まるつきり別人ね」

……母さん。一体何を叔母さんに喋ったんだろう。

少し不安だったけれど、心配性な母さんに比べるとこの叔母さんは楽観的思考の持ち主で。

「まあでも、姉さんが大丈夫だって言ってたし。わたしだって魔物とそうじゃないものとの区別はつくわ。だから心配しなくても平気よ」

「え、あ。はい」

心配するまでもなく、叔母さんは自分の中でいろんな事に決着を付けたみたいだ。

けれど。

「ただ、油断はしないこと」

少し安心した顔の僕に、彼女は忠告を付け足した。

「いくら家族があなたをちゃんとあなただって認めても、赤の他人は簡単にはいかないわよ。明らかに、あなたの変化は異常だもの。気を付けなさいね」

「はい」

そこは言われずとも、と言いたいところだが素直に受け取る。

心配して言ってくれてるわけだし。

猫を被る、のは無理にしてもある程度隠すべき所は隠すつもりではある。

最初はそこまでする必要はないと思っていたんだけど、その辺りは今朝父さんに散々言い含められた。

「出来るだけ気を付けるつもりです」
にこりと笑ってそう返答すると。

「だったらその喋り方はしないほうが賢明ね」

もっと子どもらしくしなさい、と額を弾かれた。

軽くだけど、痛いよ叔母さん。

少しだけ恨みの念を込めて睨めば「ごめんごめん」と彼女は笑った。

「じゃ、時間がなくなるといけないからささっと捜しましょうか」
まだある程度余裕はあるけれど、感想文の提出は今日中だ。時間は限られている。

僕は歩き出した叔母さんの背中を追って、少し小走りになった。基本書庫は大声厳禁。それは異世界でも同じで、叔母さんと僕の足音が薄暗い書庫の中に響く。

明かりは小さな天窓から入る僅かな太陽の光と、かるうじて文字が読める程度に調整された光を発する【魔道具】のみ。

貴重な本を出来るだけ痛まないようにするための処置ではあるが、足下まではしっかり照らしてはくれない。しかも床は石畳。たまに出っ張りがあつたりするので注意して歩かなければいけなかった。

「あ、そうだ」

やや下向きの視線で追いかけていた叔母さんが横目で僕を振り返る。

暗がりの中でも見えるその目はちょっと悪戯っぽく輝いていて、僕はなんだか嫌な予感を覚えた。

実際その予感は外れてはいなくて。

「ライナちゃんと早く仲直りしなさいよ」

僕はため息を吐いた。

まあ、叔母さんも僕やエリクやライナのことをよく知っている人の一人だし。

今朝の【基礎魔法学】の授業で一緒にいなかったところも見ているのだから、何かあつたと思つて当然ではある。

「……失敗した？」

なんとなく予想はついてるぞ。と大人特有の余裕の笑みがちょっと気に入らないけど、その通りなので反論はしない。

「なんか変な疑惑持たれてる」

多分、父さんの時と同じような【魔物憑き】疑惑だろうけど。

「お見舞いに来たとき、ちょっと説明したんだけど納得できなかったみたいで」

「あー。急なダットの変化についていけなかったわけだ」
はい。的確なご指摘ありがとうございます。

「なるほどね。それであんな警戒した目をしてたんだ」

「ええ。まあ。朝からあんな感じで、すっごい視線感じてやりづら
いっただら」

しかもその様子を周囲にはつちり見られているのだ。

本当ならいつも一緒にいる【ダット（僕）】とライナが別々に、
しかも一方的に睨んで睨まれての光景は全員が奇異に思っただたり
前の光景だ。

それが好奇の目を生み、じろじろと朝からちよつと鬱陶しい視線
も混ざっていた。

前世の僕のモットーは平凡で平穩のはず……だったんだけど、ど
こでどうおかしくなったのか疑問だ。

叔母さんは楽しそうにそんな僕のしかめっ面を見下ろしている。

「ま、仕方ないわね。あの子はお姫様を守る凄腕戦士よ。今まで守
つてた相手がいきなり別人みたいになったんじゃ、すぐには信じら
れなくて無理もないわ」

「叔母さん。その例えちよつとヤダ」

ここで騎士という言葉が出てこないのは騎士という職種がこの国
にないからだけ。でも。

「……お姫様って」

僕は男。男ですよ。

「ふふ。遠くから見てたらそう見えるわよ。ここに通り出してから
はずつとそうじゃない。ダットを虐めようとする子を片っ端からや
っつけてたのは主にライナちゃんよ。エリクくんもたまに手を出し
てみたいけどね」

それは僕も知っている。

自分に自信がなかったから、からかってくる相手に何も言い返せ
ずに黙っていることしかできなくて。そんな時は大抵ライナやエリ
クが駆けつけて来ていたことを思い出す。

それだけじゃない。

【ダット（僕）】が一人の時に絡んできた数人が後でケガをしていて、ライナも似たようなケガしていたこともあった。それは守られていたということに違いないだろう。

実際に【ダット（僕）】はそう感じていたし、同時に申し訳ないとも思っていた。

「そんなライナちゃんだからきつと今のダットが不安なんじゃないかしら。今まで彼女が守ってきたダットが急にいなくなったわけでしょう。家族でさえ別人みたいに思えるんだもの。だから納得がいなくて、疑ってるんだと思うわよ」

「だから、あんな態度を？」

「少なくとも、わたしはそう感じたわね」

そう叔母さんは言って立ち止まる。

一瞬目的地に着いたのかとも思ったが、違った。

「あのね、ダット」

振り返った叔母さんが、腰を落とし僕の視線に自分の視線を合わせる。

「きつと、ライナちゃんは急に大人になったダットがダットだって認識できてないだけだと思っわ」

「え？」

「今、あなたに起きている変化は本来長い年月をかけて起こるべきだったものよ。人は最初は未熟な子どもだけれど、やがて成熟した大人へと変わっていく。あなたはこういう理屈かはわからないけれど、その工程を全て通り越して大人の態度を取るようになってしまった。それが周囲にどれだけ動揺を与えよう？ わたしから見ても、あなたはまるつきり前のあなたとは違う別人に見えるわ。ふとした動作、癖なんか、以前のダットと同じだと気付かなければきつとそう断言していたわね。ダット。彼女は子どもよ。大人の視点で、わたしと同じようには見ることができないの。それを忘れて大人の言葉を押しつけるのは駄目。理屈じゃなくて、ちゃんと心で

ライナちゃんと向き合うの。それが子どもらしいってこと。感謝の気持ちだったり、気に入らないからって怒ったり。ちゃんとその感情を言葉にしなくちゃ伝わらないわよ」

だから、と叔母さんは最後に笑って。

「ライナちゃんと友だちでしょ。受け容れられなかったのなら仕方ない、なんて気取ったことは考えずにどーんと自分の気持ちをぶつけてきなさい」

【魔導具】である指輪を身につけた指が、僕の背後を示す。

つられて振り返ってみれば、一つ、二つ向こうの本棚の影。そこには見覚えのある銀色の髪の毛の束が一本見え隠れしていて。

「ばればれ？」

うん。隠れてるつもりで、隠れられてないな。

「かわいいわよね。ほんとに」

叔母さんは楽しいと嬉しいの両方を含めた表情でうんうんと頷いている。

青春だね。とでも思っているのかもしれない。

「……今、授業中だよ。一応」

「あらー。真面目ね。でも、こういうのはきつかけが肝心。ほら、行ってきなさい」

しっしっ、と犬を追い払うかのような仕草をされて、僕は大きく嘆息した。

多分この様子だと資料になる本の所まで案内してもらえそうになり。

「行ってくる」

僕はそうして来た道を逆に戻っていき、銀色の髪が揺れているその場所で顔を覗かせて声をかけたら。

「ライ「きゃーっ!」「」

……逃げられた。

なんでそうなる。

避難誘導訓練です

いや、いきなり声をかけたのが悪かった。のだと思う。けどさ。

書庫でこっそり（実はばれれば良かったけど）僕をつけていたライナに声をかけた瞬間に悲鳴あげて逃げられるって……結構傷ついたんだけど。

それがいけなかったのか、あれから僕が話しかけようとするたびにライナは逃げる逃げる。

ちよつとでも、僕がライナに近づこうと行動を起こした瞬間に視界から消えるとか。そりゃないだろうって感じた。

そのくせ、授業中とか僕の方をじーっと睨んでるし。

逃げたのを追いかけて捕まえるのも有りなんだろうけど。これにはちよつと問題が。

僕の体はライナよりも背が低くて運動が得意な方じゃないし、逆にライナは運動が得意。とくれば、結果はもうわかりきっている。

鍛えれば別かも知れないけど、今すぐは無理無理。

それならライナの家まで行って話をつけよう、としたら「会いたくない」とまた拒否られる始末。

そんなわけで、翌日、翌々日と経過してしまい。

なんでだろうね。ライナを追いかけるうちに「僕ストーカーか？」とかちよつと落ち込んださ。

「……エリク。アレ、捕まえられる？」

今、僕らは青空教室よろしく自警団の団員に囲まれて学校の校庭にいる。教室に関係なく集められた子どもたちの数はおよそ二百名。要するに全校生徒だ。

僕とエリクはその真ん中辺りに陣取って体育座りをしていた。ラ

イナはその後方。こちらを伺える位置にいる。

まったくもってやりづらい。

周囲の好奇の視線も、ライナを追いかけることもいい加減面倒になつてきたので、正直僕の機嫌はよろしくない。多分、今まで【ダツト（僕）】がしたことのない目になっているはずだ。

「いや、無理」

エリクは即答だった。

「あいつ最近、風魔法おぼえたる。俺じゃつかまえられねーよ」

「ああ。そっか。【疾風走行】ね」

そういえば、僕が頭を打つ前にライナが自慢していたっけ。

確か【魔法基礎読本】にも掲載されている、早く走れるようになる魔法だったはず。

元々の彼女の身体能力も合わせると、いくら体力に自信のあるエリクでだって無理だ。

というか、この【疾風走行】。【魔法基礎読本】の中でも難しい部類に入る補助魔法だって話なんだけど。

普通そこまで行くのって二年とか三年かかるらしいのに、あの幼馴染みは一年であの本の中身をほぼマスターしてしまつたらしい。

初歩の初歩。薪に火を付けるとか、風を吹かせるとか、それでさえ半年かかってしまう人間もいるのに。これぞ才能というやつか。

「あいつ、そのうち王都とか帝国の方の魔法学校に行くんじゃない？」

「そうかもね」

飛び抜けた才能がある生徒は領主が推薦状を書く。本人の希望にもよるが、それにより大きな専門の学校に行くことができるのだ。

実はシェリナ叔母さんもそのクチで、王都の魔法学校に二年。そこから魔法が盛んな他国へ三年留学させてもらっていた。

その割にこんなところで教師やってるのがどうにも疑問ではあるんだけど。

「よし。いいかーよく聞けー。これから魔物に出くわしたときに対処法を教えるぞ」

落ち着かない子どもたちに対して、授業の先生役となった自警団の団員が声を張り上げる。

自警団の緑色の詰め襟制服を着崩した彼には、見覚えがある。確か父さんと同年代だったはずだ。彼は生徒の注目の的となっても特に萎縮することもなく話を続けた。

「地を駆ける魔物は素早いことが多い。子どもの足で逃げるのは難しいだろう。建物の中に避難することが出来るだけの時間がある場合は、それでいい。だが、それが無理だったときは木に登るか、魔物の大きさでは入ってこられないような場所に入り込むのが有効だ。この近辺の魔物は体が人間よりもデカイのが大多数だからな。空を飛ぶやつらの場合は……障害物が有効だ。建物の影の隙間なんかでもいい。とにかくやつらの入り込めないような隙間に隠れる。今日はそのあたりを考慮して、避難できる場所の確認も行う。住んでいる場所によっても違うので、それぞれに分かれてもらう」

そうして彼は生徒を囲む自警団の団員たちの名を呼んだ。

「ドゥークとウェルズは北区。ルイザとカーシユは西区。ナンとフアリスは中央。キリエとゴルドは東区。リアとメイレルは南区を担当する。それぞれ住んでいる地区を回ってもらう予定だ。他にもめばしい場所には団員を配置してあるので聞きたいことがあればその都度質問を。毎度のことではあるが、この確認は君たちの安全を確保するための重要なものだ。いざというとき、きちんと対応できるようにしっかりと確認してほしい。以上だ」

説明が終わると同時に、それぞれ担当する地区の団員が「北地区はこっちなー」「真ん中はこーこー」などと声を上げ始める。

僕もエリクも、そしてライナも東部地区になるのでキリエさんとゴルドさんペアの所になる。

集まった人数は大体三十人くらいか。

「おし、坊主ども。集まったな！」

赤髪を短く刈っている陽気な男性がゴルドさん。

「はぐれないようについてきてくださいね」

少し長めの茶髪を後ろで一つに縛っている男性がキリエさんだ。二人とも二十代半ばで、キリエさんは妻帯者。もうすぐ子どもが生まれると父さんが言っていたのを覚えている。

どちらもカーライル東部に家があるので、この人選になったのだらう。

二人を先頭にして、まず向かったのは学校内の避難に適した場所だった。

校舎内は省き、校庭内の用具入れや、緊急時に入れる地下壕などの場所。木に登るならどんな木がいいか。登り方。登るときの注意事項なども実践を交えて教えてもらう。

木登りに関しては……まあ、運動神経よくなきゃ難しいし、ある程度身長がないと厳しいだらう。ということで、僕はその選択肢を除外した。

続いて向かったのは、学校の外。学校自体はやや北区寄りだけど一応中央の範疇に入っている。そこから東。王都へ向かう街道が整備されているので、大通りがある場所を目指して進んでいく。

「東地区は……北区みたいに農場があるわけじゃねえしな。ほとんど家屋ばっかだ。基本的に家の中に逃げ込めば問題ねえ。それでも駄目な時は……この辺だな」

家と家の隙間。大人一人が通るのも難しいようなその場所をゴルドさんが示す。

「俺たちじゃ無理だが子どもなら入り込める。でかい魔物なら、入ってこられねえから丁度良い。実際十年つくらい前にこういう所に逃げたおかげで助かったのもいるから、しっかり覚えておけよ」

「はい」

比較的素直な子どもたちの返事がいくつも重なる。ちょっと暢気にも聞こえるけど、その表情は真剣だ。きつと親世代から色々聞かされてるからだらう。

それも自分たち人間が魔物に対抗する術が少ないことをわかっているからこそ、のこと。

大抵は町の外で撃退されるけど、そうすることが出来ないこともあるから油断はできない。

これは町全体が積み重ねてきた歴史でもある。

「じゃー、次行くぞー」

町行く人とすれ違いながら、歩く。

ただ、年少五歳の少年少女が数名混じっているわけで、休憩を挟みつつだ。

一度目の休憩も、二度目の休憩もわかりやすいようにと街道へ向かう東の大通り、馬を休める水場の近くで取った。

他の町からやってきた商人やら、これから町を出て行くこととする人たちが集まったその場所はそこそこ騒がしい。

馬を預かる厩もいくつか建っていて、僕はそこで頭のとっぺんが一階の天井に届こうかという大きさの馬を見上げていた。

日本では見たことがない大きさの馬である。しかも頭のとっぺんには天を突くような二本の角が生えているし、目つきも鋭い。

魔物が普通に闊歩する世界なわけだし、それに合わせた進化なんだろうけど。

前世の記憶が甦るまでは普通だと思っていた光景でも、今こうして見てみると違和感ありまくりだ。

「……デカイし、角生えてるし。姿形は馬そのものなんだけど。流石異世界」

そう言うしかない。

「何言ってるの。おまえ」

うっかりばやいたそれを隣にいたエリクが聞いていたみただけで、理解できないだろうから放っておく。

「よし。じゃあ、休憩終わりだ。帰るぞ」

背中側からそんな声が聞こえてきたので、振り返る。同時に点呼も始まったようなので急いで集合場所に戻ることにした。のだが。

不意に服を引っ張られる感触がして足を止めた。

場所は腰の辺り。

見下ろすと五歳程度の少年が困ったように立っていた。

うす茶色の髪に少し不安そうな青い目が、僕の視線と合わさる。

「え、と。なに?」

確かこの子は……僕と同年の少女の弟だったはず。

「おー、どうしたダット」

立ち止まった僕に気付いたエリクが振り返る。状況がすぐわかったのか、僕と僕の服を掴んだ少年を見るなり戻ってくる。

「なんだよ。こいつユファの弟じゃん。どうした?」

「わかんない。今から聞くところ」

僕はそう言っただけじゃがみ込む。視線が同じ高さになったところで、尋ねてみた。

「どうしたの?」

すると少年は泣きそうな顔になって。

「あのね。ユファおねえちゃんが、さっきのひなんじょにわすれものしたからつてもどっていつちゃったの。すぐもどるから、つていつてただけど。もどってこないの」

と訴えてきた。

「あー。心配になっちゃったんだ?」

「うん。でもさがしにいきたいけど、まってるようにいわれたの。でも、じけいだんのおじさんたちにはいつちゃだめって」

「え。なんで?」

「かっつてもどったのを、しかられるって。だから、ひみつにしないだめって」

「ああ。だからそんな泣きそうになつてんのか」

エリクが少年の頭をぐしゃぐしゃとなで回した。

僕の顔を見た少年は。

「おねえちゃん、さがしてくれる?」

涙を溜めて懇願してくる。

僕はエリクと顔を見合わせて「どうする?」と目だけで語り合う。「僕は探しに戻ってもいいけど。キリエさんたちに知らせないでっ

ていつのは……どうだろう」

「けどさ。ちよつと行って戻ってくるだけだぞ。それぐらいで叱られるのもなあ。俺はヤダ」

「まあ、エリクはそんなものだろうけど。いいよ。僕が捜してくる。適当にごまかしといて」

「え、だいじよぶか。おまえ」

「平気だよ。僕は前の僕じゃないんだし。エリクも叱りたいなら一緒に来れば？」

「……行かねえ」

どうせすぐ戻ってくるんだろ。とエリクはぼやくと僕を追い払う真似事をしてくれた。

ということはこれで確定か。

「え、と。じゃあ、僕がちよつと行って捜してくるからエリクはこの子と待機。言い訳は適当に考えておいて。じゃ、よろしく」

馬車が行き交う中、僕は二人に軽く手を振ってすぐ近くの路地に入る。

この近辺は自分たちの庭のようなものなので、大体の方角さえわかっただけならば迷うこともない。とはいえ、町の東側は町が大きくなる度に外壁が増築されていったため、少し入り組んでいる。撤去されるはずだった部分が様々な理由で残ったままだったりするのだが、それが路地を迷路のように感じさせた。奥へ奥へと進む度、人の気配がなくなっていく。

それまでの狭さが嘘のように突然開けた場所に出くわす。

家が一軒建てられる大きさの広場だ。元々外壁が撤去されていれば家が建つ予定だったらしいが、撤去されずに残ってしまったために地下壕を掘っただけに留まったとのこと。

それが百年ほど前。詳しくは知らない。

入り口は外壁沿いにあり、地上部分は普通に草が生えただけの地面なので普段は子どもたちの遊び場になっていた。

警戒など不必要な、子どもたちの庭。

思えば、これが間違いだっただと僕はすぐに後悔することになる。

「ここ、かな？」

地下壕への扉に手をかける。と。

リン。

背後から小さな鈴の音が聞こえた。

同時に。

【風散り】

甘い花の香りと、微かに誰かの声がした。

暗闇と牢獄

ひやははは。ざまあみやがれ。これであいつも大人しく……

なってもらわなければ困るよ。ぼくたちに敵わないと思いき知ってもらわないと。

そうですねよ。これで俺たちが堂々とこの町歩けるようになるんです！

がしゃん、ぼすつ、がちやん。

随分と耳障りな音に気付いて目を開けた僕は。

「……………」

まったく何も見えない状態であることに気が付いた。

真っ暗。ほんとに何も無い。まさしく闇。

えー、僕夢見てる？ と思ったのはきつと間違いじゃないはず。

だって、頭ぼーっとしてたしね。

鼻の奥には甘い花の香りが残ってたし、そのまま目を閉じてしまったわけだけでも。

二度目に目が覚めた時はそういうわけにもいかなかった。

自分の目を疑ったよ。だって目が覚めたはずなのに、夢と同じ状況だったから。

いや、実際には紛れもない現実だったんですけどね。

というわけで、現在の状況確認をば。

一、何も見えない。目を開けても閉じても真っ暗闇です。

二、ほごりっぱいし、ものすごくカビ臭い。しかもなんだかわからない匂いも混ざってる。

三、どこかで水がぴちゃぴちゃ言ってる。

四、体に時々震えが来るくらいには寒い。

四番目を感じたときに、僕はなんでこんな所に寝転がっているのか不思議だったんだけど。

「……どこだ、ここ」

「え、と。たぶん、地下？」

五、どうやら先客がいらっしやっただようです。

「よかった。目が覚めたんだね」

女の子の声かしてるんだけど。って、あれ？

僕はふと、寝転がっている頭が柔らかくて温かいものの上に乗っていることに気がついた。

いかんせん真っ暗闇なので状況がよくわからなかったが、女の子の声には聞き覚えがある。

「ユファ、ちゃん？」

「うん」

即答をありがとう。知ってる人でよかった。というか、今僕の頭に乗っているのはもしかしなくてもユファちゃんの膝、だよな？

確認するまでもなく頭の上から振ってきた声は彼女のものなのだが、頭の下にある女の子の膝という事実が僕を混乱させていた。

「え、と。なんでこんなことに？」

僕としてはそれは、ユファちゃんの膝の上にして僕の頭があるのか、の質問だったのだけれど。

「ごめんね、ダットくん。わたしのせいで」

「え、ちょ。ユファちゃん？ 話が見えないんだけど」
暗闇で表情が見えないせいだろうか。見事に見当違いの返答が戻ってきた。

まあ、彼女の語ったそれが真つ暗な場所にいる理由に繋がるものだった少しは冷静になれましたが。

ユファちゃんが落ち込んだ様子だったので、とりあえず僕は体を起こして現状の把握に努めることに。

えーっと。確か。

「僕、ユファちゃんの弟にユファちゃんが地下壕に忘れ物したって聞いて探しに来たんだよ。それで地下壕の入り口のところまで行ったんだけど」

その後の記憶がすっぱり抜けているんだよね。困ったことに。

どうしてこんなところでユファちゃんの膝枕にお世話になっていたのやら、皆目見当が付かない。

首を傾げたところで暗闇が怖いのかユファちゃんに手を握られた。安心させるように手を握り返せば、ユファちゃんは「それ、違う」と声を出した。

「わたしそんなことあの子に言っていない」

怪訝そうに返してくるユファちゃん。

「ええ？ でも」

僕とエリクが弟くんから聞いたのは間違いないのに。

「リオが、そう言ったの？」

「そうだけど……」

ユファちゃんは弟にそんなこと言っていないという。だとすれば一体何故かの少年はあんなことを言ったのだろうか。
首を傾げる僕に。

「じゃあ、やっぱりあいつだ」

心当たりがあるらしく、ユファちゃんが唸った。

「ギド・ルヴェール。あの人だよ。絶対そう。気絶してたダットくんを連れてきたのもあの人とその仲間だったもの」

「ええ？」

思いもよらない名前が飛び出てきて、僕の顔は苦く歪んだ。幸い暗闇の中でユファちゃんに見せることもなかったが、嫌悪感というかなんというか、呆れにも似た感情が湧き上がる。

思い浮かんだのはエリクと同じ赤い髪。目つきがいかにも荒んでいますと言わんばかりの少年。

ちなみに僕やユファちゃんより三つ年上で、しかも弱い者いじめが大好きで、柄の悪い連中とも付き合いがあるという噂の大人でも手こずるタイプの人間である。

取り巻きも何人がいて、そいつらと一緒に僕にも何度か絡んできたことがあるけど、そういう時は大抵ライナが対処してくれていた。エリクとは違う意味で彼女とは犬猿の仲な間柄だ。

「あの問題児が……？」

ギドは元々、ライナのことを敵視していた。そのライナに守られる僕のこと、いつも蔑んだ目で見ていた気がする。

その始まりは確か、何年前か前にギドが僕に絡んできてそれをライナがケガをしながらもボコボコにしたことだ。

ギドは体格がよくて、ライナはどちらかというと細身。

その体格差があつて負けたという事実はある少年には屈辱的だったろう。

しかもその後彼女によって軽くあしらわれることが多く、ギドの怒りは募る一方だったはず。

そこにきて、僕がライナから避けられるというこの状態。

もし、いつも僕にべつたりだったライナが僕から離れたことで、彼らが行動を起こしたのだとしたら。

「うわぁ……ヤバイ」

いろんな意味でヤバイ。

ライナのことだから、知恵を働かせてどうにかしようとするだろうけど。きっと彼女は怒り狂ってギドを殴り飛ばすだろう。そう。魔法を使っても。

まだ僕を友だちだと思ってくれていれば、だけど。でも、そうだとすれば。

僕は手を握りしめているユファちゃんの方角を見る。

「……もし、僕の考えてることが当たりなら。謝らないといけないのは僕の方だよ」

彼女にはなんら関係ないはずだ。むしろこちらがユファちゃんを巻き込んだことになるのだから。

そう思っただことだったのだが。

「ううん。それはわたしの方だよ」

ユファちゃんは強く否定した。そして次に続いたのは予想外の言葉だ。

「あのね。少し前にあの人がわたしに彼女になれって言ってきたの」「ええっ！」

地下の石畳に反射して、思った以上に声が響いた。慌てて余っている方の手で口を押さえるが、遅い。

「ごめん、と謝るとユファちゃんは「いいよ」と笑って許してくれた。

「そんな気なかつたから断ったもん。そうしたらあとで恥をかかされたって怒ってて。学校からの帰りとか、しつこくてずっと逃げてたの。それで今日その時のこと急に謝りたいからって言われてね。

取り巻きの人たちに連れられて路地に入ってしまったら、甘い香りがしたの。そしたら急に眠くなって」

なるほど。それでついに行ったらこんな状況になった。というわけか。納得した。

でも軽率だよ。ユファちゃん。

あの手の連中はそんなにあっさり引いてはくれないものなのに。

流石に子ども相手にそう言うのは厳しいかな、と喉元のところで止めておいたけど。

僕も人のこと言えないし。

ユファちゃんの弟はきつと彼らの仲間に言い含められてたんだろ

うな。だから「じけいだんのおじさんたちにはいつちやだめ」だったんだ。彼が実際のところどこまで知っていてそう言ったのかは謎だけだ。

ここから脱出する望みはそのユファちゃんの弟とエリクだけど、ここがどこなのかわからない以上、期待しない方がよさそうだ。

それにしても。

甘い香り。

それを聞いて僕は、ここに来る直前のことを思い出していた。

あの甘い香りを感じた直後に、僕は意識をなくしている。そこからわかるのはあれが眠り薬の類のものということだった。

ああいったものは普通大人の手で管理されているものだから、普通の十三歳の少年が簡単に手に入れられるはずもない。いったいどこで手に入れたのやら。

柄の良くない大人たちとも繋がりがあるともないとも噂があるから、そのあたりからかもしれないが。

「僕も、地下壕のところで甘い匂いを感じたよ」

「そう、なの？ でも、おかしいよ。ダットくんは関係ないのに」

ユファちゃんは心底不思議そうにしていたけれど。

「そうでもないよ」

僕はそう言って笑う。

「ユファちゃんの言うことも間違いじゃないと思うけど。今回のことには僕も多分関係してる。あのギドって子は、何度も僕に絡んでこようとしてたけど大抵はライナに阻まれてたからね。因縁があるんだよ。だからライナが僕と離れてる今が良い機会だと思ったんじゃないかな。僕を楽にいじめられるし、それでライナにも報復できる。ずいぶんと浅はかだけど」

よほど腹に据えかねるものがあつたのだろうが、この行動はあからさまで幼稚すぎる。

ただの子ども同士の喧嘩であればどうということとはなかった。

だが、このことが周りの大人に知られれば、何かしらの処罰が彼

らには与えられるはずだ。それぐらいは容易に思いつくだろうに
「え、と。ダットくん。前とちよつと変わった？」

戸惑ったようにユファちゃんが尋ねてくる。こういう展開はもう
何度目になるだろう。仕方のないことだとわかつているけれど、胸
の奥が痛くなる。

教室の中で奇異の視線を浴びることはもう慣れた。というか、前
世の記憶が戻る以前も似たような視線を向けられることはあったの
だけれど。

「気持ち悪い？」

「え。そんなことないよ」

意外なことに、速攻で否定された。

「ちよつとびつくりしたけど。今ダットくんがいてくれてるから泣
かずにすんでるんだよ。わたし」

ユファちゃんはそう言うと言ったと僕の方へ体を寄せてきた。

ああ。なるほど。この状態だからこそ、彼女はそう言えるのか。
「真つ暗はきらい。こわいから。でも、ダットくんだいて一人じゃ
ないから。大丈夫」

健気だなあ。と思いつつながら、僕は改めてユファちゃんの手を握り
返した。

「それは僕も同じだよ。一人で放り込まれていたら……きっと混乱
して喚いてたと思うし」

状況もわからずに、誘拐？ 人さらい？ 僕もしかしてどこかに
売られるの？ と不安に悶えていたはずだ。

実際は単に悪ガキの悪戯 というには度が過ぎるものだとは知
らずに。

これは確実にトラウマの対象範囲内だろう。

「蹴り倒してえ」

想像ではなく現実的に、報復も兼ねて同じ目に遭わせてやるのか。
無理だと思うけど。

イライラと見えない空間を睨みつける。

そんな僕の不穏な空気に気がついたらしいユファちゃんが戸惑ったように「ダットくん？」と声をかけてくる。

あ、しまった。不安にさせたかも？

「ああ、なんでもないよ。ちよつとここを出た後にあいつをどうしてやるうかと考えてただけだから」

「……………ダットくん。こわいよ」

思い切り声に不機嫌さが出ていたようだ。ちよつと反省。

けどまあ、僕が実際にどうこうすることはおそろくない。きつと周りの大人たちによって成敗されることになるだろうから。

それにいつまでも暗い思考に囚われているのもあまりよくない。

「それにしても、ここどこ？」

僕は気を取り直してユファちゃんに尋ねてみる。

ユファちゃんもそれでほつとしたのか、繋がれた手から緊張が抜けた。

「地下、っていうはさつき聞いたけど……………」

暗闇なのでよくわからないが、水が滴る音が聞こえる。

そう遠くない場所のようなので行ってみようかとも思ったものの、この暗闇ではどこになにがあるかわからない。明かりがないと危険だろう。

最もそれも光を生み出す【照明】という初歩的な魔法が使えれば、の話で、生憎と今の僕は【魔素】を集めることすら出来ていない状態。もちろん【呪文】も記憶していないからそれは無理だし、ユファちゃんは魔法を使う素質を持たないようなので、頼めないし。

「どこかの地下壕、なのかな」

「ううん。違うみたい。えっと。見えないからわからないと思うけど。たぶん牢屋？」

「は？」

「自警団の事務所にあるのとよく似てたよ。あそこと違って地下だし、光も入ってこないけど。たしか、あの人がダットくん連れてきた時にずいぶん昔に作られたものだって話してた。あと、ここでた

くさん人が死んだんだぞ……って」

最後に彼女が震えながら付け加えたひとことに僕は唸った。
どう考えてもそれは脅し文句だ。

実際に人が死んだことがあるのかもしれないけど。それだと後に
こう付け加えてそうだ。

「もしかして、ちゃんと埋葬されていない人間もいるから【グラン・
ヴ・デイル】が出るかもって言われたりしなかった？」

【グラン・ヴ・デイル】という言葉を口にした時点でユファち
やんの肩が跳ねたけど、それも仕方ない。

「……言われた」

素直に認めると、彼女はまた僕の方に肩を寄せる。正直に言っと
僕もそれは願ったり叶ったりだったりした。

【グラン・ヴ・デイル】とはこの国で使われている古い言葉で
【実体なき死をもたらす者】の意味を持つ。恨み辛みを残したまま
死んだ者や、まともに埋葬されることがなかった者が大地に還れず
に【魔素】を纏った存在とされており、要するに……日本で言う幽
霊のような魔物だ。

存在を保つためには人間の【生氣】が必要で、人間を襲う。時に
人間の体に乗っ取り、それを操るといふ。

僕が父さんに疑われた【魔物憑き】とは正にこの【グラン・ヴ・
デイル】が大元である。

「……最悪」

聞かなければよかった。

子どもたちに対する戒めとして話されることもあるソレは、否応
なく恐怖を植え付けられる。

ぐすつ、とすぐ横で微かな鳴き声がして僕はキレた。

「やっぱりあいつ、一発ぶっ飛ばしとくか」

こちらの年齢が十歳であることなど、既に吹っ飛んでいた。体の
大きさも明らかに負けるが、関係ない。

向こうは遊び半分かもしれないが、これから先少なくともユファ

ちゃんは暗闇に恐怖を覚えることだろう。

僕だつてこの先しばらくはうなされそうだ。

それを、そうしてしまったことを。僕は許したくない。

ユファちゃんと繋いでいない方の手を怒りにまかせて握り込んだその時だつた。

『ふむ。心地よき思いじやの』

暗闇の一点に突如、青白い光が浮かぶ。

僕もユファちゃんもその唐突な現象にぎよつと目を見開いた。

『怒りや恨み。それは良き感情よ。我らを引き寄せ、力を与える』

声と共にぼんやりとその光は広がっていき、やがて一つの形を取る。

途端、体中の皮膚の上を電流のような怖気が走つた。

ユファちゃんがガタガタと体を震わせ始め、僕もまた強張つた体で青白い光の固まりを呆然と見つめる。

『くくく。大人しく眠つておつたというに。わざわざ贅を用意しよ
うとは人は愚かぞ。あのまま封を解かねば我らは完全に力を失い、
消え失せたであろうに』

形を成したそれは、愉快そうに笑う。

ただし、それは声を聞くからこそわかるもの。

骸骨にぼろぼろのローブとマントとを羽織つただけの存在に表情は存在しなかつた。

噂をすれば影

噂をすれば、影がある。

こんなところで日本のことわざもどきを思い出さなくてもいいだろう、と場違いなことを考えながら、僕はユファちゃんを背にして目の前のそれを睨みつける。

ていうか、よりもよってここでそれに遭遇しようとは。

『小僧よ。その気概は認めるが、そのおなごのとき顔ではいささか頼りないの。守るための力も有してはおらぬだろう。逃げ場もない。我らに抗うは愚かぞ』

「……………【グラン・ヴ・デール】」

この世界に生きる全てのものにとっての天敵。

【実体なき死をもたらす者】。

『ふむ。我らが名をそう呼ぶか。間違いではないが、いささか芸がなくはないものか』

かたかたときこちなく、ソレが腕を組む。

その行為は人間臭いのだが、あくまでも魔物。人間側からしてみれば害を為すものでしかないし、おまけに実体がない存在であるので武器が通じないときた。魔法に通じていれば別だろうが、残念ながら僕もユファちゃんもその手段を執ることが出来ない。

逃げなければ、ということが脳裏に浮かんでいるが、青白い光を放つ【グラン・ヴ・デール】により浮かび上がった室内は正に牢獄。

地上へ向かっている階段があるのは見えたものの、それは仕切られた柵の向こう側。強いては【グラン・ヴ・デール】を超えた先だ。

ただでさえ肌寒かった空間が、さらに冷えたように感じられた。

「い、や。たす、けて」

ユファちゃんが絶望からか、僕にすがりつく。

それは、僕も同じだ。と頭の中だけで返事をして、握った手を握り返す。

元気づけたいのは山々だったが、残念なことに僕にも余裕はなく、逃げ出す算段をつけようとは思うものの、それよりも先に両親や他の大人たちに聞かされた話ばかりが頭を過ぎった。

【グラン・ヴ・デール】の糧。生きた人間の【生氣】のことを。『主らの恐怖を感じる。恐れ、おののいておるな。良き事よ。死とは恐ろしきもの。我らはまさにそれを具現化した存在であるのだから』

【グラン・ヴ・デール】はそう言っただけで僕らの元へ動き出す。地面などまるでないように水平に、だ。

背後には壁しかない。逃げられない。ギリギリまで後ずさりして、ユファちゃんを隠すようにすることしか考えられなかった。

心臓がばくばくと音を立てる。

よりもよって。と僕は歯がみする。

どうして、初めて遭遇する魔物がコレなんだろうか。

どうして、僕はまだ魔法を使えないんだろうか。

完全な無力状態でのこの遭遇は紛れもなく……即死フラグ全開だ。

「く、る、なっ！」

みつともないと感じる余裕もない。

おぞましいと感じる魔物相手に、片腕を振って遠ざけようとする。物質的な攻撃は無意味。それを知っていて、けれどせざるを得ない。

『足掻くは人のさだめ。それもまた美味よ。されど小僧。我らに触れるは軽率ぞ』

愉快、と言わんばかりに【グラン・ヴ・デール】は振り回す僕の手から自らの体を触れさせた。

途端。

「……っ！」

ざわり、と全身が鳴った。

【グラン・ヴ・デール】に触れた手から、何かごとつそりと抜けた。そんな感覚があつて、僕は体中の力が失われたことを知る。

ずる、と重力に従つて手も、足も、体さえも床へ向かつて崩れ落ちた。

「ダットくん！」

かろうじて、と言うべきか。背後のユファちゃんが力を失つた僕の体を支えてくれたので、床に転がる事態だけは避けられた。

だからといってそれで状況が好転するわけでもなかったんだけど。

「……ユファ、ちゃん。に、げ」

こんな台詞は死亡フラグに定番だし、実際に無駄なんだろう。

それでもここで足掻くことは、やめられない。やめたくない。

その思いを持てる人間だからこそ、彼女にもそうしてほしいの願うのは傲慢だろうか。

「だめ。ダットくん。ヤダ。死んじゃ、やだ」

ポロポロとこぼれる涙。それが僕の体の上に落ちていく。ぎゅつと強く抱きしめられて、僕はその暖かさに切なくなつた。

そこで悟る。

多分もう、彼女は逃げないだろう。そして逃げられない。

死んでほしくないといいながら、そこから動かない。誰かが死ぬという事実に向面して、思考がそれを否定して、それ以外考えられなくなっているんだろう。

死が間近に迫っているからだろうか。それもそれで、仕方ないことだと頭のどこかで冷静な声が出た。

僕にとっての二度目の死。

一度目は気が付いたら終わっていた。

二度目は、それを与える死神がすぐそこにいてカウントダウンを始めている。

せめてもの救いは、すぐ側に暖かな誰かがいてくれることもかもしれない。一緒に死ぬ予定の彼女は……嫌かもしれないけれど。

「ご、めん。ね」

そう口にする、ユファちゃんは必死に頭を横に振った。

「ちが、いや。ダットくん。だめ」

泣いている。涙をこぼして、僕が死ぬことを否定して。

その姿に思い浮かんだのは母のこと。

……また、泣かせるのか。

心配をかけて、気が付いたら涙を浮かべる彼女が、息子の死を悲しまないわけがない。

せめてひとこと謝りたいけれど、それはもう無理だろう。

生を諦めた僕に死を与えるはずの死神。彼の者はもうすぐそこで。

『げに珍しき者に出会ったわ』

何か考え込んでいた。

「……………」

骸骨の頭の部分は僕たちの方を向いておらず、ただそこで漂っている。

僕たちに死をもたらさずだった【グラン・ヴ・デイル】の動きの変化。それが何を示すのか。この時の僕は全く気がついていなかった。

青白く、不気味に浮かび上がる【グラン・ヴ・デイル】が動くまで、そこからはほんの数秒。

『くくく。我らとて異端なる亡者の徒。なれど、我ら以上に理解できぬ者がいようとは』

ずい、と僕に触れる寸前にまで骸骨の顔を寄せた【グラン・ヴ・デイル】にユファちゃんがひつ、と声を上げて気を失う。

僕を支えていた力が抜けて、二人揃って床に倒れる。

【グラン・ヴ・デイル】がそれを見て、また笑った。嘲笑と取れるその笑いに、僕の頬は吊り上がった。

「殺す、なら、殺せ」

既に逃げられる状態ではない。それがわかっているからの言葉だったのだが。

『それではつまらぬよ。【二重】^{ふたえ}の者』

青白い光がそうして僕らの側から遠ざかる。

そして

『そなたは、今殺すに惜しい』

僕は呆然とそれを聞いた。

「どついう、意味、だ」

『くくく。知りたいか。ならば、知れ』

【グラン・ヴ・デイル】の指の骨が、投げ出された僕の手を指し示す。それは、先ほど【グラン・ヴ・デイル】に触れた手だった。

『触れてわかつたのだ。そなたは我らと似て非なるもの。【二重】^{ふたえ}に重なりし異なる色を持ちし者。それ故の異端。それ故の力。我らはそれを見たいのだ。そして知りたい。されどそなたは未だ未熟。よって今はそなたを生かすことにしたのよ。いずれ、刈り取るためにのう』

【グラン・ヴ・デイル】に触れた手に熱がこもる。

『既に印は付いた。それが証よ』

それは冷たく突き刺すような熱で、見れば手の甲に青白い光が宿っていた。

『それは我らを示すもの。近くあればそなたを導く。故に我らは行こう。そなたが我らの背に届くまで、彼の地にて死を喰らい漂う者となるうではないか』

かかか、と高らかに笑い、【グラン・ヴ・デイル】は僕に背を向けた。

『愉快、愉快。故にそこな娘も生かしてやろうぞ。印も付けぬ。今、我らが望むはそなたと心地よき墮ちし御霊のみよ。最早只人には興味がない。くくく。成長せしそなたの御霊。それを刈るのが楽しみ』^よ

くくく。かかか。

耳障りな哄笑が地下の狭い空間に鳴り響いた。

それを最後に青白い光に包まれた骸骨の姿がゆっくりと小さくなる。

徐々に暗闇に包まれていく視界。

僕の意識はそれに同化するように、遠くなっていっただ。

刻まれた印、その言葉の意味

目蓋の外の明るさ。

ふとそれに気が付いて、僕は目蓋を開いた。

「ん……」

急速に開けていく視界にぼうつとする頭はついていけない。

石の天井を見上げて「あれ？」と首を傾げる。

似ているけれど、違う。

僕は重い頭を左右に振って、自分の居場所を確かめた。

寝ている場所はベッドの上。けれどその寝心地はいつも使っている自分のものよりやや堅い。さらには薬の匂いが染みついており、全てが白に染められていた。

それが、自分が寝ているものともう一つ左側にあり、そこには茶色の髪の少女が一人目を閉じ横たわっていた。

「ユファちゃん」

その寝顔を見て、僕の頭は急激に冴えていった。

脳裏に浮かんだのは、暗闇の中で出会った【実体なき死をもたらす者】。

ぞくり、と背筋に悪寒が走った。

現在いるその場所のことさえ忘れて、起きあがりかける。だが、思ったように力が入らない。

両肘を立てた時点で目が回り、枕の上に頭が逆戻りすることとなった。

「うー」

眩暈が落ち着くまで、数秒。仕方なく僕はそのままの状態でユファちゃんの様子を窺うことにした。

あれからどれぐらい経過したのかわからないが、現在は昼間のよ

うで、その光の中で彼女を見る限り顔色は正常。胸の当たりが規則的に上下しているのがかろうじて確認できた。

何故かろうじて、かというと。同じ色の髪の毛の女性が僕に背を向けてベッドに向かい、うつ伏せになっていたからだ。眠っているようで顔が見えないが、体格からしてユファちゃんの母親だろう。僕が眩暈で倒れたときに結構な音がしたのに、目を覚ましていないところを見ると、余程疲れているのかもしれない。

そして。僕はその反対側、木で作られた棚と並べられている瓶とおぼしきものを見て。

「あー、ここ。バスク先生の診療所か」

何度か来たことがあるこの場所の記憶を探り当てた。

「……そっか。よかった」

僕は大きく息を吐く。

何がどうなったのか、ここでようやく推察できるようになっていた。そうして今が太陽が昇っている昼間であることにも安堵した。明るいし、暖かい。

僕は光が差し込む窓の方へ左手を伸ばす。太陽の光。それ自体には届かない。それでも反射による温もりは充分に感じ取れる。

自分たちを包み込んでいた暗闇は取り払われたのだと、僕はようやく実感出来た気でいたのだけれど。

不意に、左手の甲に青白い光が灯る。と同時に、左手から全身に向かつて刺すような痛みが走った。

次の瞬間。

青白い光は手の甲に船の碇に似た形を象り、ぼっ、と炎のように燃え上がった。

「……っ!？」

あっという間にそれは消え去ったのだが、左手の甲には青白い光が象ったものの形そのままの痣が刻まれていた。

僕の耳に、今はもう聞こえないはずの【グラン・ヴ・ディール】の音が甦る。

『くくく。知りたいか。ならば、知れ』

『そなたは我らと似て非なるもの。【二重^{ふたえ}】に重なりし異なる色を持ちし者。それ故の異端。それ故の力。我らはそれを見たいのだ。そして知りたい。されどそなたは未だ未熟。よって今はそなたを生かすことにしたのよ。いずれ、刈り取るためのう』

『既に印は付いた。それが証よ』

暗闇が、僕の後ろからやってきて包み込んでいく。そんな気がした。

太陽の光があろうが、その暗闇は光を飲み込み、僕を飲み込み、さらに大きくなっていく。

温まったはずの体が、青白い光によって熱を奪われたとも言えはいいだろうか。

暗闇の中で感じた冷たさが甦ってきて、僕は冷え切った自分の体を抱きかかえることになった。

『それは我らを示すもの。近くあればそなたを導く』

あの魔物との出会い、会話が再生されていく。

その答えは、僕がああ【グラン・ヴ・デール】に今も、そしてこれから先も囚われ続けるということ。

死を逃れた安堵はある。けれど、それは単に先送りされたに過ぎないことであるのは明らかで。いずれは死を与えられるという恐怖に変わりはない。

全身を刺すような痛みを感じて僕は小さくうずくまった。

「なんだって、僕がこんな目に……」

前世の記憶を取り戻してからというものの、イベント目白押しすぎ

やしないだろうか。

前世に、魔法に、幼馴染みに、魔物遭遇。更には、死亡フラグの立った左手の印。

僕が望んでいたのは、こんな山あり谷ありの波瀾万丈な人生じゃなく、平凡で平穏な普通の生活だったはずなのに。RPGじゃあるまいし、あんまりだ。

どうして、前世の記憶なんて甦ったんだ。

どうして、【橋本誠也】の死をそのままそつとしておいてくれなかったんだ。

どうして、【ダット】がこんな目に遭わされる！

「う……うつつ」

いっそのこと、発狂できていたのならまだよかったのかもしれない。

幼い少年のまま、未熟な精神のままなら、そう出来ていたかもしれない。

でも。僕は子どもの体の中に大人の思考を併せ持っている。

だからこそ

「ふざけるなあっ！」

沸々と湧き上がってきたのは、怒りだった。

それは、恐怖を克服するための逃げ場所でもある。

目を閉じれば、あの暗闇が。青白い光が甦ってしまう。

触れた手から【生氣】を奪われるあの感触が、つい先ほど起こったばかりだと、そう錯覚させてしまう。

思い出したくないことだったが、思い出さずにはられないほど闇の中での出来事は強烈だったし、恐怖を呼び起こした。

だけど、だからってそこで大人しくしてられるほど……僕は弱くない。

そう信じたくて、【生氣】を失い、冷たくなっている体を温めたくて、叫んだのだと思う。

「っ！？」

僕の叫びに反応して、ユファちゃんのお母さんが飛び起きる気配がした。

更に。

「ダット！」

遠くから近くへやってくる耳慣れた声。

はっと顔を上げると、鮮やかな金色の渦が視界に飛び込んできた。

笑みではなくて、必死さを覗かせるその人は。

「……かあ、さん」

「ダット！」

僕が彼女を呼ぶなり、その瞳に涙が浮かぶ。

ああ。これで何度目になるんだろう。

あの後頭部をぶつけた事件からずっと泣かせ続けているようかどうかという顔をしていいかもわからない。

「ごめん。また、泣かせちゃった」

情けないことに、他の言葉が浮かばなかった。

そう言うしかなくて、目を伏せた僕に母さんは笑う。

「無事なら、いいの」

頬にそっと暖かな手が当てられて、僕は。

「……うん」

その優しさに身を委ねるようにして、目を閉じるのだった。

僕が目覚めたという知らせはすぐさま自警団事務所に伝わったらしい。

母さんが付きっきりで、僕に薬草入りのスープを飲ませている最中に自警団の団長さんがやってきた。

正直、薬草入りスープは不味いので助かった。と思っていたら、

その後ろから父さんまで現れて「まずはそれを飲め」と強制されてしまった。

うまくいかないものである。

涙が出そうないほど美味しくないスープをどうにか完食。

そのご褒美にと甘い果実を剥く母さんの隣に、団長さんは立っていた。

「すまないが、君には聞きたいことが山ほどある。起き抜けで悪いんだが、答えてもらえるか？」

いつもどっしりと構えた印象の団長さんの顔は、どこか疲れて見える。

僕が頷くと、彼は隣で寝静まっているユファちゃんを気の毒そうに見つめた。

自警団の仕事に関わることだから、とユファちゃんのお母さんには席を外してもらっている。だがそれは建前で、目覚める度に恐怖に怯えるユファちゃんを見続けた彼女の心を思っただけの計らいだったようだ。

それなら母さんも。とも思うんだけど。彼女は頑としてそれを聞き入れなかったのもそのままだけにいる。

あまり聞かせたくない内容、なんだけどな。

「彼女は君よりも先に目が覚めたんだがね。錯乱していて、断片的にしか情報をもらえなかったんだ。それでもとんでもない事態だという認識は持つことが出来たんだが」

「……どこまで、聞いたんですか？」

「【グラン・ヴ・デール】」

団長がその名称を呟いた途端、母さんがびくつと震えた。ホラ、言わんこつちやない。

父さんがその後ろで、母さんの肩を優しく撫でて落ち着かせる。

「あれが出たと聞いた。少ないが、町中でも目撃者がいる」

「それ、頭が骸骨の青白っぽいやつですか？」

「そうだ。聞いた話では笑い声を上げながら去っていったらしい。

君が遭遇したのはそいつか？」

団長さんは僕の様子を注意深く窺っているように見えた。きつと、どこかおかしなところがないかを探っているんだろう。

「そうです」

僕は頷いて、あの【グラン・ヴ・デール】に触れられた左手を右手で覆う。

「本当なら、僕たちはアレに遭遇した時点で死んでました。でも、あいつは」

僕に触れた途端、態度を変えた。

その理由も、僕に語ってみせた。

これをこのまま話していいものか、僕は迷っていた。

「ダット」

包丁と果実を手放した母さんの手が、僕の両手に重ねられる。

冷たく冷え切っている僕の手とは違う、温かい手。

「言いたくないのなら、言わなくてもいいの」

優しい母さんだからこそその言葉だったが。

「いや、話してもらわなくては困る」

自警団の団長としての立場からだろうか。彼はぱっさり母さんの思いやりを切り捨てた。

「そんなんっ」

母さんが立ち上がった拍子に金色の波が僕の目の前で踊る。

でも、それを止めたのは父さんで。

「キーラ」

母さんの肩を掴んで、自分の方向に引き寄せる。

「ガリオ、どうして……」

「すまないキーラ。だがこれがこの町を守る自警団としての務めなんだ。だから」

父親としてのジレンマもあるはずだが、父さんはちゃんと自分の務めを理解していた。

僕一人よりも、町を守ることを優先したのだ。

父さんと母さんの間で、複雑な視線のやり取りが行われる。
その最中。

「大丈夫だから」

僕は母さんを見上げて笑って見せた。

「だから、ちゃんと側にいて」

それは、息子から母へのお願いで。

「……ダット」

潤む瞳をそのままに、彼女はそっと僕を抱きしめてくれた。

人前だから恥ずかしい気もするけど、この際それに甘える。

人肌の暖かさを得て、僕は団長さんを見上げた。

「僕はあの【グラン・ヴ・デール】に触れた【半死人】です」

課せられたものの決断

実体を持たない魔物【グラン・ヴ・ディール】。

彼らは【魔素】を纏い、形を成しているとも言われているが、その実、生物の【生气】を糧として存在している。

それはこの世界に生きる者であれば、幼い頃に聞かされる恐ろしい警告だ。

彼らに物質的な攻撃方法は通用しない。

魔法だけが彼らに抗うための手段であり、それが出来なければ逃げろというのが定石である。

そして捕まれば最後、彼らに触れた者は例外なく【生气】を奪われ死に至る。

稀にすぐには死なない例もあるようだが、生者の証を奪われたのだ。そうなった者にはもう、未来はない。肉体は温かみを失い、精神を病み、幾ばくかの年月を経て心の臓は停止する。

故に人はそうなった者たちのことを【半死人】と呼ぶのだが、僕が告げた事実に団長さんは驚かなかった。そして父さんも、少しだけ表情を険しくしたけれどそれだけだ。

その中で。

「……違う」

母さんだけが、僕の言葉に過剰反応を示した。

「違う、わよね？」

【生气】を失い、冷え切った僕の体を支える手に力がこもる。違う、そんなことはない。認められない。

そんな気持ち伝わってくるため、嫌でもわかる。彼らは僕が【半死人】となったであろうことに気が付いていたのだと。

それもそのはず。今現在も僕の体は冷たいまま、心臓の鼓動も弱々しくしか感じられない。

診療所にいる時点で医者にはそれら全てを診られているだろうし、あれからどれぐらいの時間が経過したのは知らないが、この両親が【グラン・ヴ・デール】のことを聞いて、こうなった僕とその関連を疑わないわけではない。

「ごめん。母さん」

これ以上、泣かせたくはないのに僕は母さんを慰められない。

その現実には僕は苦笑する。

「違うないんだ。僕はいつに触れた。そして【生氣】を奪われて、でも生き残った。あの【グラン・ヴ・デール】の気まぐれでね」「ダット！」

お願いだから、そんなことは言わないで。

そのひとことに全てが込められていた。

けれどこれは純然たる事実であり、そして少しだけ違っていった。

「大丈夫だよ母さん。僕はまだ当分死なない。【半死人】ではあるけど、あいつの目的が果たされるまでは生かされ続ける」

おそらく

僕の予想が正しければ、あの【グラン・ヴ・デール】が残した左手の【印】はそういうものだ。

あいつの言う力を手にするその時まで、僕は生きることになるだろう。

「【グラン・ヴ・デール】は、僕に興味を持っていた。ううん。僕というか、僕が持つある力と言った方がいいかもしれない」

あまり、思い出さたくないあの光景。

【グラン・ヴ・デール】はお気に入りの玩具を見つけたと言わんばかりに愉しげだった。

「お前の、持つ、力？」

「うん。残念ながら僕にその自覚はないんだけど。あいつは僕に触れることで、僕に何かそういうものがあるっていうことに気がついたみたいなんだ。あいつはそれを手にした僕を刈りたいと言っていた」

「 ということは」

「ここまで言えば、あとは自ずと答えは見えてくる。僕が頷くと、父さんも団長さんも押し黙った。

そうするしかなかったのかもしれない。

「僕の左手には、あいつの印が付けられてる。あいつの言う力がなんなのかはわからないけど、僕がそれを手にしたら、きつとあいつは現れる。だから、それまでは僕も生きることが出来ると思う。町に関してはなんとも言えないけど。何もせずに去ったのであれば、町の住人には興味がなかったってことじゃないかな」

僕という標的を見つけたことで、【グラン・ヴ・ディール】は満足しているように見えた。だからこそ、ユファちゃんを見逃すなどということをしたのだ。

隣に設置されたベッドの上で静かな寝息を立てる少女を見て、僕はシーツを握りしめる。

「ダット。彼女は……?」

父さんが釣られてか、ユファちゃんの様子を窺う。声色から、彼女が僕と同じ状況に置かれているのではないかという心配をしているのだとわかった。

バスク先生が診てくれているから彼女が僕とは違うことを知っているはず

そう考えたが、もし僕が気を失った後に【グラン・ヴ・ディール】が戻ってきていたとしたら。ということに思い当たった。

けれど、彼女の血色は良いようだったし、あの時の【グラン・ヴ・ディール】の様子からしてそれは考えにくい。あの言葉が信用できるのならば、だが。

「彼女の体温は?」

触れられていなければ、正常のはずだ。

「バスク先生は大丈夫だと言っていたんだが……」
父さんは言い淀んだ。

そこで僕は最初に彼女が錯乱していたという話を思い出す。

ユファちゃんは、あの暗闇の中、恐怖の対象となる存在に遭遇し、極限状態の中で僕の【生氣】が奪われる様を目撃し、そして触れる寸前まで近づかれた。

まともな子どもの精神では耐えられないのも頷ける。けれど。

「バスク先生の診断で間違ってるよ。ユファちゃんはいいつには触れてない」

少なくとも、身体的には問題ないはずだ。

もし、先にあいつが彼女に触れていたら違っていただろうけど。それを考えた自分にぞつとして、唇を噛んだ。

「そうか。ならいい」

父さんはそう言うのと、笑みを浮かべる。

「よく、彼女を守ったな」

「……褒めてくれるんだ？」

むしろ、ユファちゃんが錯乱していると聞いて「守れなかった」と感じているところなのに。

「当たり前だ」

彼は父親の顔をして嬉しそうに頷いた。

「お前は、彼女の命を自分の命を張って助けた。それは要するに女を守る男になったってことだぞ。褒めるに決まってるだろうが。」

お前はオレの自慢の息子だよ」

特に照れた様子もなくそれを言えてしまえるのは、やはりこの国が日本と違うからだろうか。

言われた方としては、物凄く恥ずかしいんですけど。

「う、あ。ありがとう。父さん」

あまり顔色が良くないだろう頬に熱が集まる。

【生氣】を奪われても、こういう時には熱を感じられるという「こ」がわかって少し嬉しい。

父さんに褒められることも、もちろんのことだ。

母さんが僕と父さんのやり取りを見て、ぎゅっと僕を抱く手に力

を込める。

「そうね。あなたはユファちゃんを救ったのよね」

少しだけ穏やかになった母さんの表情に胸をなで下ろして、僕はただ一人何も言わない団長さんを見上げた。

団長さんの口元は引き結ばれていて、表情も硬い。僕たち親子の傍目から見たら恥ずかしいだろう光景を堪えているのかにも見えたが、目はそう言っていなかった。

何か重要なことを考えている。そんな目だ。

「団長さん？」

声をかけると彼はゆっくりと僕に視線を合わせた。

「まだ、他にも聞くことがあるんですよね？」

「……ある、というか。あつた、というべきか」

団長さんはそう言うのと深く息をついて頭を掻いた。

「君たちふたりが閉じこめられた経緯や、その犯人のことも、と思つたんだが、君の話の内容が思つた以上に深刻なのでね。領主さまに取り急ぎ報告する必要があると思うだ」

「団長……」

父さんが領主という言葉に反応した。表情には驚きと不安。その両方が表れている。

「すまない。ガリオ。これは私一人の采配で決めていいことではない。君の息子の急激な性格の変化も、この件がなければ多少奇妙でも「そういうこともある」で済んでいただろうが……」

意図したことではなくとも【グラン・ヴ・デール】が出現し、僕に興味を示して印を残したことは無視できない。

つまりはそういうことなのだ。

「これまで【グラン・ヴ・デール】が意図的に誰かを生かし、刈ると宣言したことなど聞いたことがない。捜せばあるのかもしれないが、だとしてもこの状況は放置しておけることでもないだろう。

手遅れになる前に、何か手を考えるべきだ。それはお前でもわかるだろう」

「……一人の子どもの命よりも、大勢の命が大事、と。そういうことですか」

「そこまでは言っていない。お前の息子が大事だという思いも理解している。だが、自警団の持つ役割を忘れてくれるな。つまりはそういうことだ」

団長さんと父さんの間に緊張が走る。

団長さんの言っていることは至極まともだ。そして父さんが思うことも、人としては間違っていない。

「できるだけ君たちには配慮しよう。ただ、過度の期待はしてくれな」

団長さんはそう告げると診療所の病室から去っていった。

父さんは追わない。というより追えないというのが正しいだろうか。

自警団員から見れば、団長さんの決断は間違いじゃない。組織に属する人間として、制服を着てこの場にいる以上、父さんは自警団員として振る舞うしかないのだ。

「ガリオ」

母さんが父さんの腕にそっと触れる。

「父さん」

僕が呼ぶと、父さんが振り返る。

「すまん。ダット」

これからのことを思っただけか、父さんの体は震えていた。泣いているように見えるが、瞳には涙の欠片も見られない。

「お前を、守ってやれないかもしれない」

「うん」

そんなことは、団長さんに真実を告げるときに気が付いていた。ただ。

「僕こそ、変な息子でごめんね」

両親の子どもとして生まれてきたのに、こんなところで二人に辛い思いをさせることを申し訳なく思う。

そして。

もう、ここにいてはいけない。

そんな思いが、僕の胸の内に生まれていた。

幼馴染み、襲来 (2)

僕が目覚めたのは、あの避難誘導訓練の日から三日後の昼だったらしい。

団長さんが去った後、僕は父さんから事のあらましを全て聞いた。そして、その内容は僕の全身から血の気を引かせるに十分なものであったと言える。

まず、事の起り。

これは、僕があの場合で想像したのとさほど変わらないものだったらしい。

ギド・ルヴェール。

ライナとは犬猿の仲の少年が、最近僕とライナが離ればなれになつて生活しているのを発見、観察して報復の機会を窺っていたとのこと。

それと共にユファちゃんに対してもフラれた腹いせをしようと東区の封鎖区域 古くて脆くなつており、建て替えが検討されていた建物のある場所 で見つけた地下牢を利用することにしたそうだ。

計画としては、避難誘導訓練を使ってまずユファちゃんに「謝りたい」と誘拐。彼女の弟に「忘れ物をしたから取りに戻った。自警団の人には怒られるから内緒」と吹き込み不安を煽らせ、まずエリクを僕から引き離し、隔離。その後僕にもそれを探しに行かせるように、し向ける。というものだったらしい。が、僕の性格が以前とは変化してたことが原因で行動順が逆になってしまった。僕のみが眠らされてユファちゃんと一緒にその地下牢に放り込まれた。

ちなみにあの甘い匂いは思った通り眠り薬だったようで、入手先

は、ギドの知り合いの柄が悪い連中だったとか。

そいつらも今回の件で捕まった。

それはともかく。

当初の予定とは違ったものの、ライナをやりこめるには僕一人が人質にいれば問題ない、と判断したようだ。

戻ってこない僕を心配したエリクとライナで手分けしての捜索中、ほくほく顔の彼らがライナに接触。僕のことを盾にして暴行を加えようとしたらしい。が。ライナがそんなことで屈服するはずもなく「要はあんたたちを叩きのめして、ダットの居場所を吐かせればいだけでしょ！」

と手持ちの魔法を駆使して、抵抗。

相手にも天才と呼ばれる魔法使いの少年がいて、一進一退の攻防を繰り返したとか。

その話を聞いたときは、僕の顔はきつと呆けていたに違いない。

だってそれ、もう子どももの喧嘩じゃないか？

そう思ったのは僕だけではなかったらしい。この話を聞いた全員が似たような反応を返したそうだ。

そして、その時点でライナと少年たちの攻防は学校や自警団に所属する魔法使いたちに知られることとなった。

魔法の気配に聡い数人が慌てて現場に急行。

しかし。

彼らがその現場にたどり着いた時には全てが終わってしまっていたそうだ。

現場は、静かなものだったという。

子どもたちはただ呆然と宙を見上げ、気を失っている者もいた。

何があったと問いつめる大人たちに、一人の子どもはこう言った
そうだ。

【グラン・ヴ・ディール】が出た、と。

そこからは自警団だけではない、町全体が大騒ぎになった。

【グラン・ヴ・デイル】を見たという子どもたちは全員保護。事情を聞いて、そこで僕とユファちゃんが古い地下牢に閉じ込められているということを知り救出。

町のあちらこちらで【グラン・ヴ・デイル】が出たという情報が交錯し、今に至ったとのことだった。

それで「ライナは？」と尋ねてみると彼女は無事だという返答が戻ってきてほつとする。が、途中でエリクが駆けつけて参戦したとかしないとかいう話が追加されると僕は頭を抱えなくなった。

つまりは二人とも【グラン・ヴ・デイル】遭遇したということ

で。

……危ない。危なすぎる。

冷え切った体が更に冷えた気がしてたまらなかった。

そして。最も、僕が気にかかったのはこの後の話で。

「ギド・ルヴェールが消えた」

諸悪の根元とも言える首謀者の消失。

【グラン・ヴ・デイル】に包み込まれるようにして、彼の存在

はその場から消えてしまったそうだ。それが何を意味するのか僕は考えたくなくて、ベッドの上に沈み込むしか出来なかった。

そんなことを聞いた翌日のこと。

束の間の平穏を診療所のベッドの上で過ごしていた僕の耳に、届いたのは診療所にあるまじき騒音だった。

がたんっ。ばたばたばたばた。

枕を背もたれに見立て、相変わらずの青空を覗かせる窓をぼうつと診ていた僕は、唐突に勢いよくやってきたそれに目を見張る。

最初は銀色。

「ダット！」

次に、赤。

「ば、ライナっ。ここ診療所」

瞬時に視界が塞がれ、衝撃を覚えたと思ったら。

どたん！

床に叩き付けられてました。

何がどうなったかというところ。

一、ライナがベッドの上に座ってた僕に追突。

二、勢いで僕が後ろに倒れ込んだ。

三、それがベッドの端で。

四、勢いを押さえ込めなかった僕ごと床に墜落。

とまあ、こんな感じ。

はつきり言おう。

体力やら力やら、生気やらなくしてる人間にすることじゃあない。さらに言うなら、落ちるときに一回転して僕が下でライナが上。

体格も現時点では彼女の方が優位に立っているから当然重い。

「あつ、ごめんっ」

謝る前にどけ、と言いたい所なんだがね。お嬢さん。

下から睨み上げると、ライナはすぐさまぱつと立ち上がった。

「大丈夫？」

手を貸してもらえるのは非情にありがたい。

僕はライナが出した右手を掴んで。

「ひゃっ！」

振り払われた。

……嫌がらせか。このやろつ。

いや、原因はわかってるけど。こつもあからさまにやられると凹

んでしまっわけ。

「う、ごめん」

僕の表情に気付いたんだろうライナが俯く。

「いや、いいよ。それ、多分普通の反応だから」

今度は自分一人の力で立ち上がって、僕はベッドに座り直す。と。

「普通じゃないよ！」

ライナに怒鳴られた。しかも。

「なんでダットはそうなの？　なんでそうやって当たり前に普通じゃないって言えるのよ！」

ほつぺたをぐにーっと伸ばされました。

痛い。

「ひよっ、はいあ。ふはっ」

「このバカっ。どれだけあたしが心配したと思ってるの！」

全くの容赦なし。痛がる僕のほつぺたを縦に横にと伸びるだけ伸ばしまくる。

痛い、千切れる。わかったからっ。

「はいあっ、ひはっ。ほほ、ひふひおうひよはひよっ！」

そう。ここは診療所。

ちなみに隣のベッドにはユファちゃんが寝てるんですけどっ！

誰か大人がいれば止めてくれたんだろっけど。

何故か都合良くウチの両親とユファちゃんの両親は一旦自宅に帰って不在だったりする。

つまり止める人間がいな……

「こんのアホが！」

ゴン、という衝撃と共に頬からライナの指が外れた。っていうか最後のぴんって引っ張られたから今までより痛かったんですけど。

「くうううっ！」

ふと見れば、ライナは二つに分けた髪の実ん中当たりを抑えて蹲っている。

そして。

「……ここ、診療所だったの」

常識人的発言をしてくださったのは、あきれ顔のエリクだった。

「あっ」

そうか。と僕は赤くなった両頬を抑えながらエリクを見る。病室に入ってきたのは二人だった。と今更思い返して嘆息した。

あらためまして幼馴染み(2)

大騒ぎした割に、ユファちゃんが目が覚まさなかったのは幸いだ
った。

ユファちゃんが錯乱している。というのは本当のようで、目を覚
ますたびに泣く、喚く、を繰り返す。

僕もそれを横で見っていたけど、これでも最初よりはマシになった
そうだ。

「……ユファ。大丈夫なの？」

彼女が眠る姿をそっと見やって、頭に二つのこぶを作ったライナ
は不安そうに呟く。

ちなみに増えたこぶの原因はエリクに続き、騒ぎに気が付いたこ
の診療所の主であるバスク先生によるもの。拳骨を落とされたライ
ナはいささか不服そうだったが、騒いだのは事実なので黙っていた
けれど。

と、それはどうでもよくて。

「バスク先生は体の方はなんともないって言ってたよ。ただ……あ
れだけ怖い思いしたら、ね」

今日の昼にも一度目を覚ました時はひとしきり泣いて、僕を見つ
けると大人しくなってそのまま眠ってしまった。

……こういうの、日本でなんていったっけ。

PTSDとかなんとか。

詳しくは覚えてないけど。

「ダットは平気なわけ？」

ライナが僕を窺うように首を傾げる。

心配してそう言ってくれているのだろうけれど、あまり思い出し
たくはないので別の話題を振ってみた。

「起きてからずっと、三食薬草スープだってこと以外は大丈夫」

それにうまく乗ってくれたのはエリクで「うげえ」嫌そうな顔になった。この顔は多分飲んだことがあるという証だろう。

「オレはもう、あれだけは食いたくねえ」

「子どもにあんな不味いもの飲ませようと思うこと自体が間違ってる気がするんだよね」

「あれは食べ物じゃない」

うん。それには僕も同意する。

この薬草スープ。栄養満点でかなり効くという評判でもある。が。苦いわ、不味いわ、口当たり最悪というマイナスイ面が大きすぎて子どもはもちろんのこと、大人も不味いと評判だった。

「だよ。僕ももう遠慮したい。でも母さんが、一掬いも残すな。って顔で見張ってて。毎食泣きそう」

「うわあ。それ最悪だろ。どんなゴーモンだよ……」

二人して感慨深く頷いていると、ライナが呆れたようにため息を吐くのが聞こえた。

「ガキなんだから」

とは言いつつ、彼女の顔はどこかほっとしているように見える。

「十歳は子どもでしょ」

そう言えば、何か言いたそうな顔をしていたけど。諦めたようにまたため息を吐かれた。

子どもが子どもらしい態度を取って何が悪い。

まあ、僕の中身は……置いておいて。

体が子どもなんだからそういうことにしておいてもいいよね。

「……でも、冗談は抜きにしても僕は平気。ライナたちもアレに遭ったって聞いたけど。その様子だと大丈夫そうだね」

一部、平気では居られなかった人間も隣のベッドにいるわけだけれど。

アレ、と口に出すとエリクもライナも一瞬びくりと肩を震わせた。む。意外とトラウマになっているのだろうか。エリクはばつが悪

そうに視線を逸らしたし、ライナもむすつと唇を硬く引き結んで俯いてしまった。

しまった。せつかく笑い話で逸らしたのに、わざわざ引き戻しちやった？

なんて思った矢先。

「ごめんね。ダット」

ライナがいきなり謝罪してきた。

「あたしがバカだったの。ダットがこんな目にあっただのは、あたしのせい。あたしが……ダットから離れなかったら、ダットはこんな風になることなんてなかったのに」

こんな風、というのは僕が【半死人】になってしまった件だろう。だが、僕からしてみればそれはライナのせいじゃなくて、僕やユファちゃんを地下牢に閉じ込めたギドが悪いだけの話だ。

「それはライナが責任を感じる事じゃないよ。元凶はギドだし」

まあそのギドも行方不明だということだし。話を聞いての予想だけど、多分生きてはいないだろう。

子どもの復讐劇。その結末としては最悪と言っていいので、それをいい気味と笑うのは憚られるのだが。

彼についてはその罪もろとも既に裁かれたのだと捉えることも出来る。

「ライナは僕について当たり前の反応を示しただけ。っていうか、むしろびっくりなのはエリクの方だよ」

両親だつて最初は戸惑ったし、【魔物憑き】だとか疑われたりしたのにさ。大事にされているのはわかっていただけけれど、正直今でもちゃんと受け止めてもらえているかの自信はない。

「え、オレ？」

「あの説明で簡単に信じてくれちゃうのが不思議だよ。疑問とかなかったわけ？」

エリクに話を振ると、彼はきよんととして。

「嘘だったのか？」

質問に質問を返す形になってきた。

単純というか、なんというか。だからと言って騙されやすいわけでもないんだけど。悪意には結構敏感だったりする。お人好しだけど。

「いや、嘘は言ってないけど。エリクらしいなあ。と思って」

「……？」

頭で考えるよりも先に直感で行動する典型的な例なので、僕みたいな特殊な人間にはちよつとありがたいかもしれない。

逆に困るのは、ライナのように疑い始めると確認しなければ納得しないタイプだ。

彼女が僕に謝ろうとする理由はわかる。

だけど、それも突き詰めたら僕が原因に違いない。

「ライナ」

彼女の名を呼んで、目を合わせる。

「元々は僕のせいだから、自分を責めないように。謝るなら僕の方が先だよ。【グラン・ヴ・デール】を起こしたのは僕だし」

地下牢を見つけて僕たちを放り込んだのはギドたちだけ。きつかけも多分彼らだろうけど。最後の一押しをしたのはきつと僕だから。【グラン・ヴ・デール】を世に放ってしまった責任は取らなければいけない。

「ごめん。ライナ。怖い思い、させて」

左手に残された印に右手を重ね、僕はライナに頭を下げた。

「違う。ダットのせいじゃない！」

ライナがベッドに手をついて、前のめりになる。その顔は必死で、泣きそうだった。

「あたし、ダットを守れなかった。ずっとずっと守らなきゃって思ってたのに。守れなかった。約束、したのに」

誰と、という言葉は出なかった。でも、知っている。

ずっとずっと以前のことだ。ライナが、エリクと。そして僕が二人と出会った頃の約束。

周囲と溶け込めずにうまくいかなくて、引きこもりかけた【ダット（僕）】にライナが言った言葉。

『ダットをこわいものから、まもってあげる。やくそく、ね』

エリクも巻き込んで、ライナは強く固く誓っていた。

「ごめんなさいっ」

それが限界だったんだろう。ライナの目からぼろぼろと涙がこぼれはじめた。

うわあ。異世界で女の子泣かせたの二人目……いや、三人目？

「ちよ、ライナ。待って」

慌てる僕をよそに、ライナがベッドの上に乗り上げてきて。

「守るから。今度は絶対、守るから。あんな奴に、ダットの命を取らせたりしないからっ」

ぎゅう、と力いっぱい抱きしめられました。

ええ！？ またこのシチュエーション？

冷たくなってしまった僕の体には心地良い暖かさではあるんだけど。

でも、ちよ。くるし……

「あたし、強くなる。たくさん勉強して、ダットを守るようになる。だから。それまで待ってて。絶対、強くなって帰ってくるから」
窒息寸前の僕だったけど、その台詞に込められた何かは感じ取れた。

それはライナが離れ、僕の肩を掴んだ状態で、合った目からも見て取れた。

「ライナ。何、する気？」

何故だか嫌な予感がして、僕は思わず傍観者に徹していたエリクにも視線で確認を取ってしまった。

そのエリクも。

「オレも、強くなる。強くならなきゃいけないんだ」

なんて拳を握っていて、僕は思わず頭を抱えた。

一体何がどうあって、こうなっているんだろつか。

「ちよっと待った！」

僕が理解できるように説明してほしい。

強引に、二人に全部の事情を聞き出した僕が彼らに猛反対するのはこの後すぐのことだった。

起こりうる未来と望み

夢を、見た。

銀色に輝く髪が踊り、赤い髪が跳ねて、そして……全てが紅の海に沈む夢。

その夢の中で、二人は必死に誰かの名前を呼んでいて。

僕はそんな彼らに手を伸ばして 届かないことに絶望する。

その耳に残るのは、いつか聞いた嘲笑。

ククク、カカカ。と青白い光が、倒れ伏した彼らを包み込む。

やめる。

僕が叫んだ。

やめる。彼らは、僕の、大切な

『なればこそ』

耳元でその声は囁く。

『我らはそなたとの再びの邂逅を望むのだ』

背後から襲い来る怖気は、僕に極寒の地にいるかのような錯覚を覚えさせた。

伸ばした手が、ひやりとした感覚に包み込まれる。

青白い光に包まれた、ボロボロのローブから覗く、骨だけの手。

『そなたの力、目覚めさせるに必要であれば……かまわぬ。彼の者らにも印を付けるは一興よ』

ふわり、と重力などないようにソレは僕の前に在った。

前世、日本では理科や医学的によく見てきたもののはずの骸骨の顔。

それなのに、実際目の前にあることで感じる今までにない恐怖。

根本的に、僕たちとは違うと感じ取れてしまうその存在。

生きとし生けるもの全てにとっての天敵。

【生氣】を糧とする亡者と言われる魔物【グラン・ヴ・ディール】が、言う。

『生きよ』

それはおそらく、かの魔物の有り様からすれば矛盾する言葉だったろう。

滑稽にも思えるが、だからこそ【グラン・ヴ・ディール】の言うそれは重く僕の心に響いたのかもしれない。

例えそれが……僕が持つという力目当てだとしても。

『それが人というもの。否。生き物というものよ。生きて、我らに示すがよい。強き心を我に刈らせよ。そなたの力を我らに見せよ』

ぼうつ、と差し出さなかった方の手が【グラン・ヴ・ディール】と同じ色に光る。

『それこそが、我らが望み。我らが宿願。それが成されねば、かの光景は真まことなるうそぞ』

すうつと、【グラン・ヴ・ディール】の姿が横にずれた。

そして目の前に広がる、紅の海。

そこに倒れる、銀と赤とそして……黒に金。

……とう、さん。かあ、さん。

声にならない声が、追加された二人を呼ぶ。

いやだ。やめる。こんなのはもういい

『我らは待つ。【二重ふたえ】の者よ。時満ちるまで 待つておるぞ』

青白い光が、薄れていく。

だが、目の前にある光景は消えてくれない。

そして近づけない。

ただただ眼前で、誰も動かないままに静かにそこに在るだけだった。

なんて。

そんな夢を見てしまったのは、きつとあの二人の話を聞いてしま

ったからだろう。

僕は寝汗でぐっしょりの衣服で額を拭いながら、診療所の天井を見上げる。

窓の外は、まだ暗い。ただし、僕のいる診療所のベッドが置かれたこの空間は【魔道具】の明かりで照らされている。

理由は情けない事ながら、暗闇が怖いからだ。

月明かりや星明かりがあるとはいえ、夜は暗い。その暗さはともすれば、あの【グラン・ヴ・デール】に出会った場所を思い起こさせてしまう。

それは、僕だけではなく隣で静かに眠っているユファちゃんにも言えることだったらしい。

僕はまだ見ていないけれど、明かりがないと彼女は恐怖で泣き叫ぶぞうだ。

僕もだけど、彼女にとってもあの出来事は強烈なトラウマになっているのだと。たった今見た夢で照明されてしまった。

最悪だ。

いや、それよりも最悪なのは……昼間聞いた幼馴染みたちの会話かもしれない。

【グラン・ヴ・デール】に遭遇してしまった彼らは、よりもよって僕を守ると宣言してしまった。

それを目の前で聞いた僕は慌てて止めたわけだけれど。

結果は惨敗。

元々押し強いライナに僕が敵うわけもなく、エリクもまた一度決めたら一直線なので、説得は通用しなかった。

そもそもいつ何処で出没するかもわからない相手にどうするつもりなんだろう、という突っ込みさえも、彼らは無視した。

子どもの思いこみほど恐ろしいものは、ない。

おそらく止めても無駄だろう。

一度はそれで納得した振りをするだろうけど、いずれは目的の為に邁進する。

その気持ちは嬉しいと思わないでもなかったが……
「あんな風にはなつて欲しくないから、止めたのに」

単なる夢だと一笑するのは簡単だ。

けれど、妙に現実味があったのは何故なのか。

その答えはすでに、そこにある。

左の手の甲。【グラン・ヴ・デイル】に触れた印が、淡く青白く光っていた。

だから、なんだろうか。

僕は光を隠すように右手を重ねて握り込む。

この印は、僕と【グラン・ヴ・デイル】を繋げるもの。
だとしたら。

僕の状態を、【グラン・ヴ・デイル】が知ることが出来たなら？

僕が【グラン・ヴ・デイル】の望みに添う行動を起こすように促すことも出来るのではないだろうか。

……考えすぎ、なのかもしれない。
それならいい。

けれど、嫌な予感が拭えない。

【グラン・ヴ・デイル】は神出鬼没な魔物だ。現れるまで、どこにいるのかわからない。実際はまだ側にいて、僕を見ているとしたら……

考えれば、考えるほどに、心は追いつめられていく。

そして、辿り着く答えはひとつだけ。

夢で見たように、自分の力を求めて【グラン・ヴ・デイル】の望む対峙をする以外に方法はない。

相手の望むままにというのは腹が立つが、いずれにせよ、僕の命は【グラン・ヴ・デイル】に握られているのだ。

だったら。

「出来るだけのことを、するだけだ」

夢を、現実にしないうように。

みんなを、守れるように。

僕の内秘められているという力を強く望んで、僕は目蓋を閉じた。

起こりうる未来と望み（後書き）

うっかりミスにて、話を追加。
次は閑話で「ライナの日記」

閑話 「ライナの日記」

ジェシスの月、三日

家に帰ったら、おとうさんがいきなり中身が白紙の本とペンとインクをくれた。

どうやら誕生日のおくりものだったらしい。

王都では、今こついうのに『日記』を書くのが流行りなんだってでも、紙はすごく高価なものでうちはそんなにお金もちじゃないのに。って言ったたら『そのうちお前が養ってくれるんだろっ』ってニヤニヤ笑って言われた。

どうやら、期待されているみたい。

うれしいけど。ちよっとフクザツ。

とりあえず、今日は一回目だしお父さんにありがとうって書いておくことにする。

おとうさん。ありがとう。

ジェシスの月、八日

雨と雷が鳴ってた。

こついう日、ダツトはよくぼーっと外を見る。

いつもはちよっと頼りない感じがするんだけど、こついう時はちよっと大人びて見えるから不思議。

でも授業中はやめた方がいいと思う。先生に当てられて、あたふたしてた。

やっぱり頼りない。

サイスの月、十一日

またバカにからまれた。取り巻きがたくさんいるバカ。力ばかり自慢してるバカ。

バカは昔からだけど、いい加減うつつらしい。ケンカをすると、ダットが悲しそうな顔になるから出来るだけしない。でも、手を出されるとイラッとする。そういうときは黙らせる。

向こうの方が人数多いし、力も強い。体の大きさが違うもの。仕方ない。

だったら、それなりのやり方をするだけ。

バカは先生が苦手。というより、大人が苦手？ よくわからないけど。

こういうときは、先生を呼ぶと面白いように逃げていく。学校でからんでくるの、やめればいいのに。

ルガーの月 十五日

また一つ魔法を覚えた。

【疾風走行】。

初心者には魔導具を使っても制御がむずかしいらしいけど、コツを覚えたら簡単だった。

バカの取り巻きが対抗して【風壁】使って邪魔してこようとしてたけど、逆にその壁を登って一回転して着地してやった。

周りにはあたしの華麗な着地に拍手喝采。バカの取り巻きは悔しそうにしていた。

ざまあみろ。

ルガーの月 二十日

いつも通り学校に行くのにお調子者とダットを誘いに行ったら、キーラおばさんに「今日に行けない」って言われた。

理由を聞いたら頭を打って何日か安静にしてなくちゃいけない
だつて。

ちよつとおばさんの様子がおかしかったように思うけど……なん
だろう？

ルガーの月 二十二日

ダットがおかしくなった。

おみまいに行ったらダットがダットじゃなくなつてた。

記憶喪失であんな風になるの？

嫌だ。信じられない。あんなのダットじゃない。

あんな大人みたいな目……ダットじゃない！

ルガーの月 二十五日

ダットが学校に来るようになった。

いつもみたいに迎えに行きたかったけど、行けなかった。

いつもあたしを窺うように見て柔らかに笑つてたのに、今のダッ
トが見せるのは全然知らない大人みたいな笑い方。

話すときも全然違う。

たどたどしく「おはよう、ライナ」って言つてたダットはいなく
なつてた。

書庫で声をかけられたけどどうしても違和感があつて駄目だった。

絶対おかしい。

ダットは記憶喪失のせいだつて言つてたけど、あれはダットじゃ
ない。

もしかしたら……（この後は書いてインクで線を引いて消してあ
る）

ルガーの月 二十七日

あたしが、バカだった。死んじやいたい。
どうしてあんなことに (字が歪んで、水が染みた跡がある)

ルガーの日 二十八日

あたしは (書きかけて終わっている)

ルガーの月 二十九日

お父さんとお母さんが心配してくれているのは知ってる。でも、
落ち着かない。

だってあれはあたしのせいだから。

どうしてダットがあんな目に遭わないといけないんだろう。

……本当は書きたくないけど。でも、忘れちゃいけないことだから書くことにする。

あのバカが、ダットを誘拐してあたしを呼び出した。

三対一で対決して、どれだけ卑怯なんだろう。その周りも子分
固めて逃げられないようにしてたし。だけど、その時は全部まとめ
て潰せばいいと思ってた。

力では敵わないから、魔法を使った。

向こうも使ったけど、全力で吹っ飛ばした。

ちよっときつくて、途中でエリクが飛び込んできたのは助かった
けど。

それで自分たちが不利になったってわかったんだらうと思う。バ
カが吠えた。

そうしたら……昼間なのに、青い光がバカの前に現れた。

ボロボロの布を来たガイコツ。

見ただけでぞっとした。生きていないってわかったから。

【グラン・ヴ・デイル】。

すぐにその魔物の名前が思い浮かんだ。

思わず【火矢】の魔法を放ったけど、届かなかった。というより弾かれた。

魔物はあたしを見て笑った。顔に表情なんてなかったのに、笑ったんだ。

『かの【二重^{ふたえ}】に連なる者か』って。

魔物と話せるなんて驚いたけど、でも、こいつは言った。

その人に、印を付けていずれ刈り取ると。

エリクが間に立ってくれたけど、【グラン・ヴ・デイル】はそれにも楽しそうにこう答えたんだ。

『いずれ、相まみえるかもしれぬな』って。

そして楽しそうにバカを見て。何か話して。消えた。

バカは……ギド・ルヴェールはいなくなつた。

何がどうなってるのわからなくて。すぐに大人の人が来てくれたんだけど。

その後を知つたんだ。

古い地下牢に閉じ込められたダットと、ユファが【グラン・ヴ・デイル】と出会つたんだ、って。

助け出されて目が覚めたユファちゃんは【グラン・ヴ・デイル】に遭つたって泣き叫んでたらしい。

そしてダットは……目を覚まさなかつた。

今日の朝、学校に行く前にお見舞いに行つたら、まだ眠つたままだった。

キーラおばさんがずっと付いてたみたいけどすごく心配してた。手を握つたら冷たかつた。

ずっと、こうなんだっておばさんは泣きそうだった。

ごめんなさい。あたしたもつとしっかりダットを見ていればよかったのに。

帰るとき、ダットの左手がちょっと青白く光ってたように見えた。
気のせい、かな？

ルガーの月 三十日

ダットが目を覚ましたって聞いて、行ってみた。

ちゃんとベッドの上に座ってたのを見たら、飛びついちゃった。
で、怒られた。

エリクに一発。バスク先生に一発。痛かった。っていうか、エリク。今度覚えてなさいよ。

でも、それでわかったことがある。

昨日見たと思った青白い光。あれは、気のせいじゃなかった。

ダットの左手。そこには前にはなかった【印】があったから。

ダットは隠したがってたけど、でもあたしたちも【グラン・ヴ・デイル】から少しだけ聞いたもの。『いずれは刈り取る』って。

そんなの、駄目。絶対に許さない。

ダットには反対されたけど、もう決めたもの。

今度は絶対にダットを守る。

ずっと前にした約束。絶対に今度は守るからね。

フアーリの月 二日

【グラン・ヴ・デイル】が出たことで、王都から調査隊が来た。

町の人たちに話を聞いて、あたしの所にも聞きに来た。

ダットの所にも、多分行ったんだろうな。すごく偉そうだったけど。

知ってることだけ、全部話した。

何日かはあるんだって。

町の空気がなんだか嫌な感じになってる。

自警団の調査ではあの魔物はもういないって確認されたみたいだけど、あのバカ。ギドはまだ見つからない。

【グラン・ヴ・デイル】と一緒に消えちゃったんだもの。みんなきつともうわかってる。

ギドはもう……

そつだ。ダットの叔母さん。

シエリナ先生も半分は自警団に所属してるから、ここ数日はずっと自警団にいたみたい。

今日、やつと学校で見かけた。

ちよつと疲れてるみたいだったけど、でも声をかけてもつと上の魔法を教えてほしいって頼んでみた。

もつと強くなって、ダットを守るようになりたいから。

理由を聞かれて、それを言ったら「危ないから、駄目」って言われちゃった。

でも、あたしだって本気だもの。

ダットの命をあんな魔物にあげたくないもの。

そう言ったら、シエリナ先生は「もうしばらく待って」だって。どういう意味、なんだろう。

そういえば、エリクが自警団で「剣を教えてほしい」って通い始めたみたい。

魔法が使えないからしかたないんだけど、【グラン・ヴ・デイル】って魔法しか通じないのにどうする気なんだろう。

でも、エリクの方が先に動き始めててちよつと悔しい。

だから、【魔法基礎読本】の魔法を残り全部覚えることにした。きつとそうしたら、シエリナ先生もあたしが本気だってわかってくれる。

ファリーの月 六日

王都からの調査隊が帰ったあと。ダットがバスク先生の診療所から家に戻った。

自分で歩けるみたいだけど、顔色はよくないってシエリナ先生が言ってた。

書庫で忙しく【グラン・ヴ・デール】に関する本を集めてるのを見た。

【半死人】になった人についてなんとか出来ないか調べてるんだって。

あたしも手伝いたかったけど「本が難しいから無理」って言われた。

ファリーの月 十日

エリクのやつ。自警団に通い始めてから、授業中寝てばかりみたい。

隣の教室からよくビュート先生の怒る声がしてる。

あたしは……【魔法基礎読本】の魔法を全部使えるようになった。って言っても使えるだけだけ。

放課後も自主的に訓練場で練習させてもらってたんだもん。

明日はシエリナ先生にそれを言って、ちゃんと次の魔法を教えてもらわなくちゃ。

ファリーの月 十一日

シエリナ先生が落ち込んだ。

書庫の本の中には【半死人】を助けられるようなものがなかったんだって。

王都の魔法学校時代の友だちにも調べてもらえるようにならなければ、そつちに期待するって。

……どうにか出来るといいのに。

ダットはあんまり動いたり出来ないらしくて、まだ学校に来ない。
【半死人】になった人はそんな感じで、寝たきりになることが多いみたい。

そう思うとぞっとした。

落ち込んでるシェリナ先生に【魔法基礎読本】の魔法は全部覚え
たって言ったなら驚かれた。

でも、次の魔法はまだ駄目だって言われた。

やっぱり「もう少し、待ってほしい」だって。

なんで駄目なんだろう。

フアーリの月 十四日

授業中にぐーすか寝てたエリクがいよいよ先生たちに呼び出された。

「勉強する気がないなら来るな」って言われたみたい。

うん。その通りよね。

でも、自警団の剣を教わってる人から「学校はちゃんと行け」とも言われてたんですって。

……エリク。バカよね。

先生たちと自警団の人とで話し合いすることになったって言うって
たわ。

どうするのかしら。

あ、学校からの帰り。たまたまユファのお母さんと会った。

ユファはちよっと落ち着いたみたい。でも暗いところは怖がるから、夜も明かりを灯す【魔道具】がないと眠れないって言った。
ちよっとかわいそう。

フアーリの月 十七日

ダットを救えるかもしれない。

シェリナ先生に会いに書庫に行ったら、知らない男の人と話して最中だった。あとで聞いたら、王都の魔法学校時代の友だちなんだった。

【半死人】を治す手がかりがあったみたい。

本当に、治せたらいいのに。

そうそう。エリクは話し合いの結果、自警団に行くのが一日おきになった。

自主練習は毎日するって意気込んでいたけど。

これで授業中寝なくなるのか疑問な気がする。

ダットにそれを話したら、危ないことはしないで欲しいって怒られた。

でも、ダットを守れるように強くなりたくてはじめたことだもん。

あたしも、エリクも絶対にあきらめないからね。

強くなるもん。

ファアーリの月 十八日

魔法の授業で、昨日シェリナ先生と話していた男の人が参加した。

名前はルーク・ファロイ。【魔導具】や【魔道具】の研究者なんだった。

魔法をそれぞれ披露したら、褒められた。

「君なら王都の魔法学校にも行けるよ」だった。

行けるなら、早く行きたい。早く行って、ダットを守れるようになりたいよ。

ファアーリの月 二十一日

ダットが、カーライルを出て行くかもしれない。

シエリナ先生は【半死人】を治すためには行かないといけないところがあるんだって言ってたけど。

大人たちの、ダットについての噂がすごく嫌。

呪われてるだとか、ダットがいたら町が滅ぶんじゃないかとか。ほんと、やだ。

シエリナ先生は本気で心配してるのに、噂のせいでダットがカーライルにいられなくなってるように聞こえる。

でも、ダットがいなくなるのはもっと嫌。

だから、もしダットが町を出ることになってもあたしだけは絶対に味方にいるからね。

エウイーラの月 十日

ダットが、カーライルを出て行くことになった。

【半死人】を治す研究をしている人に連絡が取れて、その人の所に行かないといけないんだって。

場所は……北のラグドリア帝国。

外国なんて遠すぎるよ。

それに、今のダットが旅なんて出来るかな。

キーラおばさんもだいぶ疲れてるみたいだったし。

すごく、心配だよ。

エウイーラの月 十五日

明日。ダットが、カーライルを出て行く。

おじさんと、おばさんと、それからシエリナ先生と一緒に行くんだって。

あたしも一緒に行きたいけど、でも決めただもんな。ダットを守るくらいに強くなるって。

絶対。絶対に追いかけるから。待っててね。

閑話 「ライナの日記」(後書き)

これにて、カーライル編終了。

大人の都合、子どもの言い分

もうすぐ、冬が来る。

全てが整ったと連絡が来たのは、例年ならばそろそろ雪が降り始めようかという頃だった。

カーライルでそうなのだから、そこから北のラグドリアではもう雪が積もっている所もあるかもしれない。

この世界は比較的温暖な気候ではあるようだが、それでも僕が元いた世界とそれほど変わるところはない。

北に行けば行くほど寒くなるし、南は暖かくなる。

赤道と呼ばれるものがあるのかどうかまではわからなかったけれど、季節感もおおむね日本にいたときと変わりないようだった。

一年の数え方も月の満ち欠けに合わせて十二の月に分類されている。と言っても、これはラグドリア帝国とそこから分離したジードリクス王国に伝わる月の数え方であって他の国ではまた違うらしいとは傭兵をしていたことのある父さんの弁だ。

それはともかくとして。

「寒くは、ない？ 大丈夫？」

いつも通り不安げな顔なのは相変わらずな金髪碧眼美女の母さんだった。ここ一ヶ月半で立て続けに起こった事件のせいか、少しやつれて見える。

僕の前世の記憶が戻ったことに始まり、【グラン・ヴ・ディール】出現騒動、そしてその為の引越。

元々僕について心配し通しだった彼女がこれらのことによって、余計に心労を溜め込んでしまったのは明らかだった。

「大丈夫。平気」

薄暗い雲に覆われた空の下。これでもかというくらい厚着をさせられた僕が頷くと母さんは、いつものようにぎゅゅと僕を抱きしめた。

「それならいいわ」

まだ朝の時間帯だということもあって、ほゅと吐き出された息は白い。

旅に必要な最低限の荷物　着替えと食料と日用品　を入れた
バッグを背負って、僕は出てきたばかりの家を見上げた。

石造りの一軒家。

僕が昨日までの十年間を過ごした生家。

必要なもの以外の品物は、全てこの中に残してある。そう。次にこの家を使う人の為に。

色々な思い出がある住み慣れた家を離れるのは寂しいけれど、もう僕には無用のものだ。

「姉さん。ダット」

声をかけられて振り向けば、そこには僕や母さんと似たような格好のシェリナ叔母さんが立っていた。

「馬車はもう準備出来てるわ。義兄さんは自警団？」

「ええ。最後の挨拶に行ってくるそうよ。馬車のところで待ち合わせなの」

「そう。じゃあ、先に行く？」

「……ええ」

最後の母さんの返事は、家を見上げてのものだ。

彼女もまた、この家に強い思いを抱いていたのかもしれない。それを壊したのは、他ならぬ息子の僕だったわけだけれど。

あれから。

僕が【グラン・ヴ・ディール】と遭遇してから約一月半。

【半死人】となったことであまり動くことの出来ない僕が出来ることは少なかったけれど、その代わりに僕の周囲は、目まぐるしく動き始めていた。

領主さまへの報告、王都からの調査隊の事情聴取、町の人たちに生まれた疑惑。

詳しいことは聞いていないけれど、ライナやエリクは物凄く怒っていた。

「まるで【グラン・ヴ・デール】が出たのがダットのせいだって言われてるみたいで腹が立つわっ」

「元々【魔物憑き】だったんじゃないかねーかって言うバカも居たしなあ」なんて話も見舞いに来るとしていた。

そういう噂もあって、というわけではないようだったが、シエリナ叔母さんは早々に手を打ってくれていたみたいだ。

魔法学校時代の友だちに手紙を送って【半死人】を治す手がかりを捜すように頼んでいたらしい。

叔母さん自身も自分のテリトリーである書庫で調べてくれていたみたいだ。そこでは結局手がかりはなかったようだが、一月ほど前に王都から魔法学校時代の友だちが直接訪ねてきた。

それは家族にとって希望に繋がるもので、クリークス家がカーライルを出て行くことになった直接の原因だった。

シエリナ叔母さんはその知らせを受けるや否や早々に手紙を書いて、その二十日後に返事が来た。

そして決まった行き先は。

「ラグドリア帝国。か」

よもや、隣町どころかジードリクス王国を離れることになるとは誰も思っただけでなかったことだろう。

僕もまさか、そうなるとは思っていなかった。

ラグドリア帝国の国土はジードリクス王国の十倍以上。その分、病の研究に努める学者も多いらしく、【グラン・ヴ・デール】や【半死人】を専門にしている者もいるという。

手紙の返事にはその研究をしている医者に、話をつけておく。という旨も記されていたようだ。

一般庶民の伝手にしては出来過ぎ感もあるのだが、このあたりは

魔法学校時代の友だち（貴族含む）の伝手というのが一つ。【半死人】自体が珍しいので、すぐに目に留まったというのがもう一つの理由らしい。

それにしては……叔母さんが手紙の主に対しての好意が物凄く気になったけど。

そんなことを考えているうちに。

「ダット！」

見慣れた銀色の髪が、ふわりと現れて僕ははっと目を見張る。

「ライナ」

僕よりも軽装ではあるけれど、冬用の厚着をした少女が「間に合ったー」と息を吐く。

その後ろには、しっかりと赤い髪の少年がくっついていたが。

「停車場の方にもう行ってるかと思った……」

「うん。今からだよ」

少し息を乱している二人にそう答えて、僕は笑う。

ライナとエリク。

この二人とも今日でお別れだ。

「ライナちゃん。エリクスくん」

二人に気付いた姉妹がこちらを向く。

「おはようございます。キーラおばさん。シエリナ先生」

「おはよう。ライナちゃん。エリクくん」

「見送りに来てくれたの？　ありがとう」

姉妹の会話は中断したのか、終わったのか。

二人はお互いに顔を見合わせると僕に「そろそろ行きましようかと声をかけた。

ひとまずの目的地はジードリクス王国の王都。

そこへ行く東門から出る馬車に乗るためには、少し歩かなければならない。

促されるままに、歩き出した僕の隣をライナとエリクが固めた。

「ホントに、行くんだな」

ぼそり、と呟いたエリクに。

「これでダットが治るんだったら、いいじゃない」

ライナが不満げに口を尖らせる。

どちらも理解はしていても、納得していないという表情だ。

それもそのはず。

二人は背後のクリークス家だった家が空っぽであることの意味を知っているからだ。

「みんな、勝手よ。全部ダットのせいにして。ダットが町にいられないようにするなんて」

「……だよなあ。都合のいいことばかりしか言わねーし」

彼らの言いたいことは、僕にだってわからないでもない。

けれど、人は自分の目の前にある不安を排除して安定を求めるものだ。

【グラン・ヴ・デール】を思い起こさせる【半死人】は町の人々にとって忌むべきもの。ある意味で穢れを背負った不浄の存在だ。それとは別に、僕が【グラン・ヴ・デール】に印を付けられているということは一部の人間しか知らないことではあるが、そのこともまた僕という不安定要素を排斥という方向へ向かわせたのかもしれないなかった。

だから

「そんなものだと思うけどなあ」

と僕は肩を竦める。

「そりゃ、僕だってそういう目で見られるのは嫌だけど。怖いものを遠ざけたいと思うのって普通のことだよ」

人間は目に見えないこと。自分の理解できないものを恐怖するように出てくるのだから。

それに、誰にも面と向かって町を出て行けなんて言っていない。

僕を忌避する、そういう空気があったのは確かだろうけれど、それだけだ。

僕たちがカーライルを出て行くのは紛れもなく僕たち自身の意志

だし、本当は……自分が独り立ちできる年齢であつたなら一人で町を出ていただろうし。

それなら父さんや母さんはこの町で、思い出のたくさんあるあの家で過ごせていただろう。

【グラン・ヴ・デイル】の目的は僕という存在なわけだし、嫌な目線で見られたり追い出されるように町を去るのは寂しく感じたかもしれない。

だけど、それよりもなによりも。僕が辛いと感じているのは、今、両親を。特に母さんを巻き込んでしまったことだ。

父さんは元傭兵で、国を転々としてきた経験があるから心配はしていない。シエリナ叔母さんだつて何年も地元を離れて生活してきた人だ。これから行くラグドリリア帝国の目的地にも、魔法学校時代の知り合いがいると言う。

でも、母さんは違う。

生まれてからずっとカーライルで暮らしてきた、この場所以外を知らない人だ。

知らない土地、知らない人たちに囲まれて暮らす苦勞を、心身共に疲労した状態の彼女に強いてしまうことになる。

心の強い人ではあるけれど、それがふとした瞬間に途切れたら、と思うと怖い。

そんな状態だからこそ、和氣藹々の別れ、とはいかない。

「ダツトつて、時々すごいよね」

しみみりした空気の中で、ライナが感嘆とした声をあげた。

「なんでそんな風に全部受け止めちゃうかなあ。もつとこつ……えーっと。理不尽？ なことがあつたら怒つてもいいと思うわ」

やや呆れた声色が混ざっているのは良いことなのか、どうなのか。いつつも仕方ないとか。あきらめた顔してるじゃない。なにもかも知つたような顔で怒らないし」

「え、そうだっけ？」

「そうよ。それが自分だからって顔してるし。ちょっと腹立つ。だ

から、いっつもあたしが代わりに怒ってるんじゃない」

「……で、それに俺が巻き込まれるんだよなあ」

じと、とエリクの半眼がライナに向く。

「は？ 何言ってるのよ。半分はあんたのせいでしょ」

「大抵はお前が余計なこと言うからだろーがっ」

僕を真ん中に置いて左右で睨み合いが始まる。

おかしい。ちょっとしんみりしてたはずなのに。

「できれば、僕を挟んではやめてほしいなあ」

どっちもどっちだ。という感想は思わず浮かんだ苦笑いに消されて出てこなかった。

またね。

東門の前には、様々な職業の人々が集まっている。

領主の元で働く役人、町の警護を担う自警団、馬車や馬を預かる厩業、他の町からの商人、その商人に雇われている傭兵など、いくつもの職業の人々が行き交っていた。

特に、ここで重要視されているのは町と町を行き来する際の護衛。つまりは傭兵だ。

王都に近ければ危険度は減るが、ここはジードリクス王国の最西端の町。町自体は外壁に守られているが、その外側はまだまだ魔物の領域と言っている。

町と町の往復する際、五回に一度という確率で魔物と遭遇出来てしまう。これも町の東側の話で、西の砦方向になると三回に一度となるのだ。

大抵は魔法を使わずともなんとかなるレベルの知能の低い魔物だったが、稀に魔法がなければ対処しづらい魔物もいるため、油断はならない。

だからこそ、傭兵という職業に就く人は少なくなかった。

父さんも元はそんな傭兵の一人で、町を出るといことは傭兵に戻るといことでもある。

剣や防具を揃えなければと町を出ることに決まってからあちこち歩き回っていた。

そして、今回僕らが町を出るために用意した移動手段は荷馬車。

カーライル近くで採って長持ちするように加工した山菜や稀少な薬草、獣毛などを隣町へ運ぶ輸送手段でもある。

人間のみを運搬する馬車というのは王都にしかないため、町と町

を移動しようと思うならばこういった荷馬車などに便乗するしかない。

僕は次々を荷が積まれる幌付きの馬車に目をやった。事前に聞いた話だと、人を乗せるように作っていないため、かなり揺れるらしい。

前世では乗り物酔いなどという目にあつたことはないけれど……現状、丈夫と言える体ではないので少々不安だった。

その前方。

「やっぱ、近くで見るとでかいよなあ」

馬車に繋がれた二本角の馬に興味津々なエリクは首が痛くならないのかと思うくらいに真上を見上げている。

「乗りたい？」

騎馬としても使われることは、西の砦へ向かう防衛兵を見ているので知っている。だが、この世界の馬は気性が荒い上にその扱いも難しく、慣らすのにかなりの時間が必要とも聞く。

「そりゃな」

目の前の馬は、見事な栗毛だった。それをうらやましく見上げながら。

「自警団の団長とか、領主さまが乗ってるの見たことあるだろ。かつこいーじゃん」

エリクは目を輝かせている。

そこに茶々を入れたのは定番のライナで。

「……ばっかねえ。いくらカツコよくても、エリクじゃ様にならないわよ」

鼻で笑っていた。

「あれは、自警団の団長や領主さまだからこそカツコいいの。エリクみたいなバカじゃ、馬に舐められておしまいよ」

「なんだとー。じゃあ、お前乗れるのかよ」

「あら。あたしはもちろん乗せてもらう側でしょ。自分の乗るのもいいかもしれないけど、カツコいい男の人の腕に抱き上げられた方

が素敵だもの」

「はあ！？ バカじゃねえ？ なーに夢見ちゃってんの。気持ち悪い」

「何よ。そういうエリクこそ、自分がどんなに間抜け面してるか自覚したら？」

なんなんだろう。これは。

もうすぐ僕はここを去るというのに、いつものごとく始まってしまった少年少女の言い合いに頭を抱える。

「相変わらずねえ」

苦笑いを浮かべて隣に立ったのは母さんだった。

「ダット。体調は大丈夫？」

「うん。平気」

「じゃあ、こっちに来て。見送りに来てくれた人がいるから」

眼前で繰り広げられる舌戦は、いつものことだし放っておいても問題ないだろう。

そのうち勝手に収まる。

「わかった」

そう返事をして向かったのは荷馬車の後方。

シエリナ叔母さんが見送りの人たちに挨拶をしているすぐ近くに、彼女はいた。

茶色の髪の少し疲れた顔をした僕と同じ年の少女。

「ユファ、ちゃん」

あれから、ゆっくりではあるが、彼女の状態は改善したのだと聞かされてはいた。

けれど、正気の状態で面と向かって会うのはあの時から数えてこれが初めてになる。

お母さんに付き添われたユファちゃんは伏し目がちの視線を僕に向け。

「ダット、くん」

ほっとしたように小さく笑う。

「やっと、会えた」

彼女はそう言っ僕の手を取る。

【生氣】を奪われた僕の手は冷たいだろうに、ユファちゃんは構わず両手で僕の手を握りしめた。

「お礼、言わないといけないって。思ってたの。でも、なかなか言えなくて。ごめんなさい」

「……そんなこと」

「ありがとう」

夜、あまり眠れていないのだろう。

目の下に隈が出来ていた。

それを思うと、その感謝の言葉も申し訳なく思うのだけれど。

「体、良くなるといいね」

心の底からそう言っているかわかるので、否定することも出来ない。そうしてしまったら、彼女の心を踏みにじることになってしまう。

「うん。ありがとう」

純粹に僕を心配してくれている。それは確かで、その言葉も嬉しい。

「ダットくん」

気が付くと、ユファちゃんのお母さんが彼女の手の上に手を重ねていた。

「わたしからもお礼を言わなくちゃ。本当にありがとう。体が良くなるように、お祈りしているわ。キーラさんも」

僕と、母さん、二人に視線を送って、ユファちゃんのお母さんは微笑む。

「すまん。待たせた」

「遅くなりました！」

ぞろぞろと屈強な男たちが大勢でやってきたのはそんな時だ。声と足音が聞こえてきた方向を見れば。

「うわぁ」

困り顔の父さんを先頭にして、十人を超える自警団の制服を着た団員が背後に続いていった。

正直、ちよつと怖い。

というか、何事？

他の見送りの人間も、そうでなく東門で活動している人たちも、皆その集団に注目する。

父さんは僕と母さんに「すまん」と目配せすると、団員に振り返った。

「もういいだろう。ここまで来たんだぞ。ざつさと仕事に戻れ」

「とは言っても副団長」

「あのな。もうオレは副団長じゃない。ヤルクに引き継いだらろうが」

呆れたように嘆息する父さんに、団員たちは「そうですが」と反論した。

「そのヤルク副団長が、しっかり見送って来いって言ったんですよ」

「そうっす。そう命令があつたんっすよ」

「おれたちだけじゃなくて、本当は他の奴らも来たがってました」

「そうですね。本当は団長も見送りに来たかつたはずですよ」

「せつかくくじ引きで当たり引き当てたのに酷いなあ」

「あ、バカ。それ言うなって……」

と、ここまで来て団員同士で揉め始めたので、僕や他の人たちは呆然とその様子を眺めるしかなかった。

「随分、慕われてるわね」

母さんが楽しそうに笑うと。

「そのようだ」

父さんの嘆息が聞こえてくる。

「こら、お前たち。出発が遅れるだろうが」

別れ惜しいが、昼を知らせる鐘が鳴る前にはカーライルを出なければ、ひとまずの目的地である二つ先の町へ日が暮れる前にたどり着けない。

それも、途中魔物に遭遇すれば予定が狂う可能性があるのだ。
それを知っている父さんが騒ぎ出した団員たちの中に割って入っ
てひとまずの騒動は終わりを見せた。

「準備は出来ましたか？」

收拾がついた頃を見計らってやってきたのは人の良さそうな茶色
の髪の青年だ。

カーライルで代々商家を営んでおり、今回父さんとシェリナ叔母
さんが護衛に付くことで、ダットたちを王都まで送ってくれること
になっている。

「すまん。サリム。騒がしくした。時間は大丈夫か？」

「ええ。大丈夫ですよ。ガリオ副団長に直々に護衛して頂けるのは
とてもありがたいことですから。父に話したら喜んで「護衛しても
らえ」と」

「……あまり、買いかぶられるのも困るんだが」

普段自宅で見るとは違う戸惑った表情を浮かべた父さんはひげ
面を引つ掻いて唸る。

そんな父さんを見たサリムさんはにこりと微笑んで。

「では、出発しましょうか」

僕と母さん、そしてシェリナ叔母さんを促した。

すでに自分たちの荷物は馬車の中に入れてある。あとは自分たち
が乗り込むだけだ。

まず、母さんが荷を積むときに使った台を上り、僕がその次、そ
して愛用の剣を手にした父さんが乗って台が取り除かれた。

シェリナ叔母さんは御者台でサリムさんと一緒らしい。

本当は父さんが御者台に行く予定だったようだが。父さんの熊み
たいな体格じゃ、御者台に二人は厳しかったみたいだ。

「ダット！」

口喧嘩を終えたらしいエリクとライナが、やや上方になった荷馬
車上の僕を見上げる。

「絶対、追いかけるから」

「連絡しろよ」

絶対にこれを最後にしない。

その決意が込められた瞳が向けられて、僕は嬉しく思うと同時に不安にもなった。

「本当は……やめて欲しいんだけどな。二人が危ない目に遭うのは嬉しくない」

「それを言うなら、あたしだって同じよ」

「お前が嫌だつっても、無駄だぞ」

とうに分かり切った返答ではあった。

「ダットは、あたしたちの大切なともだち。弟よ。姉のあたしが守るのは当然でしょ」

「げー。ライナが姉ちゃんって。おい。なんだよ。にらむなよ」

「エリクはいらない。あっち行ったら？」

「つて、おまつ。約束はどーした！」

「あんた魔法使えないでしょ。役立たずっ」

「ひでっ。おま、そりゃねーよっ」

もう、彼らを止められない。それがわかっていているから。

周囲の温かな視線もなんのその。

「エリク、ライナ！」

精一杯の大声で、二人の間に割ってはいいる。

しん、と静まりかえった東門で、僕は二人にこう告げた。

「ありがとう。またね」

ぼかん、と目を丸くしたエリクとライナ。

それを合図とするかのように「行きますよ」と荷馬車の前方からサリムさんの声が出た。

むち打つ音がして、荷馬車がかたと揺れる。

それを機に我に返った二人が遠ざかる馬車に向かって歩き出す。

「ダット。あたし……絶対に、絶対に強くなるから。待ってて！」

「またな、ダット。絶対だぞ！ 死ぬなよ！」

その声に重なるようにして、父さんと呼ぶ声、母さんに手を振る

人たちが遠ざかっていく。

見慣れた町の風景が消えたのは、東門を抜けてからしばらく経った頃だった。

がったんごつとんがったんごつとん。

乗り心地に期待してはいけない。

確かに事前にそう聞かされてはいたし、街道も整備されているとはいえ、石畳だったりアスファルトで舗装されているわけでもない。ある程度は平らにならされていても、下は大地。つまりは土。凸凹はあっちこつちに存在している。つまり。

「……母さん、大丈夫？」

「……ダットこそ、平気？」

慣れない人間や、体調不良の人間にとって、長時間の乗車は拷問ということである。

ちなみに父さんは、というと。

「気合いだな」

護衛をしているのだと思えば、気にならないそうだ。

当然のことながら、護衛に雇われている人間が馬車に酔ったでは示しが付かない。

そういうわけで、今まで見たことがないような景色を堪能することなく、僕と母さんは狭い場所に二人して横になっていた。

柔らかい布団なんてものはないから、体のあちこちが痛いけど。

母さんに抱えられるようにして眠りについて、どれぐらい経っただろうか。

一つ目の町に着いたら起こされた。

がちがちになった体を起こすと、一度馬車を下ろされる。

どうやら、サリムさんの目的地の一つに着いたらしい。

どこかの商館らしく「中でしばらく休んで下さい」と僕と母さんは部屋に通され、父さんとシェリナ叔母さんは外でサリムさんの手伝いで馬車に残った。

商館の内部はそこに置かれた調度品などから、そこそこ裕福であることが見受けられた。

この十年で見たことがなかったソファが置いてあることからそれがわかる。

ガチガチになった体を伸ばしていると、温かいお茶が出された。お礼を言っただけ。

子どもがいるからか、出されたのはほのかに甘い赤い色の茶だった。

うん。おいしい。

苦みもないし、味もまろやか。

母さんも気に入ったのか、顔は疲れているけれどもお茶を口に含んだ途端笑顔になった。

そのうちに父さんたちが仕事を終えてサリムさんと一緒に来て、食事に出かけた。

僕や母さんが荷馬車に揺られて寝ているうちに昼は過ぎていたらしい。

とはいえ、またあの揺れを経験するのかと思うとあまり食欲は出なかった。結局簡単なスープだけ口に入れて終わった。

そのまま再び荷馬車に乗り、次の街道へ入る。

積み荷は先ほどの町で三分の一程度が降ろされており、座るスペースも広くなっていた。

なんとなく聞いてみたら、次の町で現在の積み荷の半分をまた降ろすらしい。最終的には王都で荷が空になって、そこからまたカールに持ち帰る荷を順々に積んでいくのだとか。

そしてここで荷馬車が増えた。

特にサリムさんの荷馬車が増えたというわけじゃない。同じ方向へ行く荷馬車と行き会ったというだけのことだ。

サリムさんの荷馬車に父さんやシェリナ叔母さんが護衛として雇われているように、その荷馬車にも護衛が二人ついていた。

時折、馬を休ませる必要があるため、その時に少し交流があった。彼らは先ほどの町よりも南に位置する炭坑町で、鍛冶をする為に必要な鉱石や、自然にしか存在しない【魔鉱石】を仕入れた帰りだということだった。

「加工前の【魔鉱石】？」

僕の胸の位置にぶら下がっている一見装飾品めいた【魔導具】。

【紋章】を刻んだ黒い石。これの加工前というのはあまり見る機会はない。

「お、興味があるのか。じゃあ、ちょっと待ってる」

ある【魔導具】技師と知り合いだという中年の男は荷馬車の荷台をぐそぐそと探り、いくつかの石を僕の前に並べた。

黒、深緑、茶色、灰色。

色も形も輝きも全く違う四種類の石。

彼は自慢げにその中の一つを持ち上げて説明を始めた。

「【魔鉱石】は【魔素】が物質化したもんだってのは知ってるな。

そして、その【魔素】の含有量次第で価値が決まる。【魔素】が多く含まれれば含まれるほど透明度が増すんだ。この場なら、この黒いやつが一番だな」

手のひらに乗せて丁度のサイズ。まるでガラス、とは言わないが向こう側が僅かに透けて見える石だった。

「最高級品とは言わないが、こいつはかなり透明度が高い。この大きさで……そうだな。王都の一軒家が買えるか」

「え……加工前で？」

「ああ。丸ごと売却すればそれぐらいにはなる。普通はこれをもっと小さくて【魔導具】やら【魔道具】にするんだが。ちなみにこっちの深緑」

いびつな形の全く透けていない深緑の石を反対側の手に持って男は説明を続けた。

「これがこの中でも一番価値が低い。と言ってもそれなりの値段にはなるが。坊主が持つてるその【魔導具】もこれくらいの透明度ので作ったやつだな。【魔素】の含有量は低い【魔導具】にするには充分らしい。ああ、そうだ。石の色や透明度によって特性があるってのは知ってるか？」

「えと。これを買うときにちょっとだけ聞いたような」

確か【魔素】は結晶化する際に場所や地形によって色が変わり、相応の癖を持つのだとか。

それ故に【魔導具】は実際手にとって、一番じっくりくるものを選ぶのが普通らしい。

僕の場合はこの黒い石がそうだった。

「【魔鉱石】の色は採れる場所で色々違う。川の中なら青、森の中なら緑、土の中なら茶色か黒って具合にな。俺は魔法の適正がないんで聞いた話でしかないんだが、主に中級とされる魔法や上級魔法に使い勝手の善し悪しが出るそうだ」

「つまり、【魔鉱石】の色によって使う魔法の特性が決まるってこと？」

「ああ。【魔鉱石】が見つかった場所に由来する特性になるんだ。水の中なら水属性の魔法が使いやすくなる、ってな具合にな。坊主の場合、黒い石だから土の中か洞窟で採れたもんだろ。つまり、閻属性や土属性の魔法に適した【魔導具】ってわけだ」

「なるほど」

【魔法基礎読本】には【魔導具】の大切さは書いてあっても属性のことは書いてなかったたのでその説明はなかなか興味深い。

ということは、現状僕はその二つの属性に関して使いやすい状態ということになる。が、魔法の基礎すらまともに終えていない状態では使いやすいも何もない。

それを考えると少しばかり落ち込みかけるが、こればかりは鍛錬あるのみである。

そこへ。

「あら、面白い話をしているのね」

気が付くと周囲を警戒していたはずのシェリナ叔母さんがやってきた。

「おや。こりや美人さんだな」

「それはどうも」

男がにやりと笑うと叔母さんは僕の側に腰を下ろして話に混ざる。

「叔母さん、護衛は？」

そう尋ねると、叔母さんは「少し休めですって」と肩をすくめた。ちなみに母さんは馬車の中で横になったまま眠っている。僕は揺れにほんの少し慣れたおかげかこうして気分転換に荷馬車を降りていたのだ。

叔母さんは男が持った黒と深緑、そして地面に並べられた茶色と灰色の石を見比べて興味を持ったらしい。

「そちらは【魔鉱石】を運んでいるのね。種類もたくさんあるみたいだし、高級品も混ざってるようだけれど」

「ああ、坊主が興味を持ってくれたんでね。説明していたところさ」

男は言って「持ってみるかい？」とシェリナ叔母さんに黒い方の石を差し出した。

「じゃあ、遠慮なく」

向こう側が僅かにだが透けて見えるそれを受け取って、彼女は両手でくるくると石を回し始めた。

「ふうん。かなり純度が高そうね。【魔素】の密度も均等だし、この黒は天然の洞穴で採れたものかしら。すごく落ち着いている」

「ほう。わかるのか」

「ええ。少しはね。これでも一応王都の魔法学校で学んだ身だもの。シェリナ叔母さんは右手の人差し指に嵌めた【魔導具】を見せてにこりと笑う。

だがそれは男にとって思っても見ないものだったらしい。

「おいおい。そりゃ結構な高級品……」

男は目を剥いていた。

それもそのはず。

叔母さんの【魔導具】の【魔鉱石】は透き通った碧で、男の言う価値に照らし合わせれば相当な価値になるだろうことは疑いようがない。

「あんだ、ちゃんとした魔法使いなんだろうが。そいつはなかなかお目にかかれない類のもんだぞ。一体どうやって手に入れた？」

男は食い入るように指輪を見つめる。

いつだったか、普通に買えばそれなりの金額がかかる、という話は叔母さんに聞いていたけれど……

男が相当に驚いている所から見て、流石に僕もそれなりどころではないのかもしれない。と思えてきた。

そんな二つの視線に叔母さんは肩をすくめて。

「自分たちで見つけたのよ」

そう笑う。

男は「はあ!？」と驚きに声を上げていた。

「待て待て。そんな高品質の代物は素人が簡単に見つけられるものじゃ……」

「ええ。だからたまたまなんだけど。留学先の魔法学校の友達に【魔素】に敏感な子がいてね。友だち五人でその子が気になるっていう場所についていったら、大きな木の根本にこれくらいのが露出したの。それを持って帰って五人で分けて、それぞれ【魔導具】を作ったってわけ。まあ、これと相性が合ったのはわたしともうひとりだけだったから、他の人はそれを売って、相性のいい【魔導具】を買う資金にしてわ」

懐かしいわねえ。と彼女は黒い石を示して言うが、男の側からしてみれば信じられないという所か。頭を抱えてしまっている。

叔母さんが手にしている黒い石と同じ大きさというなら、家が一軒分。それを五人で分けたと言ってもそれ相応の額になったはず。

「おいおいおい。おまえさんが持つてるそれと同じに黒いのを加工すりゃ、ラグドリア金貨換算で二枚はいくぞ?」

「ええっ!？」

僕は思ってもみないその額に驚きの声を上げていた。

ラグドリア帝国通貨はジードリクス王国通貨よりも一・五倍ほど価値が高い。

両方とも銅貨、銀貨、金貨、と百枚ごとに価値が上がっていくのだが、通常大人一人が一月ひとつき生きていくのに必要な生活費は食費その他諸々を入れてジードリクス銀貨約十枚。十ヶ月で金貨一枚が必要とされる。

ということは、ラグドリア金貨をジードリクス通貨に換算すると、金貨三枚になるわけで。

ざっと計算して、二年半分の生活費？

「うわぁ」

考えたらとんでもない額だ。

「叔母さん。よくそんなもの、盗られなかったね」

「ああ。それもたまたまよ。見つけたのがその時一緒にいた友だちの家の敷地内だったの。一応その子のお父さんにも相談したんだけど。自分たちには必要ないからって加工できる細工師まで紹介してもらっちゃったのよねえ」

「……まったく。そりゃ一体どんな伝手だよ」

その言いように男は項垂れ、ため息を付いていた。

「【魔鉱石】ってのは【魔素】の含有量が高けりゃ高いほど加工が難しいってのは常識だぞ。その分だけ価格は跳ね上がる。まあ、それだけのものなら加工料を差し引いても問題なかっただろうが」

「そうね。少し余ったんだけど、他の子に合う【魔導具】が思いの外高くて。お金をたくさん持つてるのもちょっと怖かったからそっちに回したの。あ、その時は居たのは全部で五人だったんだけど。それでも余った分をみんなで分けて……それで丁度くらいだったかな。それでも一般庶民が普通に持つてるにはちよっと多いくらいはあったかしら」

と笑う彼女に、僕もまた開いた口が塞がらない。

僕の胸の位置にぶら下がっている【魔導具】はジードリクス銀貨で八枚程度。

初心者向けの汎用品だから仕方ないが、それにしたって格が違う。「叔母さんって凄い」

この場合、叔母さんというよりもその友だちを凄いと言っべきなのだろうけれど、そんな友だちを持った叔母さんもまた凄いのだと僕は思わずにはいらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0544x/>

闇色の二重奏

2011年11月14日12時38分発行